

埋蔵文化財調査報告書38

正木町遺跡(第12次・第13次)
伊勢山中学校遺跡(第8次)
尾張元興寺跡(第9次)
竪三蔵通遺跡(第15次)

2001

名古屋市教育委員会

埋蔵文化財調査報告書38

正木町遺跡(第12次)(第13次)
伊勢山中学校遺跡(第8次)
尾張元興寺跡(第9次)
豎三蔵通遺跡(第15次)

2001

名古屋市教育委員会

例言

- 一、本書は、名古屋市教育委員会が発掘調査を実施した、市内4遺跡5地点の報告である。
- 二、本書収載遺跡は、豎三蔵通遺跡、正木町遺跡、伊勢山中学校遺跡、尾張元興寺跡である。
- 三、発掘調査にかかわる調整事務は市教育委員会文化財保護室がおこない、現地調査は名古屋市見晴台考古資料館が担当した。
- 四、各発掘調査の調査地点、調査期間、調査原因、調査面積、担当者は、下別記のとおりである。
- 五、本書は、各調査担当者の助言をえて、木村有作、野澤則幸、藤井康隆、服部哲也、伊藤厚史が執筆し、全体の編集は藤井がおこなった。

正木町遺跡第12次

調査地点 中区正木一丁目1819
調査期間 平成12年4月19日～平成12年5月12日
調査原因 個人住宅建築
調査面積 約56㎡
担当者 野口泰子、木村有作、藤井康隆

正木町遺跡第13次

調査地点 中区正木一丁目1516-6.7、1505の一部
調査期間 平成12年11月14日～平成12年12月8日
調査原因 店舗兼個人住宅建築
調査面積 約90㎡
担当者 野澤則幸、村木誠

伊勢山中学校遺跡第8次

調査地点 中区正木二丁目707
調査期間 平成12年7月17日～平成12年7月31日
調査原因 個人住宅建築
調査面積 約100㎡
担当者 藤井康隆、伊藤正人

尾張元興寺跡第9次

調査地点 中区正木四丁目1014-1
調査期間 平成12年8月16日～平成12年9月8日
調査原因 個人住宅建築
調査面積 約40㎡
担当者 服部哲也、額額茂

豎三蔵通遺跡第15次

調査地点 中区栄一丁目2519
調査期間 平成12年9月18日～平成12年10月13日
調査原因 個人住宅建築
調査面積 約60㎡
担当者 伊藤厚史、伊藤正人

所載報告総目録

| | |
|------------------------|----|
| 正木町遺跡第12次（木村有作）…………… | 1 |
| 正木町遺跡第13次（野澤則幸）…………… | 17 |
| 伊勢山中学校遺跡第8次（藤井康隆）…………… | 29 |
| 尾張元興寺跡第9次（服部哲也）…………… | 51 |
| 豎三蔵通遺跡第15次（伊藤厚史）…………… | 59 |

正木町遺跡 (第12次)



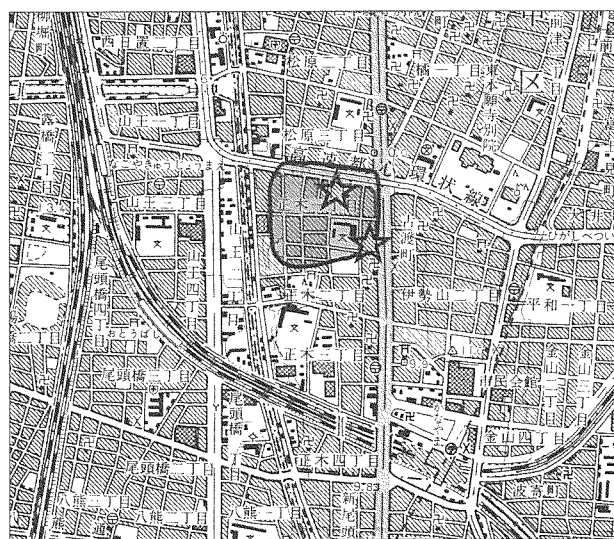
調査区全景(南から)

例言

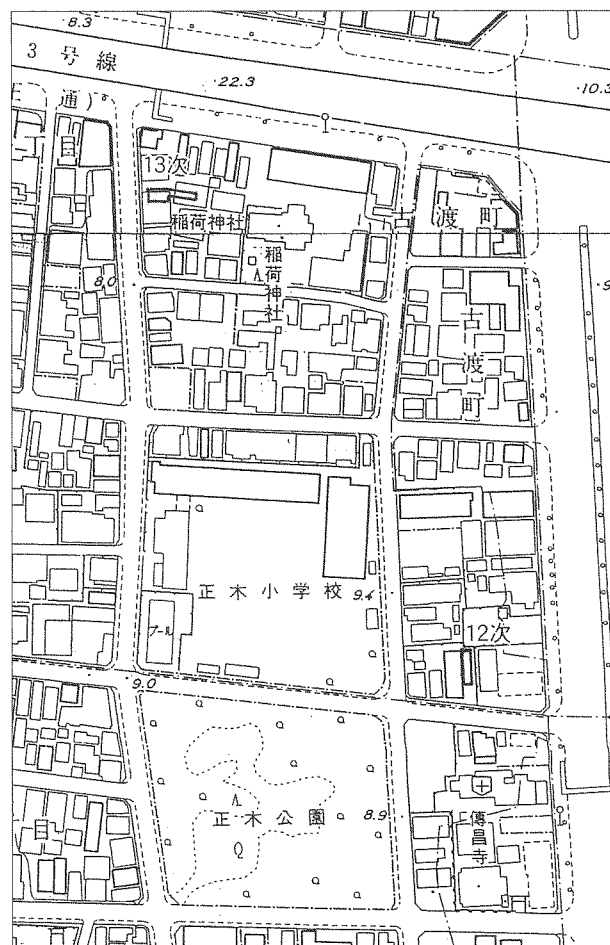
1. 本編は、名古屋市中区正木一丁目1819番で実施した、正木町遺跡第12次発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は、住宅建設に先立ち、56㎡を対象とした。
3. 現地調査期間は、2000(平成12)年4月19日から5月12日までであった。
4. 調査は名古屋市教育局が実施し、調査に関する調整事務は文化財保護室学芸員小島一夫が担当した。発掘調査は名古屋市見晴台考古資料館が実施し、同館学芸員(野口泰子・木村有作・藤井康隆)が担当した。
5. 排土工事は有限会社平田造園に請負契約、基準点・水準点測量業務は株式会社カナエジオマチックスに委託契約して実施した。
6. 資料整理・報告書作成作業参加者は次のとおり。岡地田津、近藤和子、川原則子、池戸裕子、佐々木佳子、山本雅代
7. 本編では、海拔高はT.P.(東京湾の平均海面)を、方位は国土座標第Ⅶ系による座標北を示した。
8. 調査記録・出土遺物は、名古屋市見晴台考古資料館が保管している。
9. 中近世の遺物については、藤澤良祐、金子健一両氏、瓦については服部哲也氏のご教示を得た。
10. 本報告は、見晴台考古資料館学芸員の協力のもと木村有作が執筆した。

目次

| | | |
|-----|------------|----|
| 1 | 正木町遺跡とその周辺 | 3 |
| 2 | 調査の経過 | 5 |
| 3 | 調査の成果 | 6 |
| (1) | 土層と遺構の概要 | 7 |
| (2) | 近代の道路遺構 | 8 |
| (3) | 中近世の「大溝」 | 9 |
| (4) | 古代以前の遺構・遺物 | 12 |
| 4 | まとめ | 16 |



第1図 正木町位置の遺跡(国土地理院1:25000)



第2図 第12・13次調査位置図(1:3000)

1. 正木町遺跡とその周辺

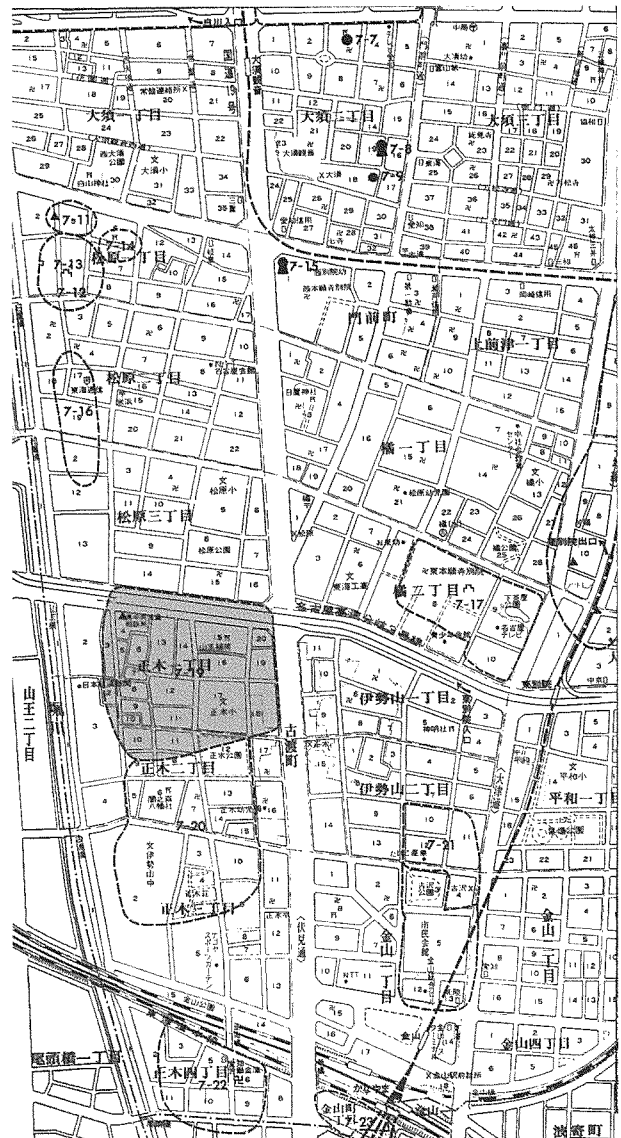
正木町遺跡は、名古屋市中区正木一丁目を中心に、約350m四方を遺跡の範囲とする。遺跡は、堀川に沿って南北に続く台地西縁に立地し、遺跡付近の台地は南西から北西にかけて少し高くなるもののおおむね平坦であり、西側には濃尾平野へと続く沖積地が見渡せる。

正木町遺跡付近は、戦前以来の住宅地であり、復興後も道路・公園が整備され都心地域らしからぬ閑静な住宅地でありつづける。したがって大規模な土地開発はなく、発掘調査原因も個人住宅やマンション建設など小規模を対象とした調査がほとんどをしめる。遺跡全体の構造を把握するには断片的な情報に過ぎないものの、積み上げられてきた調査の成果は遺跡とその周辺の歴史性をうかびあがらせつつある。

正木町遺跡ではこれまで、弥生時代～近世の遺構・遺物がみつかり、5～6世紀の古墳時代後期には竪穴住居などからなる大規模な集落が形成されていたと思われる。古代には、5次調査でみつかった直系径約60cm前後の掘立柱穴からなる倉庫を主とする建物跡群にみられるように、当地方の政治・経済・交通などに関わるような遺構ものこされる。中世には、遺跡南半で大規模な削平工事の痕跡が認められるほか、幅・深さともに1mを越える大溝（堀）が南接する伊勢山中学校遺跡も合わせ各所で発見される。

南接する伊勢山中学校遺跡(7-20)や尾張元興寺遺跡(7-22)でも、主に5～6世紀にかけての竪穴住居跡がみられ、3遺跡にかけての広域の大集落となる可能性もある。南東には、5～7世紀代の墓域である東古渡町遺跡(7-23)があり、熱田台地東縁では古沢町遺跡(7-21)や富士見町遺跡(7-18)など弥生～古墳時代の遺物を豊富に出土する遺跡が展開する。南へ約600mの尾張元興寺遺跡では、尾張最古の寺院と考えられる「願興寺」が7世紀半ば頃建立される。奈良～平安時代も集落が継続し、カマド状遺構を伴う竪穴住居跡や掘立柱建物が発見される。須恵器や土師器など、奈良～平安時代の遺物は量的に最もめだち、市教委1次出土の陶馬のように市内でも希少な出土品もある。また、中世は、1次の井戸状遺構や4次の溝などから、城館等の存在が考えられる。正木町遺跡の南限に接する伊勢山中学校遺跡第4次調査では、幅5～6m・深さ約3.5mの大規模な溝がみついている。東方約500mには、織田家ゆかりの古渡城(7-17)がある。

本書で報告する第12次調査地点は遺跡範囲の南東端付近、第13次調査は遺跡中央北寄りにあたる。



第3図 正木町遺跡とその周辺(1:15000)



第4図 正木町・伊勢山中学校遺跡の範囲と調査地点(1:3000 13P.の文献参照)

2. 調査の経過

調査は、個人住宅の新築にともなって実施した。調査の工期は、新築に先立って2000(平成12)年4月19日から5月12日となった。敷地は約23×5.5mと南北に細長い形状であり、調査直前には、アスファルト舗装され駐車場として利用されていた。調査区は家屋が建つ範囲にあわせ、また保安のため周囲に余地を残したため、掘削面積は約56㎡となった。調査は、好天にめぐまれて順調にすすみ、工事期限に数日を残して現地作業を終了した。以下、掘削着手から埋戻し終了までの期間を、日誌として抄記する。

4月19日(水) 小型のバックホウでアスファルト舗装除去から開始。

20日(木) 調査区の北側から、表土を掘りはじめた。北半は、近代以降の形成土が地山面に達していた。

21日(金) 調査区全体の表土除去を完了する。調査区中央付近で、茶褐色土の溝状遺構を検出。

24日(月) 茶褐色土の溝状遺構を掘削。大溝の北側の近代層を除去し、大溝の肩になる地山面を検出。浅い溝状遺構をはじめ、ピット等を検出・掘削。

25日(火) 大溝の南側、地山面上で遺構検出掘削を行う。大溝周辺を清掃し、写真撮影を実施。遺構平面図の作成を開始。

26日(水) 調査区全体を清掃し、写真撮影。

27日(木) 遺構平面図および調査区西壁土層断面図の作成開始。

28日(金) 実測作業を完了する。

5月1日(月) 調査区の埋め戻し工を開始。後片付け工および機材等の搬出を行う。

2日(火) 埋め戻し工完了。



写真1 調査状況

上: 調査地点の着手前近景(南から)

中: 調査区北半の表土除去(南から)

下: 調査区南端のピット群掘削風景

3. 調査の成果

(1) 地形・土層と遺構の分布

土層は、古い順に次の様に大別される。

- ①古墳時代中頃の遺物を含む土層(主として黒褐色土)
- ②古墳時代後半～奈良・平安時代の遺物を含む土層(主として暗茶褐色・茶灰褐色土)
- ③中世の遺物を含む土層(主として淡茶褐色土)
- ④近世の遺物を含む土層(主として灰褐色土)
- ⑤近代以降の形成土

【調査区西壁の土層】(第5図)

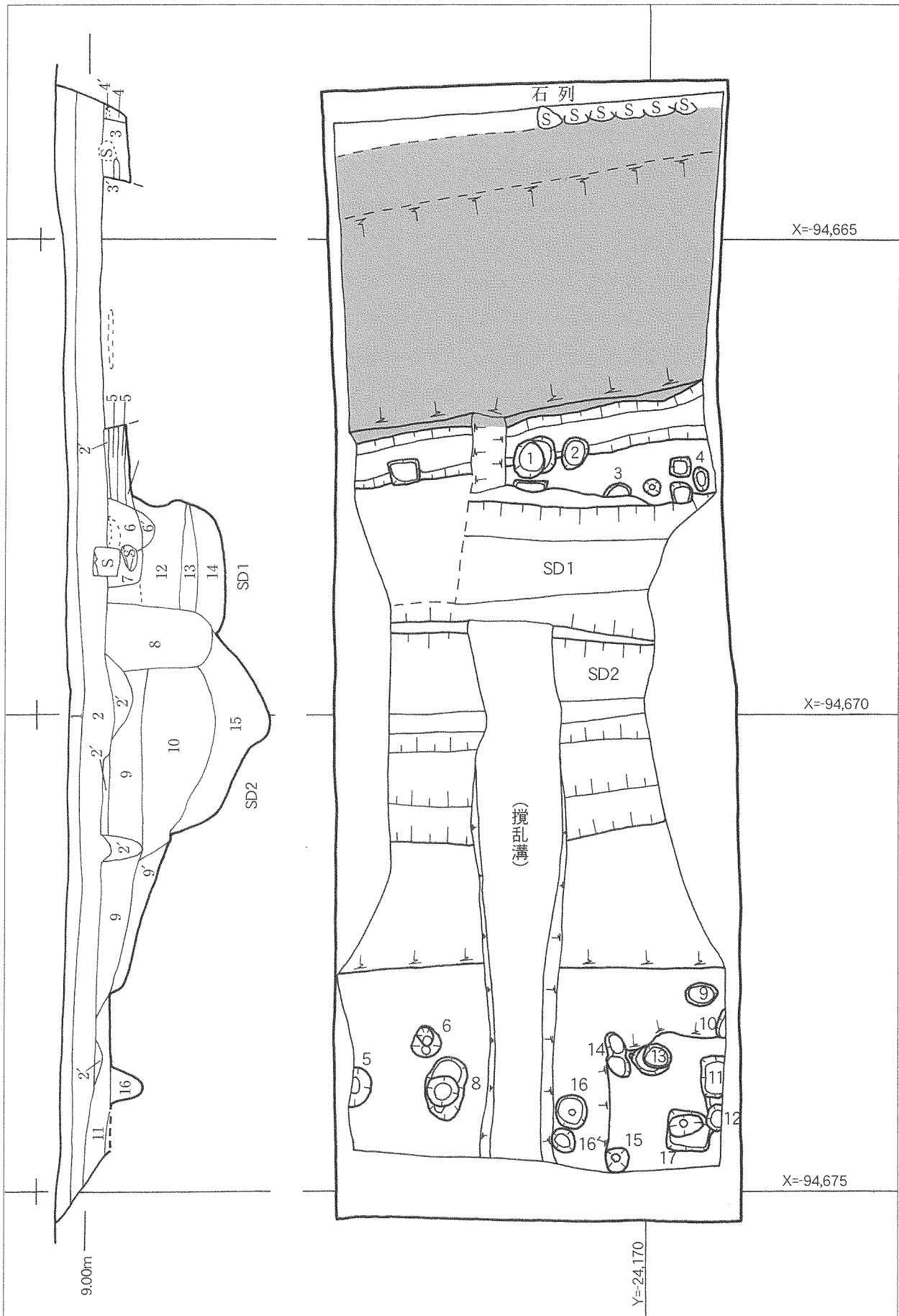
- | | |
|---|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1 アスファルト舗装およびその基礎バラス 2 表土 戦災時のものか、焼土粒多く赤褐色を呈す。 2' 暗褐色土 3 暗灰色土 道路側溝埋土 3' 淡桃色漆喰 4 茶灰褐色土 炭化物まばら 4' 黄色の叩き締め土 5 茶灰褐色土 混ざり物少なく、シルト質やや強い。 5' 5の土を叩き締めた土。 5" 5より混ざり物少なく砂質強い。 6 暗灰色土 瓦片・砂礫等多く、軟弱。 道路側溝埋土道路側溝埋土 7 茶灰褐色土 炭化物まばら。4と同じ土と思われる。 8 灰褐色土 ブロック状混土 攪乱溝の埋土 地山黄砂ブロック・レンガ片・炭化物がめだつ。 9 灰褐色土 かく乱土。炭化物・焼土まばら。 | <ol style="list-style-type: none"> 9' 9の土に地山黄砂ブロックが多く混じり、砂質で軟弱。 10 暗灰褐色土 戦災残土を含むかく乱土。 SD02上部のみに堆積。 全体にしまりなく、軟質。下部に炭化物・焼土粒多く堆積。 11 暗茶褐色土 灰色砂ややめだつ、地山砂・シルトブロックめだつ。 12 茶褐色土 SD01上層 シルトやや強く、地山黄砂ブロックまばら。 13 黄砂ブロック混土 SD01中層 地山黄色硬砂ブロック密。淡茶灰褐色土14層が混じる。 14 淡茶灰褐色土 SD01下層 灰色砂多く、砂質強い。上層は茶色強く、下層は暗茶灰色。 15 淡茶褐色土 SD02埋土 均質で砂質強い。混ざり物少ない。 16 暗褐色土 p5埋土 |
|---|---|

第1表 遺構一覧表

◎ 径欄の単位はcm、長径×短径を示す。数値は5cm毎に二捨三入。深さも同様。

◎ 底面高の単位はm(数値処理同上)、遺構底面の高さをT.P.で示す。

| 遺構名 | 埋土 | 径 | 深さ | 底面高 | 時期 | 遺物 | 遺物図 | 備考 |
|-----|-------------|-----------------|------|------|-------|--|-------|----------|
| SD1 | 淡茶灰褐色土 砂がち | 上端(推定150)・底部110 | 100 | 7.60 | 中世末 | 土師皿、土師、瀬戸・美濃・常滑製品、山本碗、陶丸、土師器、須恵器、布目瓦、鹿骨片 | 第7.8図 | SD2に切られる |
| SD2 | 淡茶褐色土 砂質つよい | 上端(推定280)・底部80 | 140 | 7.20 | 近世 | 土師皿、土師、瀬戸・美濃・常滑製品、山本碗、土師器、須恵器、陶器転用円板 | 第8図 | SD1を切る |
| P1 | 暗褐色土 | 40×30 | 16.0 | 8.40 | | | | |
| P2 | 暗褐色土 | 35×25 | 10.5 | 8.50 | | | | |
| P3 | 暗灰褐色土 | 27 | 46.1 | 8.15 | | | | |
| P4 | 黄灰色砂 | 26×17 | 26.5 | 8.40 | 近代 | | | |
| P5 | 暗褐色土 | 45 | 34.0 | 8.35 | | 須恵器・土器・埴輪小片 | | |
| P6 | 黒褐色土 | 32 | 27.3 | 8.45 | | | | |
| P7 | 黒褐色土 | | | | | | | 浅い落ち込み |
| P8 | 黒褐色土 | 67×40 | 37.2 | 8.35 | | 土器・須恵器小片 | | |
| P9 | 暗褐色土 | 34×22 | 12.8 | 8.50 | | 須恵器小片 | | |
| P10 | 暗褐色土 | | 18.8 | 8.55 | 古墳時代? | 須恵器 | | 浅い落ち込み状 |
| P11 | 黒褐色土 | 45×30 | 12.0 | 8.65 | | 土器小片 | | |
| P12 | 暗灰褐色土 | 20 | 29.7 | 8.45 | | 土器小片 | | |
| P13 | 黒褐色土 | 40 | 7.0 | 8.70 | | 土器・須恵器小片 | | |
| P14 | 黒褐色土 | 25×17 | 28.4 | 8.60 | | 土器・須恵器小片 | | |
| P15 | 黒褐色土 | 25 | 29.0 | 8.55 | | | | |
| P16 | 暗灰褐色土 | 33 | 32.0 | 8.45 | | 土器・須恵器小片 | | |
| P17 | 暗灰褐色土 | 25×20 | 20.0 | 8.55 | | | | |
| P18 | 暗褐色土 | 45×40 | 19.3 | 8.65 | | 須恵器小片 | 第10図 | 方形に近い |



第5図 遺構平面図・西壁土層断面図(1:50、アミフセは近代道路遺構)

(3) 近代の道路遺構

調査区の北側から掘りはじめたところ、舗装基盤の砂利が20～30cmの厚さで敷かれており、その下に太平洋戦争時の戦災ガラをふくむ表土があらわれた。表土除去の際、角柱状の加工石材や切石がめだち、石垣が存在したことが推定された。北半は、表土直下で地山面が露呈したほか、暗灰色や黄灰色の近代層と思われる土で占められていた。北端付近では、河原石の石列が若干南西に傾きながら東西方向に並んでいた。北端の石列から約3m南には、前述の方形の切石による石垣の痕跡と浅い溝がのこされていた。溝の上面は人為的に填圧され、3～4層の互層をなしていた。

石列と溝の間には平坦面が広がり、北寄り地山、南寄りの約2.3m分は黄灰色の砂質土で混ざり物の多い土であった。黄灰色土部分をバックホウでの深掘りした結果、コンクリート製のパイプ2本が東西方向に走るのを確認した。近代以降の下水管溝と思われ、大量の土量が予測されたため、確認のみにとどめた。

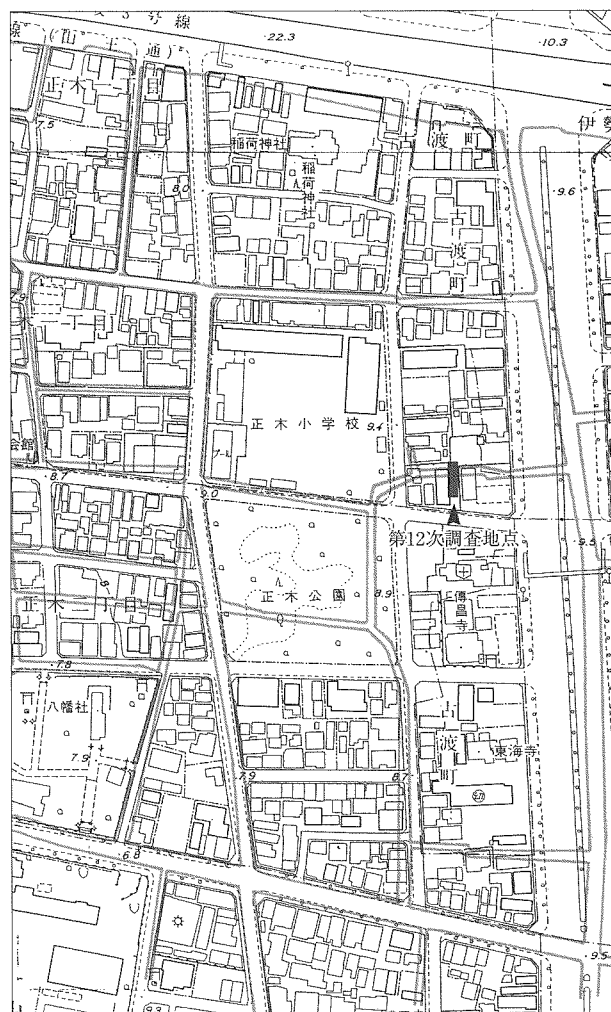
以上のような状況から、宅地の境界部分あるいは通路のような空間が想定され、戦災ガラの下にあらわれる事から戦前の昭和前期以前の様相であることも明らかであった。戦前の地籍図や住宅地図をみると、戦前の正木町地内は、東西南北を貫く幅広い幅員の道路はなく、幅3～4m程度の路地が複雑にいくつんでいたようである。その中には調査地点の北寄りをとって東の本町通(現在の22号線東端付近)につながる東西道路が描かれており、今回検出された遺構が道路遺構であることが確かめられた。



写真2

上: 表土中の角柱状石材

下: 道路状遺構(南から)



第6図 戦前の町並(色のうすい線)

2. 近世・中世の溝状遺構

調査区の中ほどのほぼ中央を、漆喰土が密な幅90cmほどの近代攪乱溝が南北にのびており、攪乱溝の両側に広がる茶褐色土の範囲を確認していった。調査区の両側に建物がせまり安全面の配慮から、調査範囲は約2～2.5mに限定したが、2本の溝状の掘り込みがほぼ東西方向に平行に掘られているのがわかった。

2本の溝状遺構のうち、北側に位置する遺構をSD1、南側をSD2とする。SD1は、土層の状況から上・中・下層に分けて遺物を採集した。SD2は、検出面から約2/3の深さまで戦災ガラを含む攪乱土が占めていた。溝同士が切りあっていることや、上部が攪乱されていることから、本来の規模は失われている。断面図等から推測すると、SD1が幅1.5m程度、深さは地山面から1m、SD2が幅2.5～2.7m、深さは地山面から1.5mである。SD1は断面形がU字形を呈し、SD2は少し下膨れのV字または「葉研状」の断面形である。2本の溝はそれぞれおよそ6分の1の部分が重なっている。とはいえ、後世の攪乱が深くおよび、切りあい部分の埋土はわずか数センチのこっていたのみであり、SD2がSD1の埋土を掘り込んでいるように見えた。

SD1とSD2からは、土器または土師器・須恵器・布目瓦・灰釉陶器等の古代以前の遺物破片とともに、中世以降の山茶碗や陶丸、瀬戸・美濃・常滑等の陶器、土師皿・土鍋・羽釜等が出土する。SD1内は西端断面で3層に分層でき、遺物も上・中・下層にほぼ分けてとりあげた。上層にあたる12層では近世の瓦片や播鉢などの陶器片が含まれ、近世以降に堆積した層あるいは別遺構の埋土の可能性が高い。中層(13層)は地山の淡黄砂ブロックが多く混じり、下層とは堆積状況がことなっていた。下層(14層)は、茶褐色土であり、溝廃絶直後に近い堆積であると考えた。下層出土のうち、埋没時期を示唆する遺物群は16世紀代の大窯Ⅰ～Ⅱ期の陶器片(第7図18・19・24・25)であり、土師皿や土鍋・羽釜などは大窯Ⅲ～Ⅳ期に下るものもみられる。SD1の埋没時期は、16世紀中頃以降と考えたい。

SD2は、下部の約3分の1に淡茶褐色の砂質土がのこされており、尾呂碗や小壺・播鉢・笠原鉢・舟徳利などの瀬戸・美濃製品や、常滑の大甕片など17世紀後半の遺物がいずれも小片ながら出土する。SD2はSD1の埋没後に掘られ、江戸時代(近世)に入った17世紀後半には埋まりはじめたものと考えられる。

SD1とSD2からは、砂岩・火山岩・変成岩などの石片が16点ほど出土し、うち3点は砥石である。また、火をうけて割れたと思われる破片もある。時期は明らかでないが、溝にともなう可能性も高い。

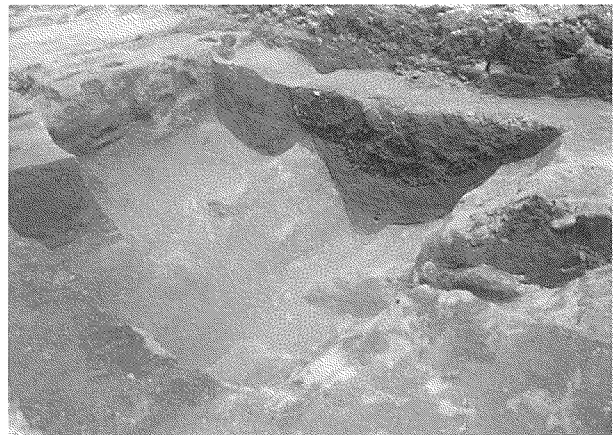
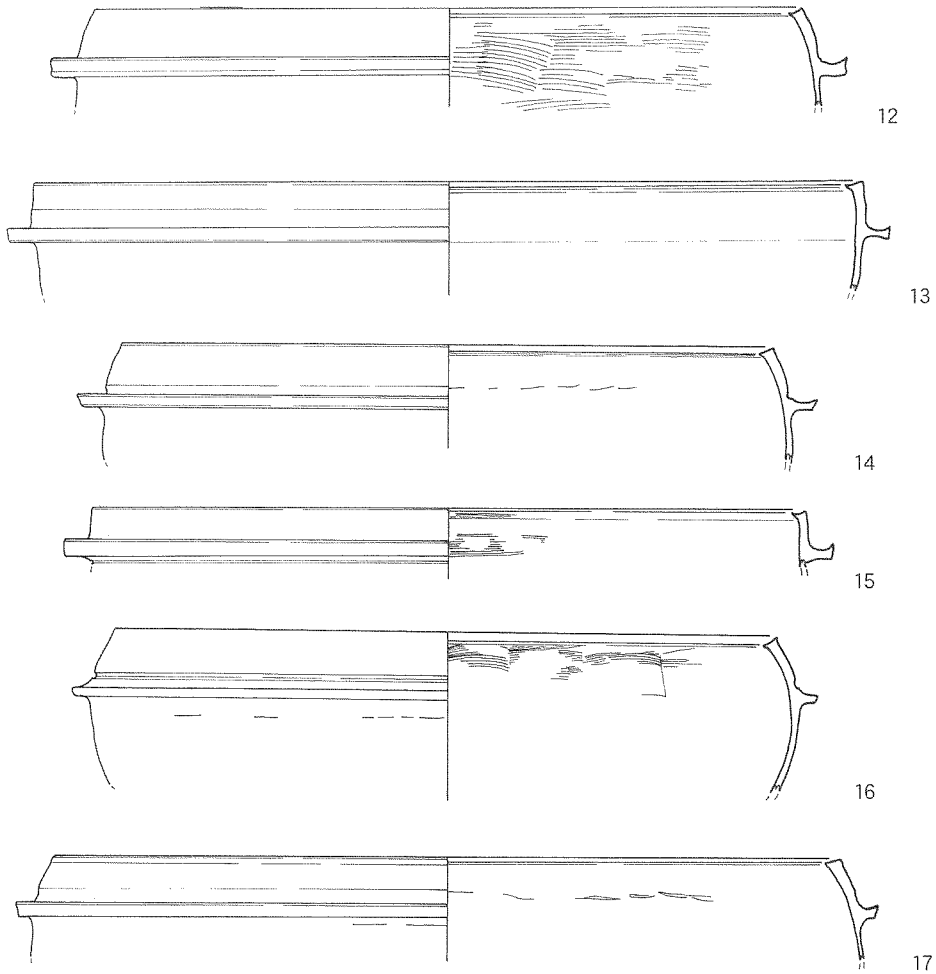
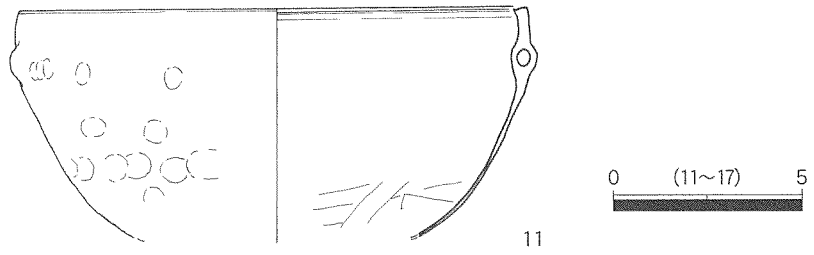
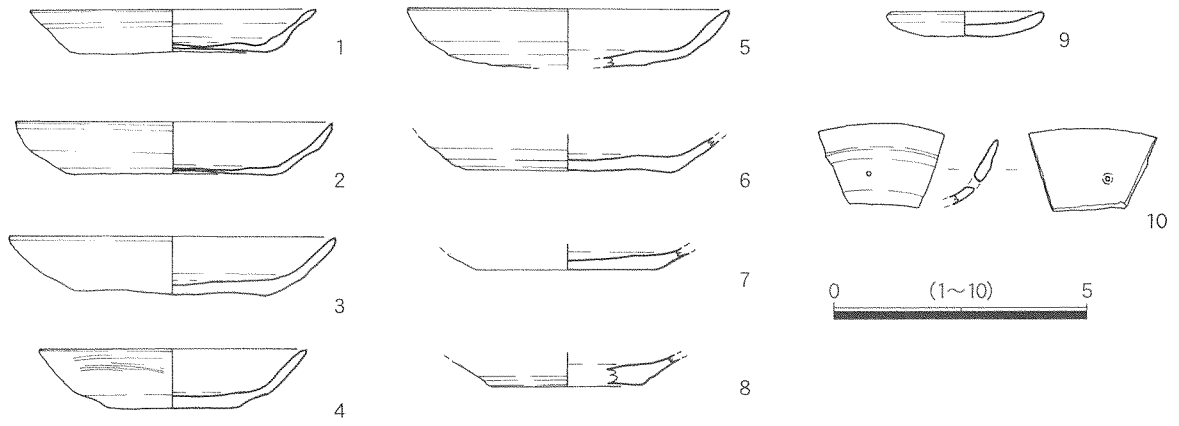
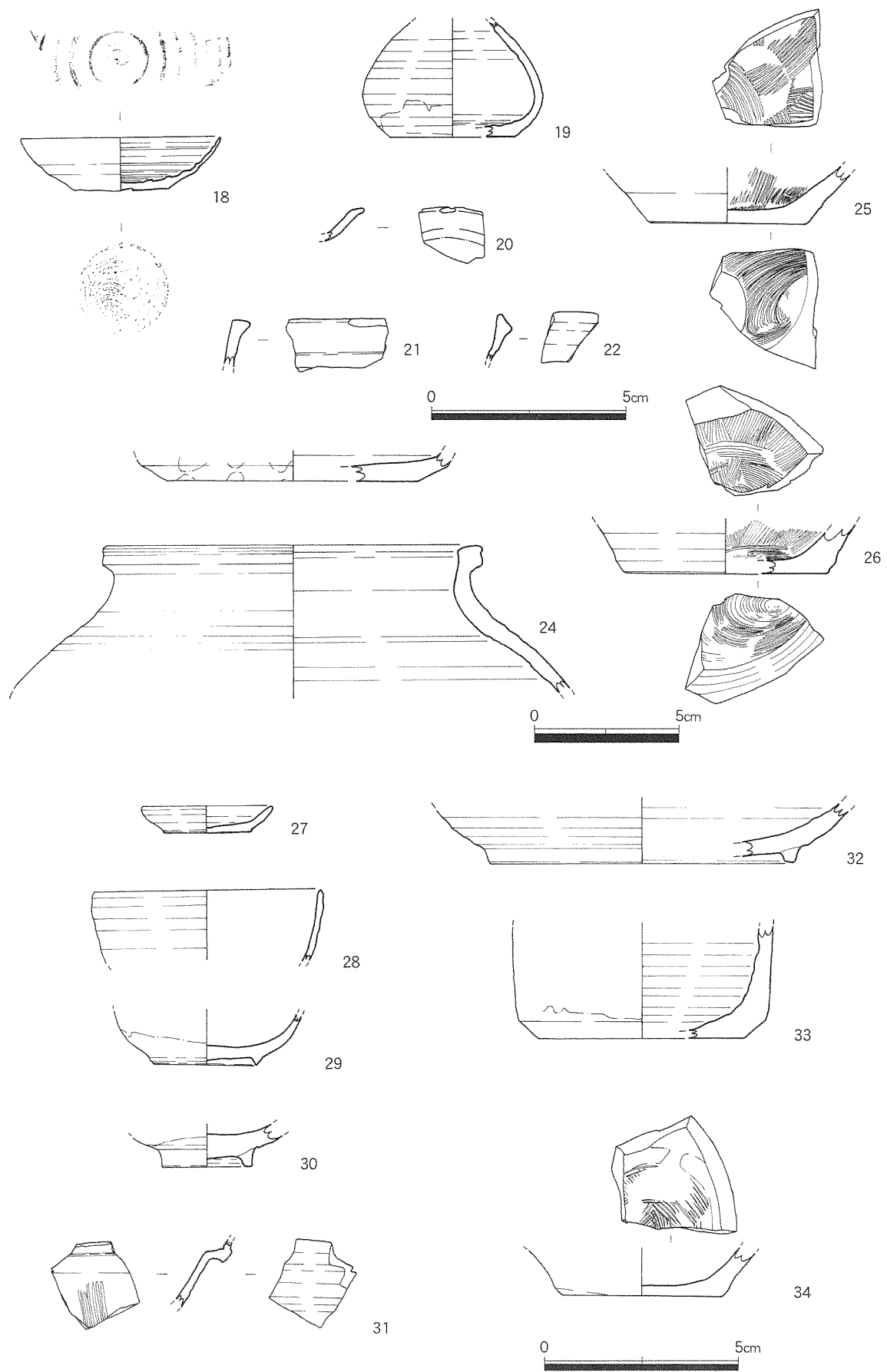


写真3 中近世の大溝(右/南から、左/南西から)

奥の浅いU字状の溝がSD1、手前のV字形がSD2



第7図 SD1 出土遺物



第8図 SD1・SD2 出土遺物

4. 古代・古墳時代の遺構・遺物

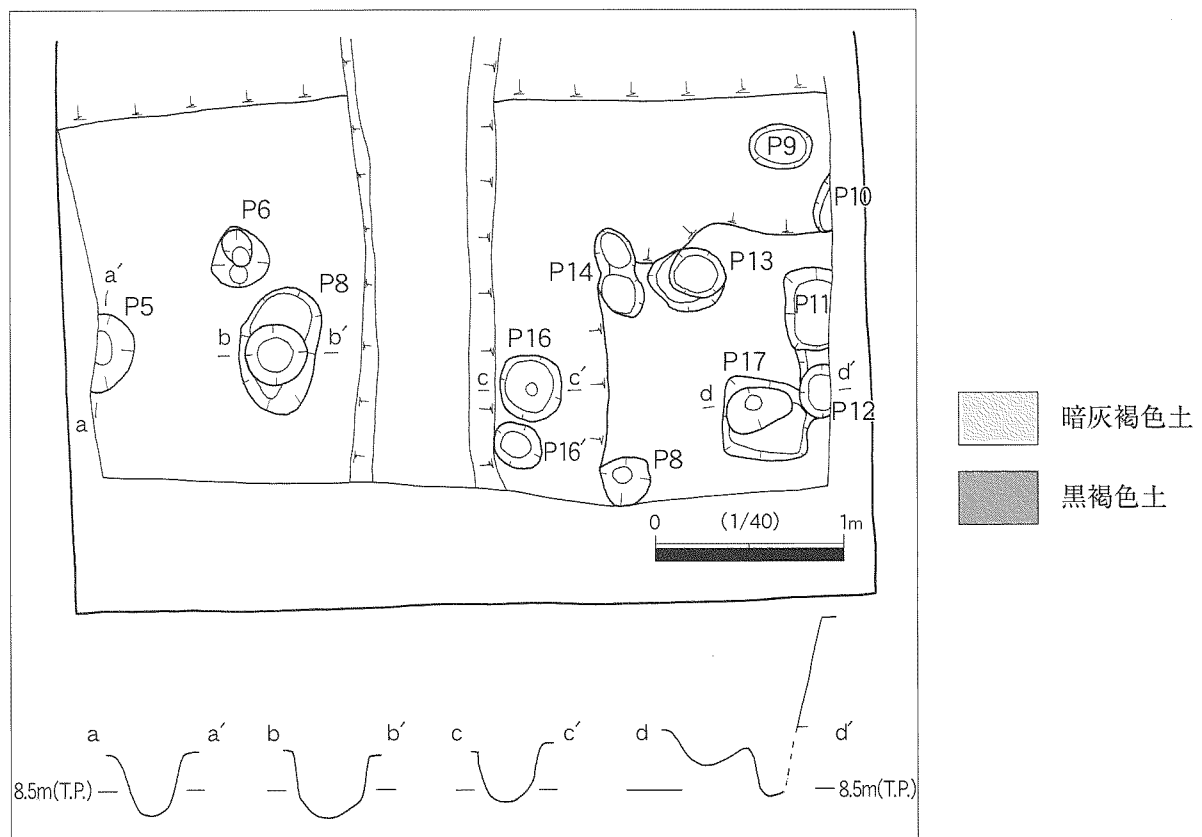
SD2より南の調査区南端付近では、暗褐色土がのこっていた。この土からは、土師器や須恵器の細片が出土するため中世以前の包含層であると思われた。包含層下の地山面では、15個のピットがみつまっている。ピットの埋土は、暗褐色～暗灰褐色土と、黒褐色土に大別できる。

ピットの規模は、20～30cmの直径のものが多く、深さも大半が地山面から30cmまでにおさまる。検出されたピットは、竪穴住居や掘立柱建物の柱穴であることが考えられたが、調査区内で建物が復元されるようなピットの配列は認められなかった。ピット内の埋土から出土するのは、主として土師器・須恵器の細片であり、P5からは埴輪と思われる小片も出土する。須恵器は5～6世紀の古墳時代の杯・高杯・有蓋高杯の蓋（第10図35）などの小片が多く、P5・P17からは、奈良・平安時代のものと思われる小片がわずかながらみとめられた。

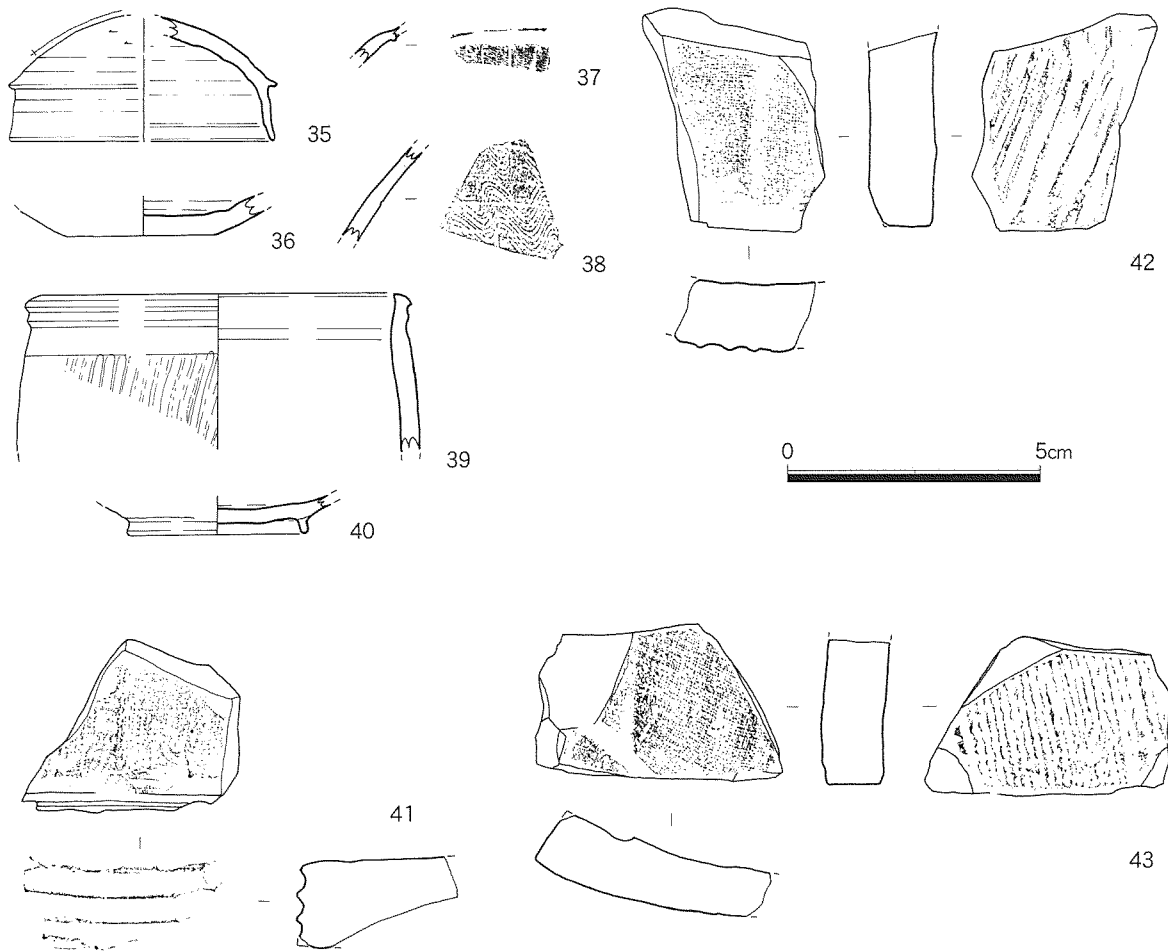
SD1からは、中世末・近世の遺物のほか、古代・古墳時代にさかのぼる遺物も多く出土している。土器または土師器片は、細片・小片が多く、器形等のわかるものがほとんどない。須恵器には、5世紀代の初期須恵器と思われる小片が含まれるほか、6世紀代の鉢または甑の破片がみられる。

SD1から出土する古代以前の遺物の中で注目すべきは、10点ほどの布目瓦片である。ほとんどは、10cm四方以下の丸瓦または平瓦の破片であり、凹面には布目痕がのこり、凸面には縄目・平行・格子目の叩きが施される。42は1面、43は2面の端部がのこっていた。41の1点のみ軒平瓦片があり、瓦当面には押引四重弧紋が施される。瓦片は、7世紀中頃から後半の年代があたり、南方に近接する尾張元興寺遺跡の瓦と同じものと考えられる。

奈良・平安時代の遺物は、須恵器・灰釉陶器があり、花紋が線刻された無釉陶片がみられた。



第9図 調査区南半平面図及びピット断面図



第10図 古代以前の遺物(35はピット・36~42はSD1出土)

[正木町遺跡に関する文献](行頭の記号は第4図の調査位置記号に対応)

[主な参考文献]

- A 三渡俊一郎 1986「正木一丁目遺跡」『千種・東・中区の考古遺跡』名古屋市教育委員会
- B 稲垣晋也 1957「愛知県名古屋市正木町貝塚」『日本考古学年報5』
- C 伊藤禎樹 1969「正木町遺跡調査速報-破壊に対する問題点-」『名古屋考古学会会報12』名古屋考古学会
- C 伊藤禎樹・小林義孝 1991「尾張正木町遺跡出土の初期須恵器」『韓式土器研究 Ⅲ』韓式土器研究会
- D 原久仁子他 1997『南山大学大学院考古学研究報告第7冊 正木町遺跡』南山大学大学院考古学研究室
- E 名古屋市教育委員会 1983『昭和57年度埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 1 竹内宇哲 1986『正木町遺跡発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会(以下同じ)
- 2 竹内宇哲 1988『正木町遺跡第2次発掘調査概報』
- 3 竹内宇哲 1989『正木町遺跡第3次発掘調査概報』
- 4 野口泰子他 1991『正木町遺跡第4次発掘調査概要報告書』
- 5 野口泰子 1996『正木町遺跡-第5次調査の概要-』
- 6 木村有作 1996『正木町遺跡第6次発掘調査概要報告書』
- 7~9 田原和美他 1998『埋蔵文化財調査報告書29 正木町遺跡(第7次~第9次)』
- 10 田原和美 1999『正木町遺跡第10次発掘調査報告書』
- 11 伊藤正人 2000「正木町遺跡(第11次)」『埋蔵文化財調査報告書34』

第2表 遺物観察表 (法量は平均値・推定値・遺存部は図指示全周に対する残存率を示す)

| 図 | No. | 器種 | 出土位置 | 法量 (cm) | 遺存部 | 特徴など | 写真 |
|----|-----|-----------|---------|------------------------|------|------------|----|
| 7 | 1 | 土師皿 | SD1下層 | 推定口径11.4・推定底径8.0・高さ1.7 | 1/2 | 回転糸切痕 | ○ |
| 7 | 2 | 土師皿 | SD1下層 | 推定口径12.6・推定底径8.0・高さ2.1 | 1/2 | 回転糸切痕 | ○ |
| 7 | 3 | 土師皿 | SD1下層 | 推定口径13.0・推定底径7.5・高さ2.4 | 1/2 | 回転糸切痕 | ○ |
| 7 | 4 | 土師皿 | SD1下層 | 推定口径12.6・推定底径8.0・高さ2.1 | 1/5 | 回転糸切痕 | ○ |
| 7 | 5 | 土師皿 | SD1上層 | 推定口径12.7・高さ2.3 | 1/5 | 回転糸切痕 | ○ |
| 7 | 6 | 土師皿 | SD1上層 | 推定底径8.2 | 1/4 | 回転糸切痕 | ○ |
| 7 | 7 | 土師皿 | SD1上層 | 推定底径7.4 | 1/3 | 回転糸切痕 | ○ |
| 7 | 8 | 土師皿 | SD1上層 | 推定底径5.9 | 1/3 | 回転糸切痕 | ○ |
| 7 | 9 | 土師皿 | SD1中層 | 推定底径6.0・高さ1.0 | 1/4 | 手づくね | ○ |
| 7 | 10 | 土師皿 | SD1上層 | | 1/8 | 径2ミリの穿孔がある | ○ |
| 7 | 11 | 土師器 鍋 | SD1下層 | 推定口径25.7 | 1/3 | 内耳鍋 | ○ |
| 7 | 12 | 土師器 羽釜 | SD1上層 | 推定口径36.3 | 1/5 | | ○ |
| 7 | 13 | 土師器 羽釜 | SD1下層 | 推定口径49.0 | 1/8 | | ○ |
| 7 | 14 | 土師器 羽釜 | SD1中層 | 推定口径33.2 | 1/8 | | ○ |
| 7 | 15 | 土師器 羽釜 | SD1中層 | 推定底径36.6 | 1/8 | | ○ |
| 7 | 16 | 土師器 羽釜 | SD1上層 | 推定底径33.8 | 1/6 | | ○ |
| 7 | 17 | 土師器 羽釜 | SD1上層 | 推定底径40.2 | 1/6 | | ○ |
| 8 | 18 | 陶器 灯明皿 | SD1下層 | 口径10.2・底径4.8・高さ3.2 | 1/1 | 無釉 | ○ |
| 8 | 19 | 陶器 小瓶 | SD1下層 | 底径6.4 | 1/3 | 瀬戸、鉄釉 | ○ |
| 8 | 20 | 陶器 燭台 | SD1中層 | — | — | 灰釉 | ○ |
| 8 | 21 | 陶器 広口有耳壺 | SD1中層 | — | — | — | ○ |
| 8 | 22 | 陶器 播鉢 | SD1下層 | — | — | — | ○ |
| 8 | 23 | 陶器 盤 | SD1中層 | 推定底径12.8 | 1/6 | 底面灰釉 | ○ |
| 8 | 24 | 陶器 広口壺 | SD1下層 | 推定口径16.8 | 1/5 | 鉄釉 | ○ |
| 8 | 25 | 陶器 播鉢 | SD1下層 | 底径11.0 | 1/5 | 鉄釉、回転糸切痕 | ○ |
| 8 | 26 | 陶器 播鉢 | SD1かSD2 | 底径12.2 | 1/5 | 鉄釉、回転糸切痕 | ○ |
| 8 | 27 | 土師皿 | SD2 | 口径6.7・底径4.4・高さ1.4 | 1/3 | 回転糸切痕 | ○ |
| 8 | 28 | 陶器 碗 | SD2 | 推定口径11.7 | 1/10 | 鉄釉、瀬戸「尾呂碗」 | ○ |
| 8 | 29 | 陶器 小壺 | SD2 | 底径5.4 | 1/1 | 美濃、鉄釉 | ○ |
| 8 | 30 | 陶器 | SD2 | 底径4.6 | — | 鉄釉 | ○ |
| 8 | 31 | 陶器 播鉢 | SD2 | — | — | 鉄釉 | ○ |
| 8 | 32 | 陶器 鉢 | SD2 | 推定底径15.7 | 1/10 | 笠原鉢 | ○ |
| 8 | 33 | 陶器 徳利 | SD2 | 推定底径10.6 | 1/6 | 黒釉 | ○ |
| 8 | 34 | 陶器 播鉢 | SD2 | 底径11.2 | 1/3 | 鉄釉 | ○ |
| 10 | 35 | 須恵器 有蓋高杯蓋 | P18 | 推定口径10.4、・高(紐なし) 5.0 | — | 紐欠失 | ○ |
| 10 | 36 | 須恵器 杯 | SD1中層 | 推定底径5.9 | — | — | ○ |
| 10 | 37 | 須恵器 壺 | SD1中層 | — | — | — | ○ |
| 10 | 38 | 須恵器 壺 | SD1上層 | — | — | — | ○ |
| 10 | 39 | 須恵器 鉢 | SD1上層 | 推定口径12.9 | 1/5 | — | ○ |
| 10 | 40 | 灰釉陶器 椀 | SD1上層 | 推定口径7.0 | 1/3 | — | ○ |
| 10 | 41 | 瓦 軒平瓦 | SD1下層 | 瓦当面幅3.2 | 1/3 | 押引四重弧紋 | ○ |
| 10 | 42 | 瓦 平瓦 | SD1上層 | 厚2.5, 凸面平行叩き | — | — | ○ |
| 10 | 43 | 瓦 平瓦 | SD1下層 | 厚2.5, 凸面縄叩き | — | — | ○ |
| 10 | 44 | 陶器片 | SD1 | — | — | 無釉、花紋の線刻 | |
| 10 | 45 | 陶器 大甕 | SD1かSD2 | — | — | 常滑 | ○ |
| 10 | 46 | 砥石 | SD1 | — | — | 変成岩 | |



写真4 SD1出土土師皿



写真5 SD1出土羽釜



写真6 SD1出土陶器類



写真7 SD1出土内耳鍋(内面)

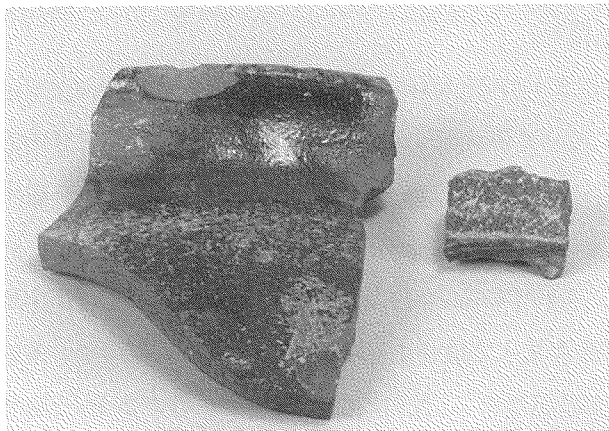


写真8 常滑大甕片

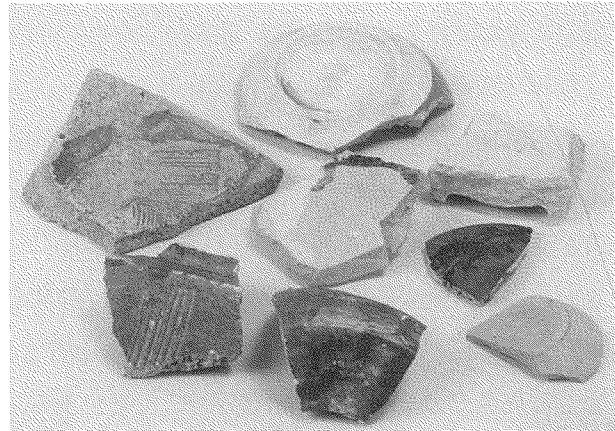


写真9 SD2出土遺物



写真10 須恵器と灰釉陶器(右下)

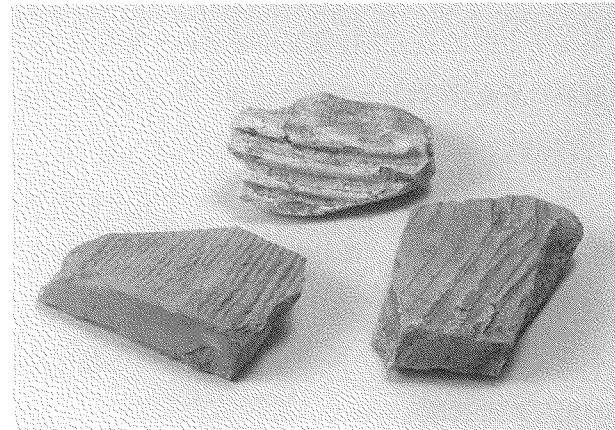


写真11 軒平瓦(奥)と平瓦(手前2点)

ま と め

小規模な面積ながら、少なからぬ成果を得たと思う。遺物の検討が不十分であることも含め、本調査の成果を、正木町遺跡を考える上での問題提起として生かしたいと思う。

近代の道路遺構 近世以降の正木町遺跡付近については、第7～9次調査報告書の付編[田原1998]や11次調査報告書[伊藤正2000]でまとめられている。明治時代末には東に本町通の商業地を控えた住宅地化していたようであり、今回の調査区北半で検出された道路遺構はこの頃整備されたものと思われる。また、調査地近辺は第2次大戦における空襲による被災地であることを、道路遺構の上面を覆った火災ガラが証明している。戦後復興の区画整理で道路・公園等の整備が行われ、旧・本町通につながる幅員3mほどの道路も廃絶され宅地の一部となったものと考えられる。また、道路下には下水管と思われる管が2本埋設されており、名古屋の下水整備の先進地であった当地を考えるに興味深い。

「願興寺」の瓦 中世末(戦国時代末)の溝であるSD1からは、中世以前の遺物が多く混在する。とくに布目瓦片は、調査地点から南へ約600mの一带に伽藍があったとされる「願興寺」(尾張元興寺遺跡)の瓦と同じものと考えられる。とくに軒平瓦は、押引重弧紋が簾状にならないという特徴があり、四重弧でもあることから、現在まで出土する「願興寺」の瓦の中でも最古の一群の軒平瓦として位置付けられよう。布目瓦片は、正木町遺跡や伊勢山中学校遺跡内の調査で散見し、転用材として尾張元興寺遺跡付近から持ち込まれた可能性も考えられている[伊藤正2000]。

集落域の範囲 SD1出土の古代以前の遺物や調査区南端付近のピット群の存在によって、古墳時代後期から奈良・平安時代頃の居住域が、遺跡範囲東端近くの今回の調査地点付近まで広がることが確かめられた。現在の遺跡範囲を越えて、遺構・遺物が分布する可能性も高い。

戦国時代の「大溝」 調査区中央付近を東西に走行する2本の溝がみつき、北寄りのSD1は中世末(戦国時代)、SD1の南肩を壊して掘られたSD2は江戸時代に入ってから埋没したと推定される。正木町遺跡内および南接する伊勢山中学校遺跡の発掘調査では、しばしば中近世の「大溝」と呼べる幅・深さともに1mを越す溝が発見される。うち戦国時代と思われるものについては、規模・断面形・埋没状況等の共通性が指摘され、16世紀前半の古渡城築城にともなう廃絶した可能性も考えられている。今回みつかったSD1は断面形がV字形でU字形に近いことや、土鍋・羽釜・土師皿など日常品がまとまって出土することや、瀬戸・美濃製品でも茶器など高級品ではなく生活雑器類がほとんどであることが注目される。城館の堀のようなものではなく、日常の居住域に密着した性格が想定される。埋没時期も、羽釜や土師皿が示す16世紀中頃という年代は、古渡城の築城・廃絶とも微妙な関係であり、付近の中世「大溝」を考える上で今後の課題としたい。

なお、偶然か意図的か不明だがV字形とU字形が重なった断面形の溝の類例として、伊勢山中学校遺跡6次調査SD01がある。埋没年代は江戸時代であり、中世に掘られた溝が近世の用水溝として再利用されたと考えられている。



写真12 伊勢山中学校遺跡6次のSD01

正木町遺跡第13次発掘調査



例 言

- 1 本編は、名古屋市中区正木一丁目（1516-6,7,1505の一部）に所在する正木町遺跡の第13次発掘調査にかかる調査報告である。
- 2 本調査は、店舗兼個人住宅の建築工事に伴うもので、面積約90㎡を対象とした。
- 3 本調査は、平成12年11月14日から同年12月8日までおこなった。
- 4 本調査は、名古屋市教育委員会が実施し、名古屋市見晴台考古資料館学芸員、村木誠、野澤則幸が担当した。
- 5 発掘調査及び資料整理に関しては、下記の皆様にご指導ご協力を頂いた。
浅野増一、駒田利治、梶山勝、林弘之、池戸祐子、川原則子、小浦美生、
近藤和子、佐々木佳子、筏川造園土木
- 6 本書は、館学芸員の協力を得て野澤が執筆した。

目 次

- 一．調査の経過……………19
- 二．遺構と遺物……………20
 - (1) 古墳時代 ……………20
 - (2) 古代 ……………20
 - (3) 中世 ……………20
- 三．小結……………28



写真2 調査風景(1区西から)

一. 調査の経過

第13次を数える今回の調査区は、金山駅から北西に向かって徒歩で約10分程行った所にある。戦前からの木造住宅が比較的多く残っている土地柄で、近年になって住宅の建て替えがよく行われるようになってきている現状である。今回は住宅と店舗兼用の建築工事に伴う事前調査である。

調査の対象とした面積は、周囲の住宅への影響を配慮して最終的に約90m²となった。また、排土置き場に余裕がなかったことから、東西に横長の調査区全体を3分割して、真中の1区、西側の2区、東側の3区の順に調査を実施した。1区を11月14日から11月24日、2区は12月1日まで、3区は12月8日まで行い、のべにして16日間を要した。

11月14日～11月15日（1区）表土除去、遺構検出。土壙（SK）、小穴（P）等を確認。

11月16日～11月21日（1区）遺構の掘り下げ。途中雨天が続いたため、能率を欠く。

11月22日～11月24日（1区）遺構掘削の仕上げ。清掃、写真撮影、測量、埋め戻し。

11月27日～11月28日（2区）表土除去、遺構検出。遺構の密度濃い。遺構の掘り下げ。中世の土壙SK01より羊形硯出土。

11月29日～12月1日（2区）遺構掘削の仕上げ。清掃、写真撮影、測量、埋め戻し。

12月4日～12月6日（3区）表土除去、遺構検出。3区の大半が中世の盛土によって覆われていることを確認。その下面で戦国期の堀の一部（SD06）を検出する。

12月7日～12月8日（3区）清掃、写真撮影、測量。また、事業者及び周辺住民関係各位に調査成果の現地説明を行った後、埋め戻しを終えて調査を完了する。

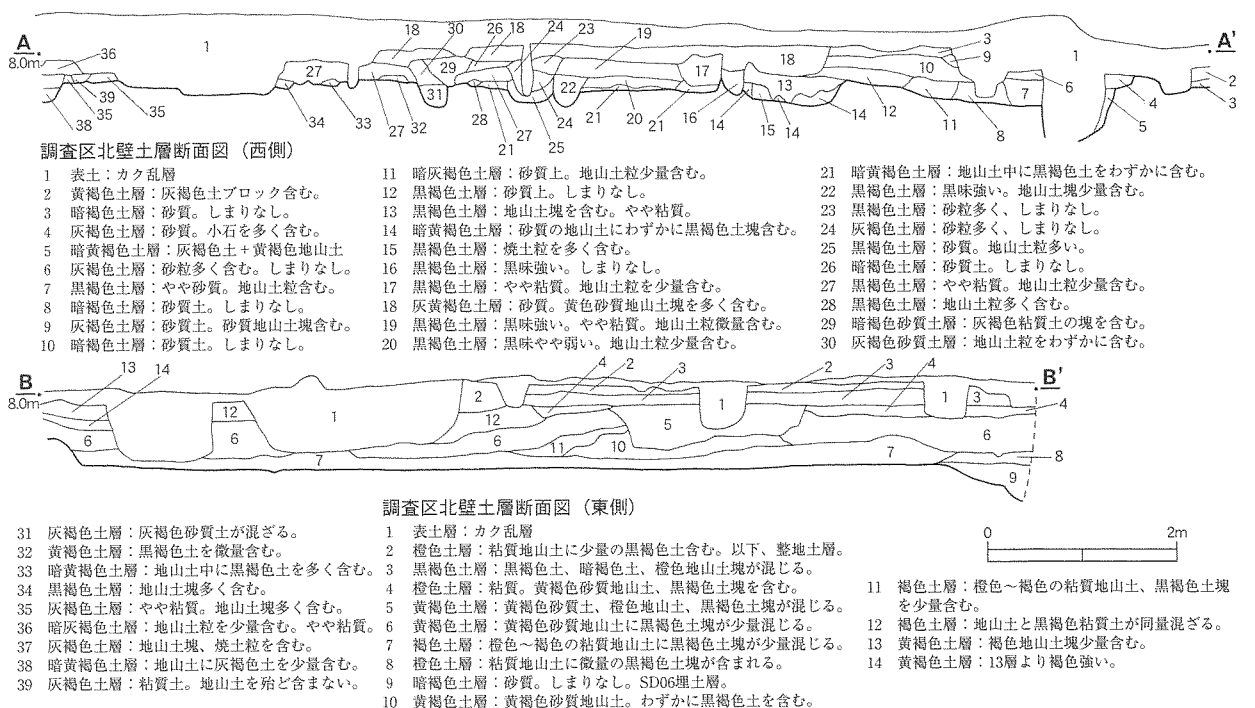


図1 調査区北壁土層断面図

二. 遺構と遺物 (図1-5) (写真2-16)

調査区内の基本土層(図1)は、最上層が表土及び攪乱層であり、それに続いて有機質の強い黒褐色土に黄褐色の地山土を交えながら遺物包含層が形成されている。出土遺物には古墳時代から古代、中世まで混在する状況が見られ、純粋な古墳時代の包含層は殆ど残されていないようである。古代から中世の時期、おそらくは殆ど中世と思われるが、ことごとく人為的な改変が加えられている。地表面から約7・80cmの深さで地山面に達するが、攪乱の及ぶ範囲は思ったより狭く、遺構の保存状況は比較的良好であった。

検出した遺構には土壙(SK)や溝(SD)、小穴(P)、盛土遺構等があるが、所属時期が確実な遺構は中世に限られる状況であった。出土遺物については古墳時代と古代、中世の3時期に大別できる。ここでは、時期ごとに主な遺構と遺物について概要を述べる。

(1) 古墳時代(図2・4) (写真9・10)

古墳時代の出土遺物には、5・6世紀頃と思われる土師器や須恵器がある。包含層や攪乱層の中から粉々の状態で若干出土している。特徴的な遺物としては初期須恵器片(図4-3・4)の出土が注意される。また、小穴(P)の中から比較的遺存状態の良い土師器の台付甕が出土している。P28では口縁部片(1)、P70では台脚部片(2)が出土している。柱穴の掘り方の埋土中に混在したものと思われる。

(2) 古代(図2~4) (写真6・11~13)

古代(奈良・平安時代)に該当する出土遺物には各種器形の須恵器の他、わずかながら灰釉陶器片なども認められる。古代に属する可能性のある遺構としては、唯一、完形の須恵器の杯(図4-5)が出土したP68の小穴の例に限られる。他に緑釉や灰釉陶器片が出土した小穴(P)もあるが、中世の遺物と混ざって出土している。P2で緑釉陶器(写真13の左上)、P52とP62で灰釉陶器の碗の小片が出土している。他にはSK01において出土した羊形硯の頭部片(図4-16)(写真12)が注目される。くちばしや角などを欠失するなど、傷みが激しく旧状がわかりにくい状態となっている。胎土からは猿投窯産が推定されるものの、通常の須恵器と同じ程度の粘土を素材としており、特別に水籤するなどの精選したものではないことは明らかである。焼成はしっかりと堅く焼き上がっており、にぶい赤褐色を呈している程である。あまり丁寧な焼成のように思えない。羊形としての表現も簡略で、眼と頭頂部の切れ目によって、それと解る程度である。

(3) 中世(図1~5) (写真3~5・7・8・13~16)

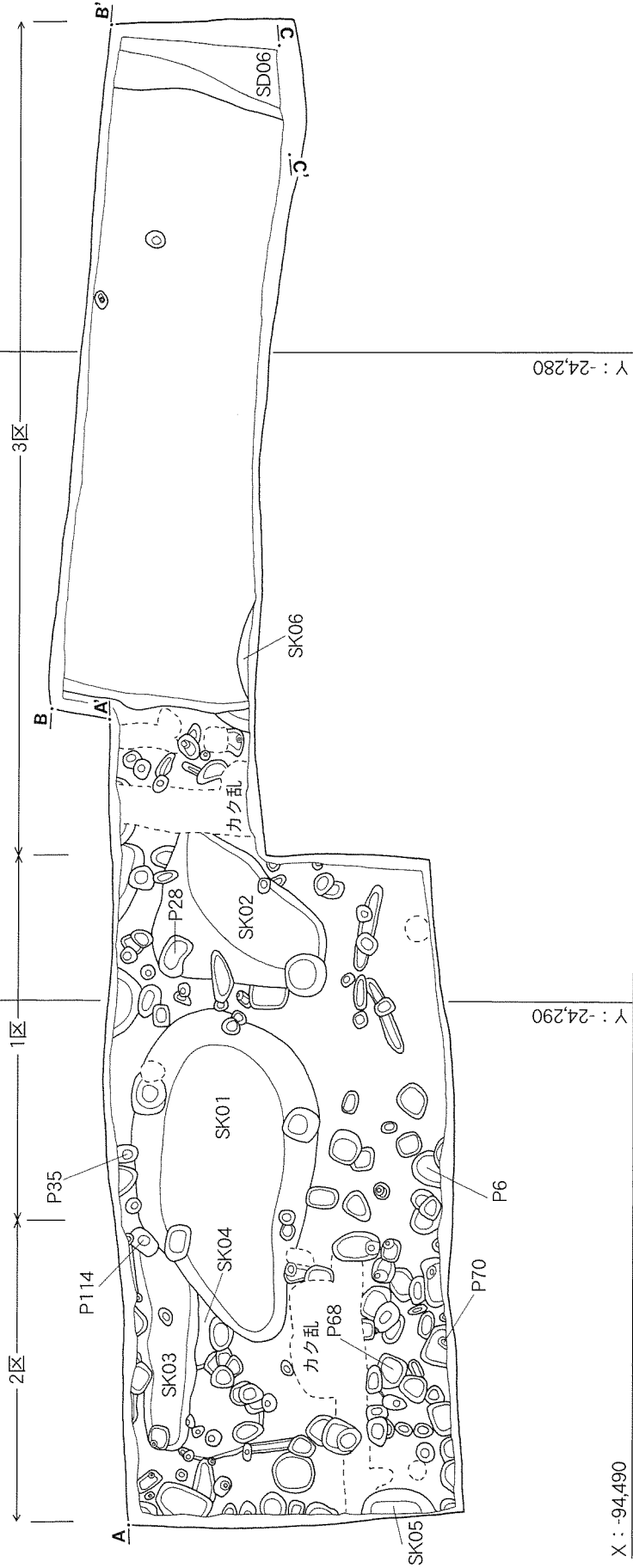
中世(鎌倉・室町時代)に該当する遺構としては小穴(P)、土壙(SK)、溝(SD)等が挙げられ、今次の調査区にあつては最も主体となる時期である。主な遺構ごとにその在り様を述べる。

SK01(図2~4) (写真3・4・6・12・14)

調査区西寄りの位置で検出している。長軸で約5.0m、短軸で約3.0mを測る平面が不整楕円形を呈する土壙である。掘り込みは浅く、深い所で確認面から約20cmを測る。断面形は浅い皿状をしており、埋土は



X : -94,480



X : -94,490

Y : -24,290

Y : -24,280



図2 調査区全体図(1:100)

地山の砂を多く含むしまりのない土が大部分を占めている。出土遺物は古墳時代から中世に至るまで比較的多数あるが、皆一様に粉々の状態で散らばって出土しており、意図的に埋置したものではないことが理解される。性格不明と言うべき遺構である。出土遺物は少数の古墳時代の土師器や須恵器、古代の須恵器や灰釉陶器、先に触れた羊形硯等の他は、皆、中世の時期に該当する。北部系の山茶碗（図4-9）や、瀬戸美濃の大窯Ⅰ・Ⅱ期に属する碗（10）、壺（11）、播鉢（12）、卸皿（13）等の各種陶器がある。他に羽釜（14）や土鍋（15）などの土師器がある。また、瓦質の陶硯（17）も注意される存在である。

SK02（図2・3・5）（写真3・15）

調査区中央において検出している。長軸で約3.0m、短軸で約2.2mを測る平面が不整形な土壇である。掘り込みは浅く、深い所で確認面から30cm弱を測る。断面形は浅い皿状をしており、埋土はSK01と同じく地山の砂を多く含むしまりのない土が多い。出土遺物には古墳時代から中世に至るまでの比較的多数があるが、皆一様に粉々の状態で散らばって出土している。性格不明の遺構である。出土遺物には少数の古墳時代の土師器や須恵器、古代の須恵器がある他は、皆、中世の時期の遺物である。北部系の山茶碗や、古瀬戸の花瓶（図5-18）や陶丸（21）（写真15の右）等がある。土師器には小皿（19）や伊勢型鍋（20）等がある。

SK05（図2・5）（写真4）

調査区の西端にかかることから、部分的な検出にとどまっている。南北で約1.1mを測る。深さは確認面から約40cmを測る。出土遺物には少数の古墳時代の土師器や須恵器、古代の須恵器がある他は、皆、中世の時期の遺物で占められている。山茶碗や瀬戸美濃の施釉陶器、土師器の小片少数の他、瓦器の風炉（図5-22）の口縁部が1点認められる。

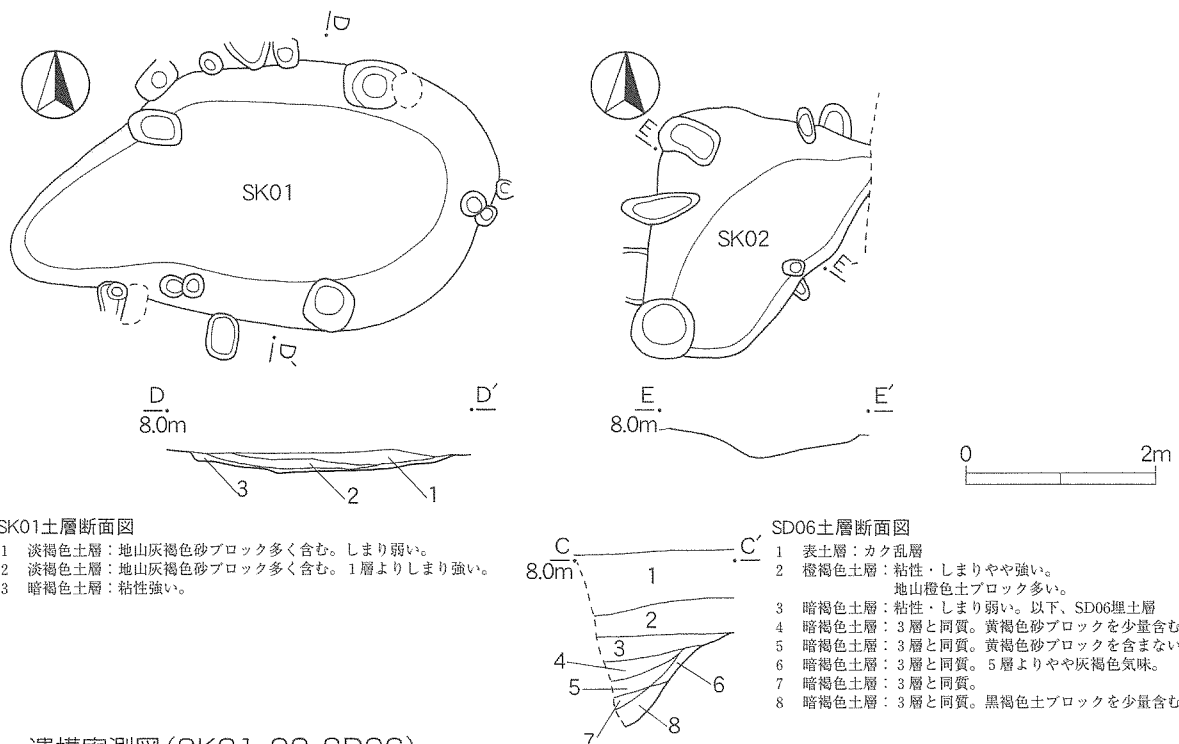


図3 遺構実測図(SK01・02・SD06)

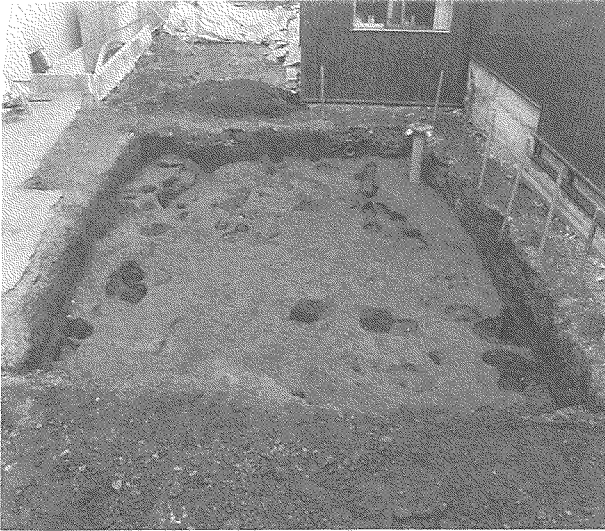


写真3 1区全景(西から)



写真6 SK01羊形硯出土状況(東から)

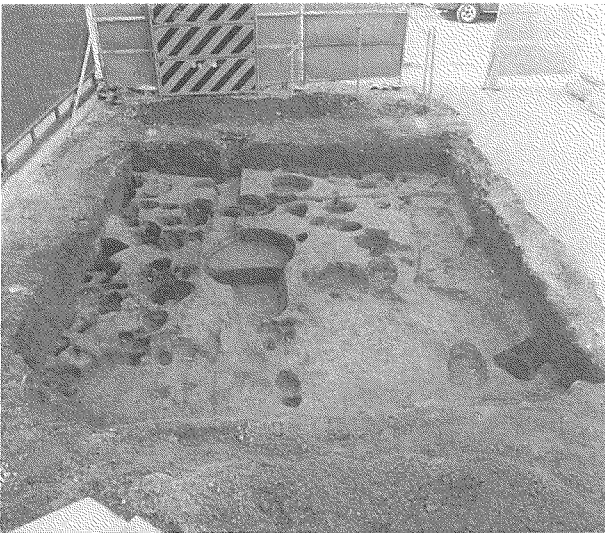


写真4 2区全景(東から)

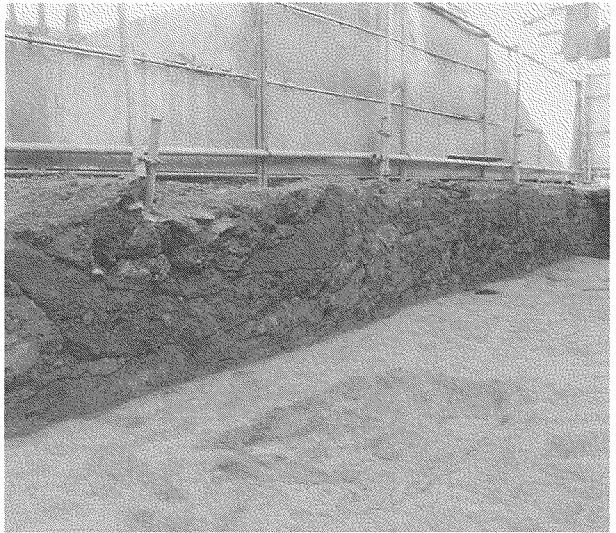


写真7 3区北壁土層断面(南西から)

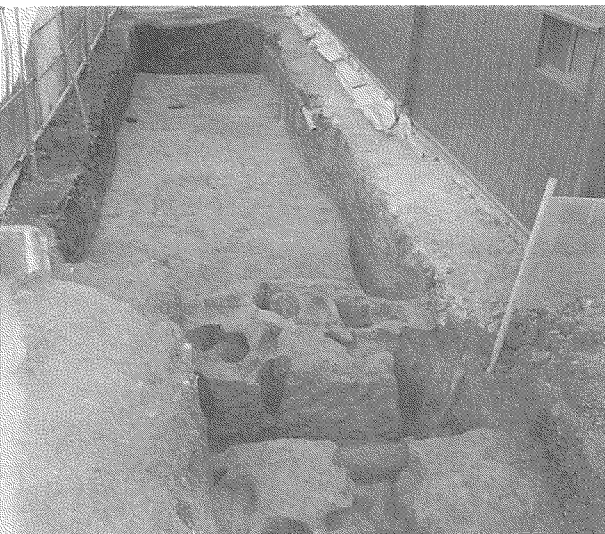


写真5 3区全景(西から)



写真8 SD06(西から)

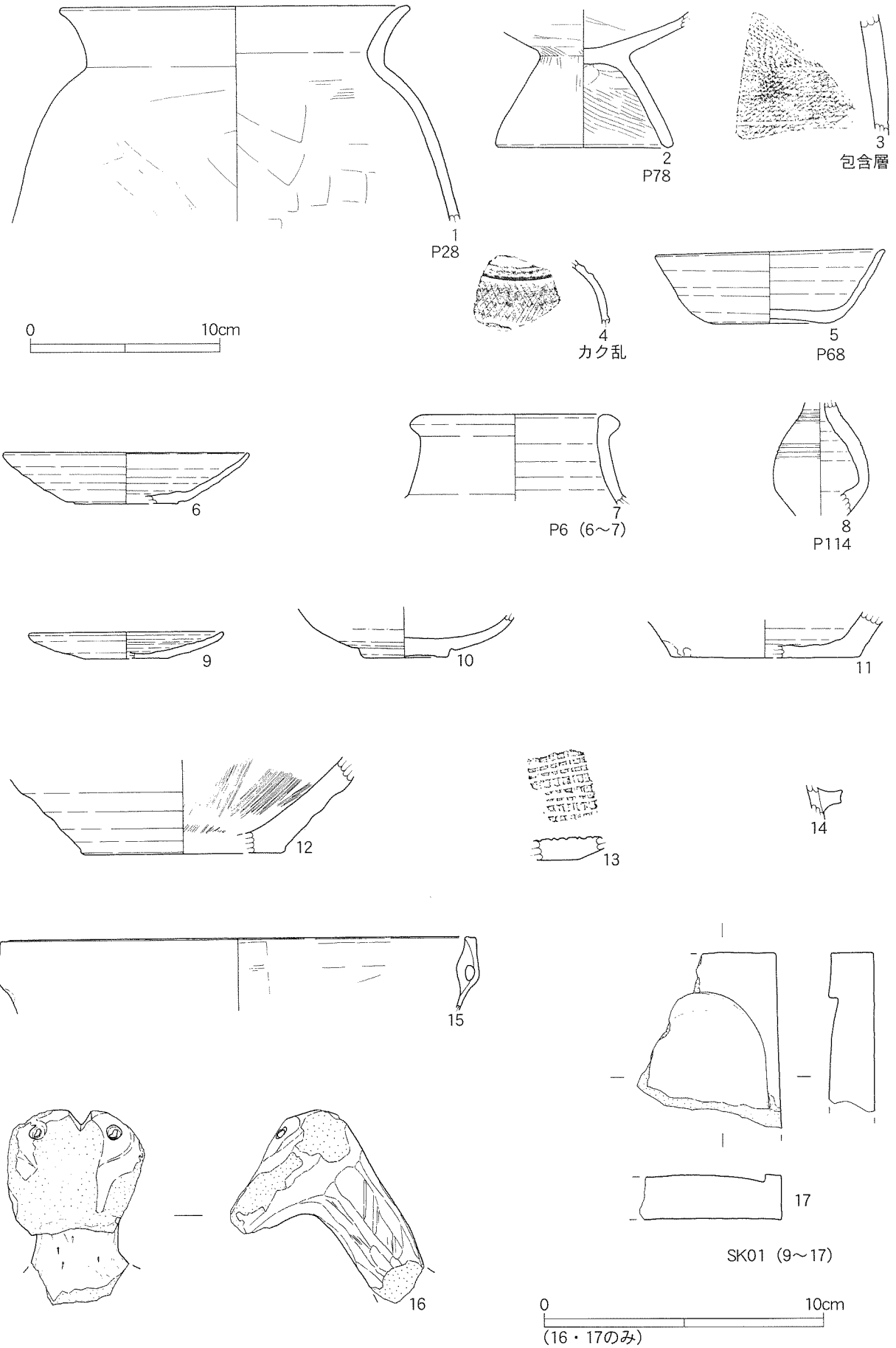


図4 遺物実測図(1)

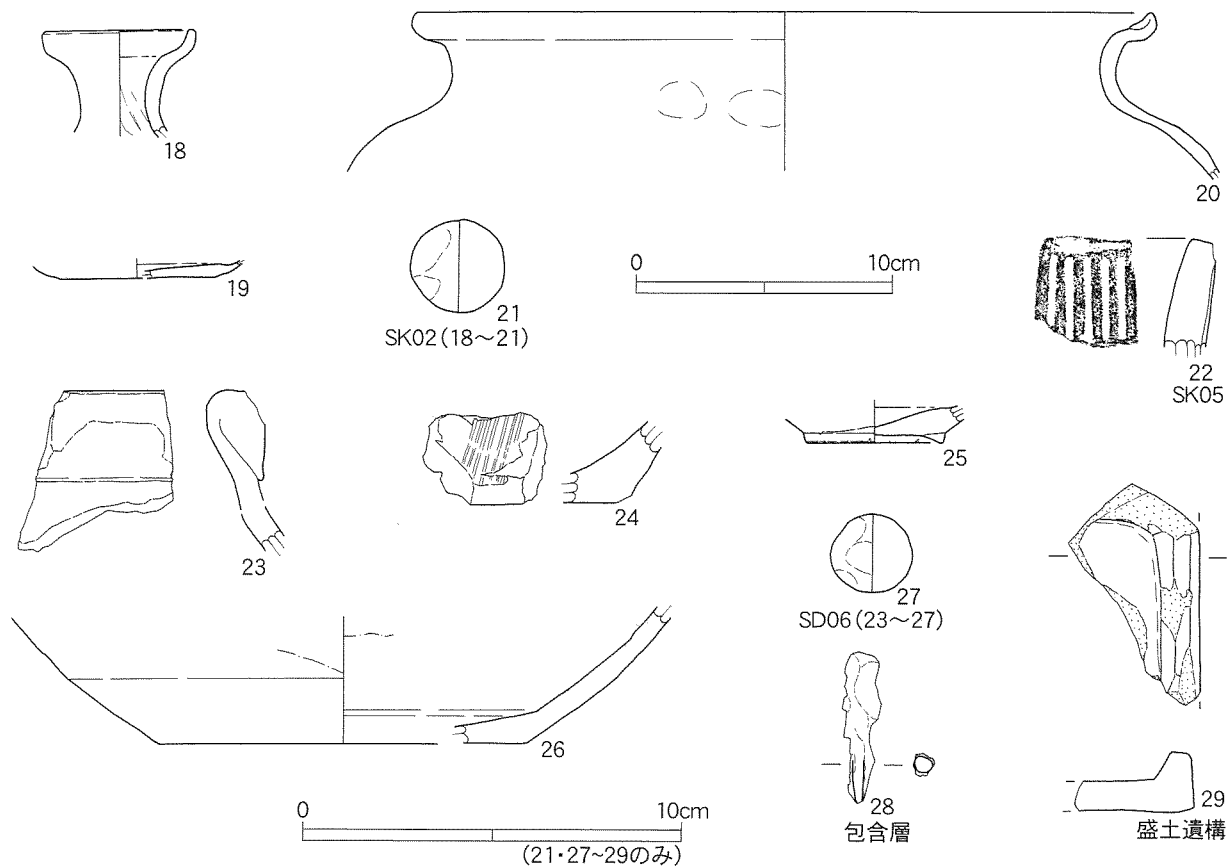


図5 遺物実測図(2)

SK03・04・06 (図2) (写真4・5)

後世の遺構に切られていたり、ごく一部のみ調査区にかかるなど、平面形状が不明確な遺構である。出土遺物もそれぞれごく微量で、古墳時代の土師器や古代の須恵器小片が認められるものの、所属時期を明かにできない。性格不明の遺構である。

SD06 (図2・3・5) (写真5・8・13・15)

調査区の東端において南北方向に続く溝の肩の一部分のみを検出している。幅は現状で約1.4m、推定では3mを超えるものと思われる。深さは確認面から現状で約1.0m、地表面からは約1.8mを測る。土層断面図(図3)を見ると、しまりの弱い暗褐色土が大半を占めており、比較的短期間のうちに埋積した様子がうかがえる。出土遺物としては古墳時代の土師器や須恵器の小片がわずかにある他は、皆、中世の時期のもので占められている。中国陶磁の青磁碗(写真13の左下)や常滑の甕(図5-23)、南部系の山茶碗(25)、陶丸(27)(写真15の中央)等の他、15世紀から16世紀までの瀬戸美濃製品である播鉢(24)や大皿(26)等がある。

小穴(P)(図2~5)(写真3~5・16)

調査区の西側では小穴(P)が比較的密に検出されている。調査区の東側では後世の改変が大規模に行われており、遺構の殆どが削平されたものと思われる。多くは掘立往建物跡の柱穴と推定されるが、その規模や構造をうかがうには無理がある。小穴(P)の内の多くはおそらくは中世に属するものと思われるが、確実な時期を想定できるものは限定される。平面の直径が20cm程の小規模なものから、1mぐらいま



写真9 土師器

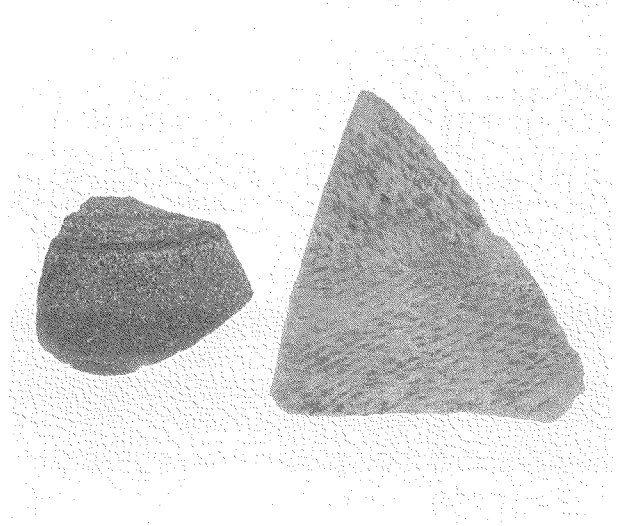


写真10 須恵器



写真11 須恵器



写真12 羊形硯

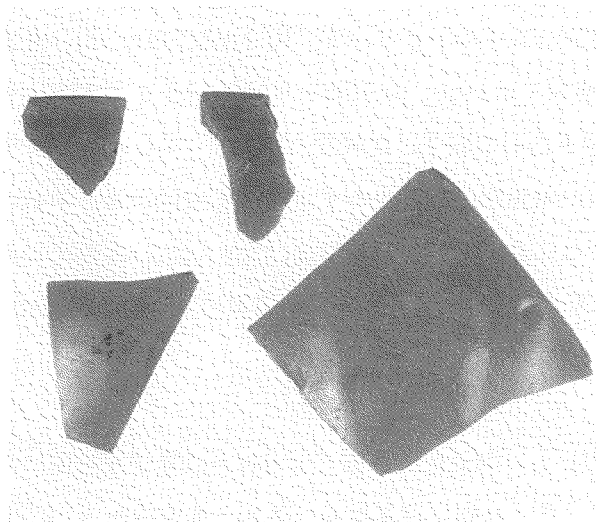


写真13 緑釉陶器・青磁



写真14 陶硯

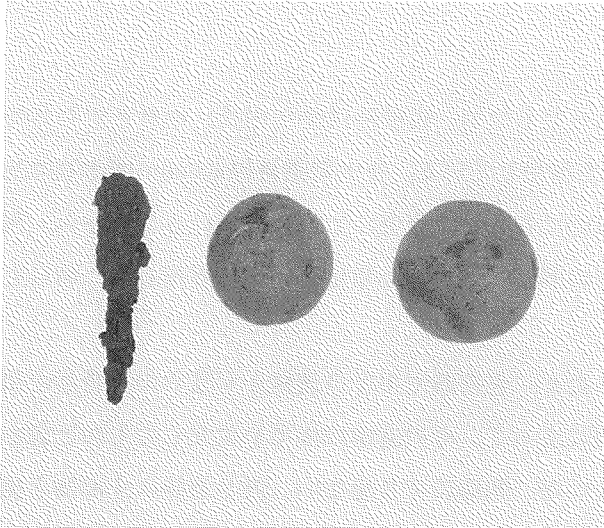


写真15 鉄釘・陶丸

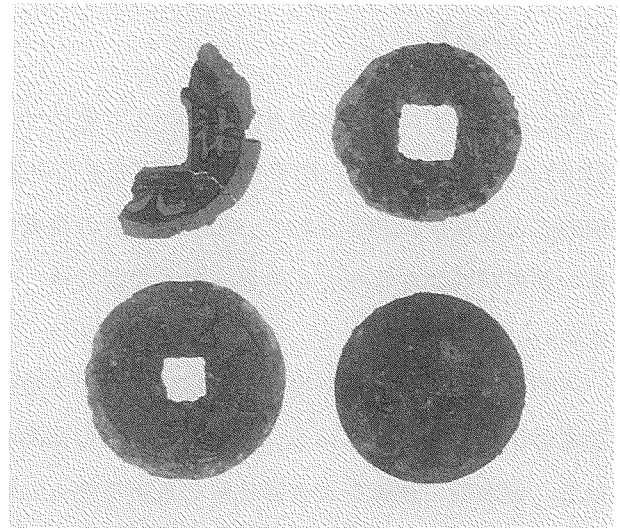


写真16 銭貨

である。最も多いのは50cm程の規模のもので、所属時期を推定できる遺構としてはP6とP35、P114の3例にとどまる。P6からは北部系の山茶碗（図4-6）と古瀬戸の四耳壺（7）、P114からは古瀬戸前期の花瓶（8）が出土している。P35では中世の土師器片等と共に渡来銭（写真16左上）が1枚出土している。破銭となっており、「□祐元□」とだけ判る。景祐元寶（真書）（北宋1034年初鑄）の書体に近似する。柱立ての際の建築儀礼に用いられた銭貨であろう。

盛土遺構（図1・2・5）（写真5・7・14）

調査区の東側では、土層断面図（図1）を見ると明らかなように、地表面から1m程の深さまで地山面を大きく削り取った後に、地山の粘質土と有機質の強い土を版築状とは言えないまでも、それに近い状態で互層に盛土して、しっかりと固められた様子がうかがえた。盛土中からは瓷器系陶器質の陶硯（図5-29）が1点出土している他は、殆ど出土遺物を認めなかった。調査区の東端では盛土層の下位から、16世紀代の出土遺物を伴う堀状の遺構（SD06）が確認できているので、それより後の構築物であることがわかる。近世まで降る時期の遺物は殆ど認められないので、おそらくは戦国期の内に手が加えられたものと思われるが、判然としない。

その他（図2）（写真13・15）

包含層や攪乱の中から、鉄釘（図5-28）（写真15左）や中国陶磁の青磁2点（写真13右上下）等が出土している。

（4）近世以降（写真13・15）

表土層中から銭貨が3枚出土している。古寛永通寶（写真16左下）と新寛永通寶（写真16右上）、桐1銭青銅貨（大正12年）（写真16右下）の各1枚である。

三. 小結

第13次を数える今回の調査区は約90㎡と狭小ではあったものの、古墳時代から古代、中世までの各時期にわたる出土遺物と、中世を主体とする多くの遺構を検出している。正木町遺跡は約400m四方強の比較的広大な遺跡範囲とされているが、過去の調査においても点的な調査にとどまっていることから、調査の蓄積が期待される所であった。ここでは、今回の調査で得られた知見を簡単に整理して、結びとしたい。

古墳時代にさかのぼる明確な遺構は確認できなかったが、包含層や中世の遺構から若干の土師器と須恵器の出土遺物を得ている。度重なる後世の土地利用によって、その遺構の大半を欠失したものと思われる。痕跡的に遺構をとどめるものもあるかもしれないが、明確にでき得ない。出土遺物の土師器と須恵器は、いずれも小破片で器形をとどめるものは僅少である。正木町遺跡では初期須恵器が広範囲にわたって分布していることが知られているが、今回の調査でも例に洩れることはなかった。

古代に関しても古墳時代と同様で、包含層や中世の遺構から若干の出土遺物を得ている。殆どは小破片で摩滅したものもある。特に注意されるのは、16世紀代の陶器類と共にSK01で出土した須恵質の羊形硯である。損傷著しく原形をとどめる部分が限られており、類例を念頭に置いた上でなければ、とても羊形とは理解しがたい程である。現在のところ、国内で6例目となる極めて稀な出土事例のようであるが、他の平城京や斎宮、三河国府等の羊形硯と較べると、その造形や胎土、焼成等において格段の出来映えの差が看取される。特に胎土の質に明かな違いがあり、平城京他の例では精選された良質の粘土を用いているようであり、特別の誂え品であることが窺える。また、その造形表現の程度差も顕著であり、実際の使用者の階層差を明示しているように思われる。時代は降るものの、中世の瓦質の陶硯が偶然にして同じ遺構内で出土している。また、盛土遺構からは瓷器系陶器質の陶硯も出土している。時代を異にする3点の陶硯が狭い範囲で共に出土するという偶然が重なった。陶硯の保有する性格も時代と共に変遷をみたと思われるが、当地において奈良、鎌倉、そして室町時代において、支配者側の階層に連なる人物のいたことを雄弁に物語っている。

中世は最も充実した時期で、遺構としては性格不明の土壙（SK）や盛土遺構の他、城館跡の堀の一部と考えられる溝（SD）、掘立柱建物跡の存在を示す小穴（P）等がある。鎌倉時代から戦国時代までの各時期あることが想定されるが、小面積の調査では引き出す情報量に限界がある。マクロ的な視点が要求される所である。殊に城館跡の堀の一部と思われる遺構については、周囲を見回してみると、正木町遺跡内各所や南接する伊勢山中学校遺跡のあちこちで発見されており、直接あるいは間接的に連関するようである。重層的な構造の城館跡が当地周辺に広がっていた可能性が推定される所であり、今後の調査の進展が期待される所である。

伊勢山中学校遺跡

—第8次発掘調査報告—



例言

- 一、 本書は、伊勢山中学校遺跡の第8次発掘調査報告書である。
- 二、 第8次調査地点は、名古屋市中区正木二丁目707である。
- 三、 調査は、個人住宅建築工事にともない、平成12年7月17日から平成12年7月31日まで、約100mを対象としておこなった。
- 四、 調査は、名古屋市教育委員会がおこない、名古屋市見晴台考古資料館学芸員 藤井康隆・伊藤正人が担当した。
- 五、 資料整理や製図作業にあたり、岡地田津、稲田望子の協力をえた。
- 六、 出土遺物および記録類は、名古屋市見晴台考古資料館が保管している。
- 七、 付篇において正木町遺跡出土鉄鋌の資料紹介をおこなったが、この資料の詳細な検討については、藤井康隆が、岩手県立博物館 関博充氏との共同研究をおこなう。
- 八、 本書の執筆は、藤井がおこなった。

目次

| | |
|----------------|----|
| 一、 位置と環境 | 32 |
| 二、 既往の調査と遺跡の概要 | 33 |
| 三、 調査の概要 | 34 |
| 四、 遺構と遺物 | 34 |
| 1 古墳時代 | |
| 2 古代以降 | |
| 3 その他の遺物 | |
| 五、 まとめ | 42 |
| 付篇 | 45 |

本文挿入図版目録

| | |
|--------------------|----|
| 第1図 伊勢山中学校遺跡の位置 | 32 |
| 第2図 既往調査地点と第8次調査地点 | 33 |
| 第3図 SK1出土鉄器 | 34 |
| 第4図 第8次調査区平面図 | 35 |
| 第5図 調査区および遺構断面図 | 36 |
| 第6図 SK1出土土器 | 37 |
| 第7図 遺構エレベーション | 37 |
| 第8図 SK2遺物出土状況 | 38 |
| 第9図 SK2出土須恵器甕 | 38 |

| | | |
|------|--------------|----|
| 第10図 | S K 2 出土遺物 | 39 |
| 第11図 | S K 3 出土遺物 | 40 |
| 第12図 | S K 6 出土遺物 | 40 |
| 第13図 | P 4 出土遺物 | 41 |
| 第14図 | ピット出土遺物 | 41 |
| 第15図 | P 7 0 出土遺物 | 41 |
| 第16図 | ピット出土遺物 | 41 |
| 第17図 | 北西トレンチ出土遺物 | 42 |
| 第18図 | 表採および攪乱坑出土遺物 | 42 |
| 第19図 | 韓式土器の斜格子タタキ | 43 |

本文写真図版目録

| | | | | |
|------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------|
| 図版第1 | (1) 調査区全景 (南東より) | (2) 調査区全景 (北西より) | (3) S K 1 検出 | (4) |
| | S K 2 (北より) | (5) S K 2 遺物出土状況1 | (6) S K 2 遺物出土状況2 | (7) S K 6 |
| | 北西トレンチ | | | (8) |
| 図版第2 | (1) S K 1 出土遺物 | (2) S K 2 出土遺物 | | |
| 図版第3 | (1) 土師器高坏 (S K 1) | (2) 土師器高坏 (S K 1) | (3) 韓式土器 (S K 1) | (4) |
| | 韓式土器 (S K 2) | (5) 須恵器高坏 (S K 2) | (6) 須恵器高坏 (S K 2) | (7) 須恵器甕 (S |
| | K 2) | (8) 須恵器把手付碗 | | |

付篇挿入図版目録

| | | |
|----|-------------------|----|
| 図1 | 正木町遺跡第4次調査地点 | 45 |
| 図2 | 正木町遺跡第4次調査出土不明鉄製品 | 45 |
| 図3 | 正木町遺跡第4次調査出土鉄鋌 | 46 |
| 図4 | 鉄鋌出土遺跡の分布 | 46 |

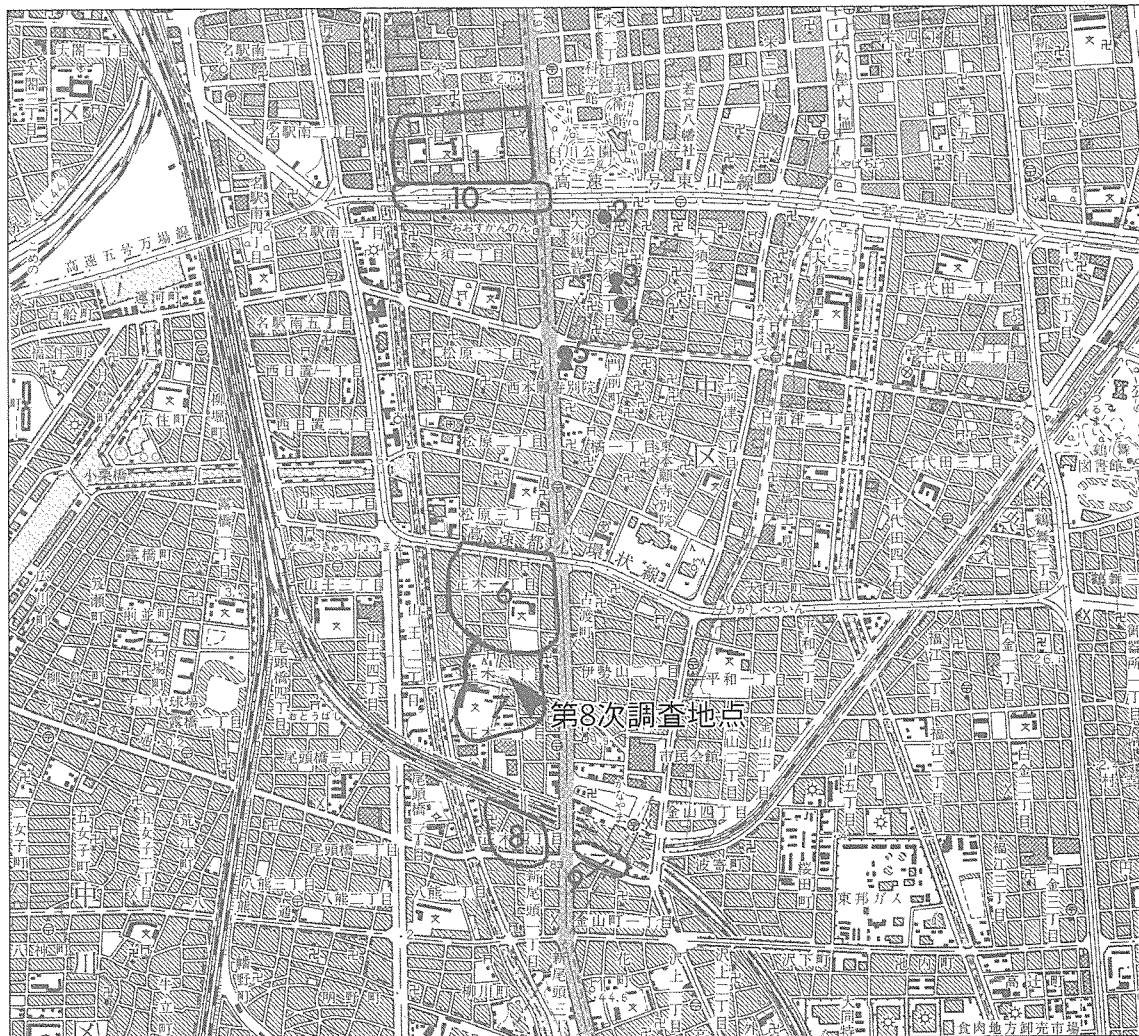
付篇写真図版目録

| | |
|----|----------|
| 写1 | 不明鉄製品 |
| 写2 | 鉄鋌 (表、裏) |

I 位置と環境

伊勢山中学校遺跡（第1図）は、金山駅の北西約600m、中区正木二丁目から三丁目にかけて所在する。地理的には、名古屋台地が半島状に突出した、いわゆる熱田台地（標高7～9m）の西縁部に立地する。当遺跡が立地する熱田台地西縁の段丘崖からは眼下に堀川をみおろし、堀川の西には低地がひろがっている。古代以前には、ここまで海がはいつてきていたと推定されている。

当遺跡の北側には正木町遺跡が隣接し、南側ではおおきく距離をおかずに尾張元興寺跡が所在する。これらの遺跡は、現在は異なる遺跡名がついているものの、古墳時代の集落遺跡としては伊勢山中学校遺跡と一体の集落をなすと考えられる。また、金山駅前所在する東古渡町遺跡では、古墳時代の方形周溝墓群（註1）を検出している。円筒埴輪や家形埴輪、須恵器が出土しており、当遺跡と重複期間をもつ墓群である。尾張元興寺跡では7世紀半ばごろに尾張元興寺が創建されている。熱田台地先端ちか



- | | | |
|-----------|-------------|-----------|
| 1 豎三蔵通遺跡 | 5 大須二子山古墳 | 9 東古渡町遺跡 |
| 2 日出神社古墳 | 6 正木町遺跡 | 10 旧紫川遺跡 |
| 3 那古野山古墳 | 7 伊勢山中学校遺跡 | |
| 4 浅間神社古墳 | 8 尾張元興寺跡 | |

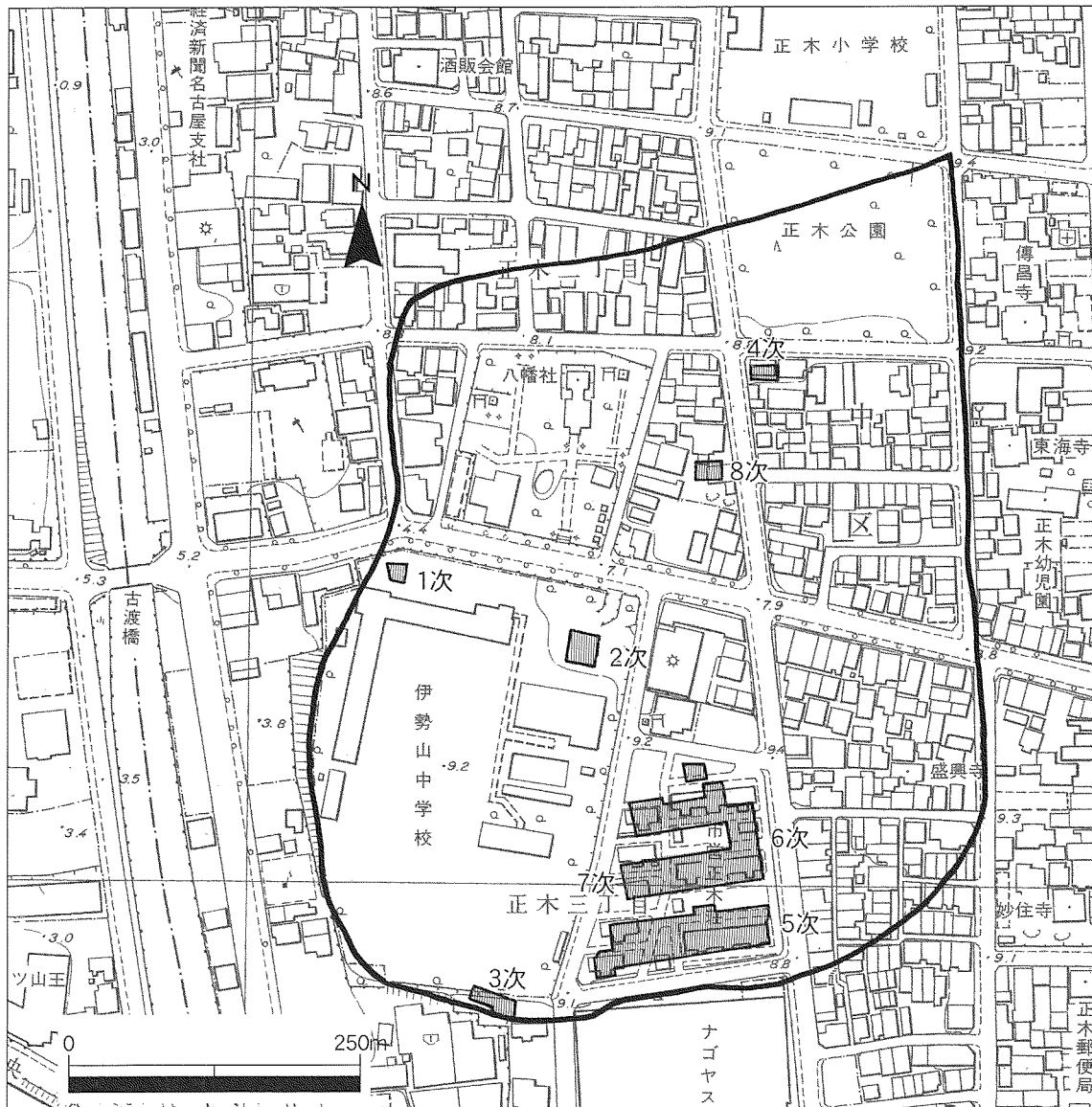
第1図 伊勢山中学校遺跡の位置 (S=1/25000)

くに立地する断夫山古墳も、当遺跡と重複する時期をもつ。また、中世になると、おおくの城館がこの地域に築かれ、当遺跡や正木町遺跡でも、城館の濠とおもわれる大溝を検出している。

このように、当遺跡の歴史的環境は、古墳時代から古代にいたるまでの重要な遺跡が集中しており、遺跡群として有機的に把握し、歴史復元をおこなう必要がある。

二. 既往の調査と遺跡の概要

伊勢山中学校遺跡では、これまでに7次にわたる調査を経ている（第2図）。検出した遺構や遺物から、5世紀～6世紀前半ごろにかけての、古墳時代の集落遺跡を主要な内容とする。第1次調査から第7次調査にいたるまで、第4次調査をのぞいては、古墳時代の竪穴住居を検出しており、大規模な集落域であったことがうかがえる。遺物については、初期須恵器をふくむ古式須恵器やその併行期の土師器が、一定数まとまって出土することが特記できる。また、住居址より、袋状鉄斧（第3次調査、名古屋市教委1987）、鉄鋌（第5次調査、名古屋市教委1996）が出土していることも、とくに注意すべきである。第7次調査（名古屋市教委1998）では、小土坑より、完形の須恵器蓋環が出土している。蓋を開けたな



第2図 既往調査地点と第8次調査地点

かには、白玉や小石が詰められていたほか、科学分析によって、塩がはいっていた可能性も指摘されている。こうした調査によって、伊勢山中学校遺跡は、北側に隣接する正木町遺跡、南側に隣接する尾張元興寺跡とともに、古墳時代中期から後期にかけての大規模集落であることが判明し、名古屋台地部の当該期における中枢的集落として、その重要性がひろく周知されるようになった。地理的条件をも考慮して、原史古代における海を越えての交流・交易の拠点としても検討していく必要がある。

古墳時代以外の遺構としては、古代のものかと考えられる大型掘立柱建物、中世の大溝や井戸などを検出している。この地域が、古墳時代以来中世にいたるまで、現名古屋市域のなかでも、中心的な場所であったことを推定できる。そのほかの遺物には、古代から中世の陶磁器、近世陶磁器、弥生土器、縄文土器などがある。小規模調査がおおいため遺跡全体像を把握するまでにいたっていないが、古墳時代～古代を中心とする、およそ弥生時代から近世の複合遺跡と考えてよからう。

三. 調査の概要

第8次調査地点と調査の経過 　あらためて調査地点の地理的条件をみておこう。伊勢山中学校北側を東西にとおる道路がある。この道路は本来、堀川の流れる低地から台地へきれこんできた小規模な谷筋であったようである。この谷の北側は緩やかな斜面を、南側は比較的きりたった崖状の急斜面をなしていたようすをうかがうことができる。調査地点は、この谷筋をあがりきったすぐ北側で、台地西縁の段丘崖よりもやや東寄りの場所にあたる。

今次の調査は、個人住宅の建築工事にともなうものであり、約100mを対象とした。過去の調査歴などから、古代以前の遺構面は残存するものの、その上の包含層の残存状況はあまりよくないことが予想された。表土除去後、包含層の状況を確認したが、約0.1m程度しか残存しなかった。そのため、包含層については、遺構の有無を確認後、掘削した。包含層の下には地山（熱田層）面があり、上位層の赤橙褐色粘質土と下位層の黄白色砂の二層が確認できた。調査対象となった遺構は、この熱田層の面で検出した。

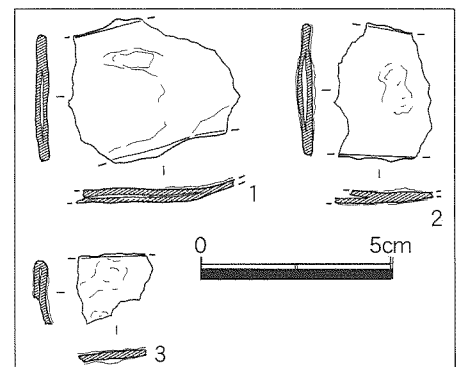
四. 遺構と遺物 (第4図・第5図・第7図)

1 古墳時代

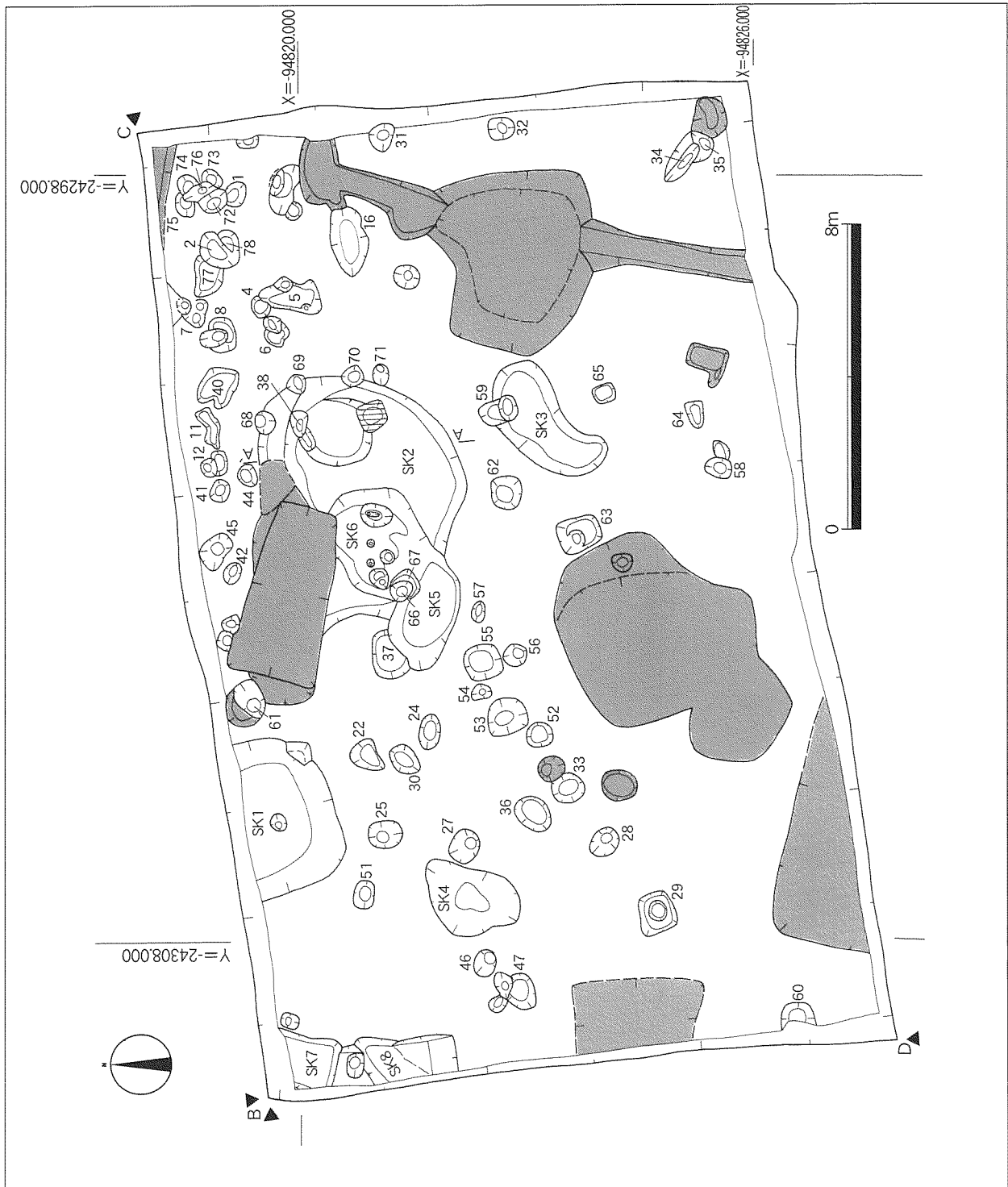
SK1

遺構 　調査区北壁にかかるかたちで検出した土坑である。検出部分からは、方形の土坑であると推定できる。北壁際の土坑内東側で、焦土の堆積を確認した。埋土内および土坑底面から、土師器の高坏、台付甕、韓式軟質土器、鉄器片などが出土している。

遺物 　韓式軟質土器（第6図-1）は、口縁部が外へつよく屈曲する。胎土は、赤褐色で砂粒がおおく、かなりもろい。内面は丁寧にナデており、外面は斜格子タタキがほどこされている。この斜格子タタキは、斜格子の目が全体に直線的によくおっており、あきらかにタタキ単位のきりあいといえる箇所がみいだせない。斜格子の目が縄目状を呈する箇所があり、また斜格子を構成する直線のうち右上から左下にかけてとおるものが、



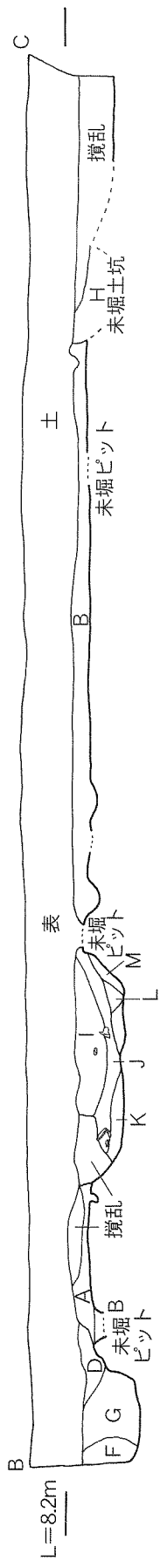
第3図 SK1出土鉄器



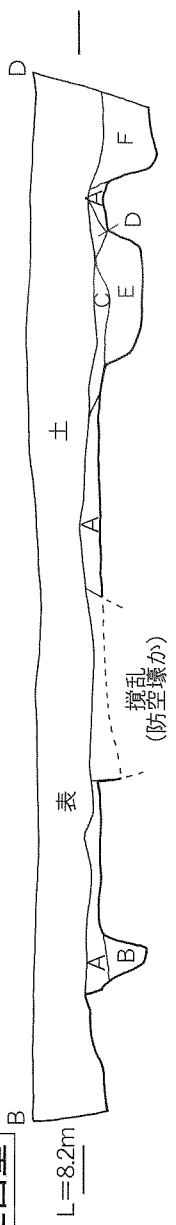
第4図 第8次調査区平面図(トーン部分は攪乱坑)

他方にくらべて弱い。やや特殊な印象をうけるタタキである。(2)は、台付甕の脚部である。(3~15)は、土師器高坏である。いずれも名古屋台地3期~4期(註2)(松河戸I式後半~松河戸II式併行期)のものとおもわれる。(4)の高坏は、坏部下半の稜を、きわめて高く突出する突帯を貼りつけてつくっている点が特徴的である。(16~18)は須恵器片である。(16)は甕の胴部片とおもわれ、斜め方向の縄目タタキがほどこされている。(第3図-1~3)の鉄器片は、鍛造による細長い鉄板状のものの破片である。重量は、(1)が14.8g、(2)が7.1g、(3)が2.8gである。

調査区北壁

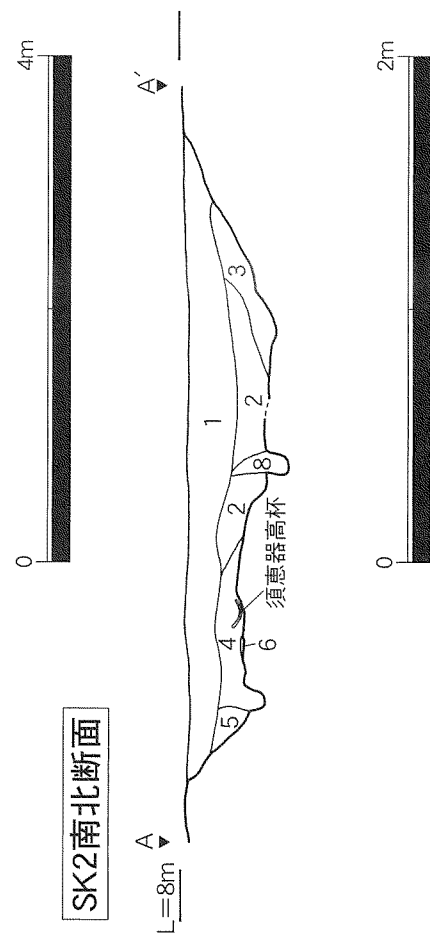


調査区西壁



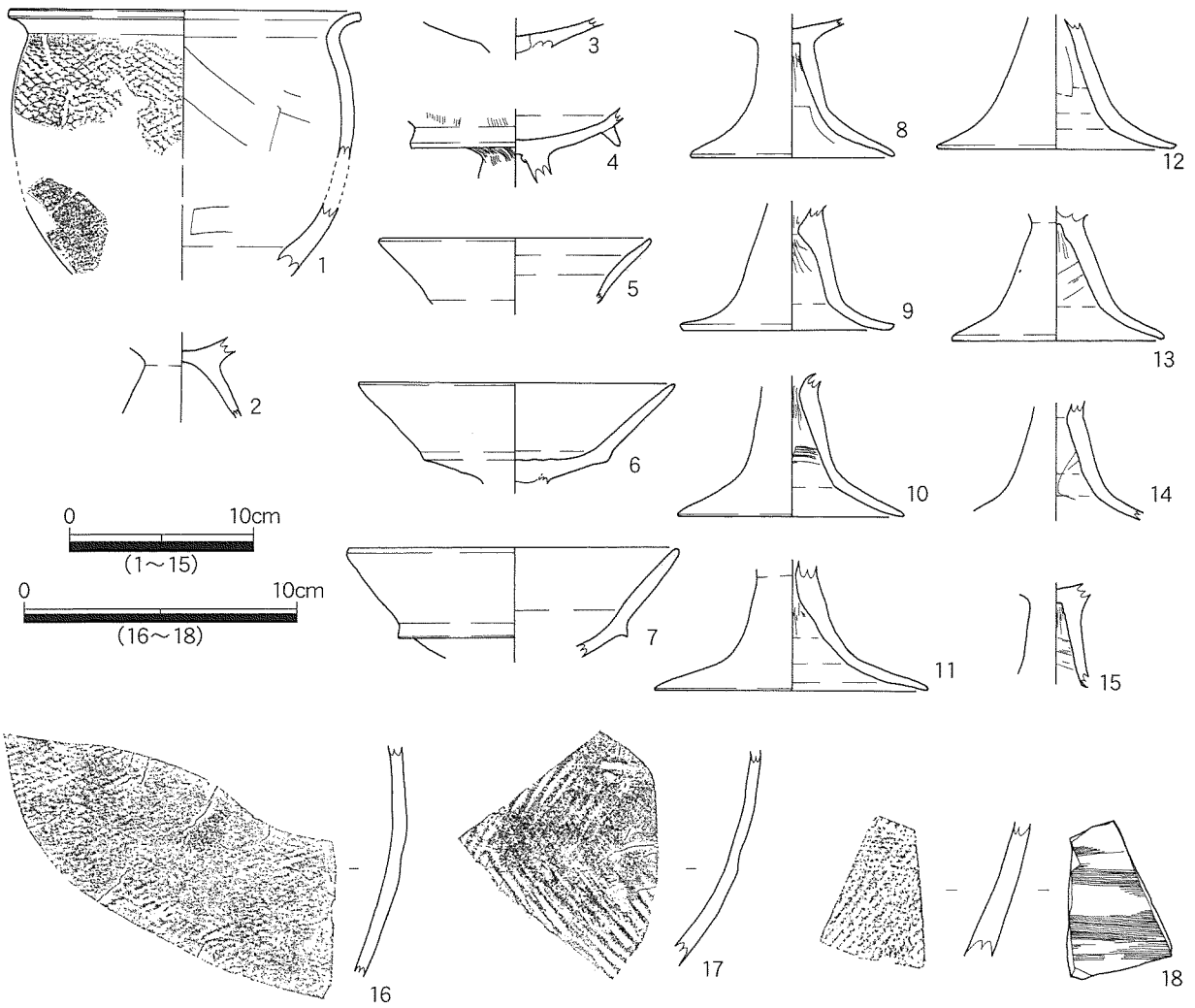
- A 暗褐色土、黒み強い、シルト質
- B 暗褐色土、橙色地山ブロックまばら
- C 暗灰色土、やや砂質、黒色・橙色ブロック密
- D 暗灰色土、黒み強い、やや砂質
- E 暗灰褐色土、橙色地山ブロック密
- F 暗灰褐色土、橙色地山ブロックが主体
- G 暗橙褐色土、橙色地山ブロックまばら
- H 暗灰ピット埋土、地山ブロック・焼土粒密
- I 暗褐色土、黒みあり、わずかに焼土粒
- J 暗褐色土、黒み強い
- K 暗褐色土、黒みあり、焼土粒まばら
- L 暗褐色土、黒みあり、焼土粒きわめて密
- M 暗褐色土、黒みあり、焼土粒わずか、地山ブロックやや密

SK2南北断面

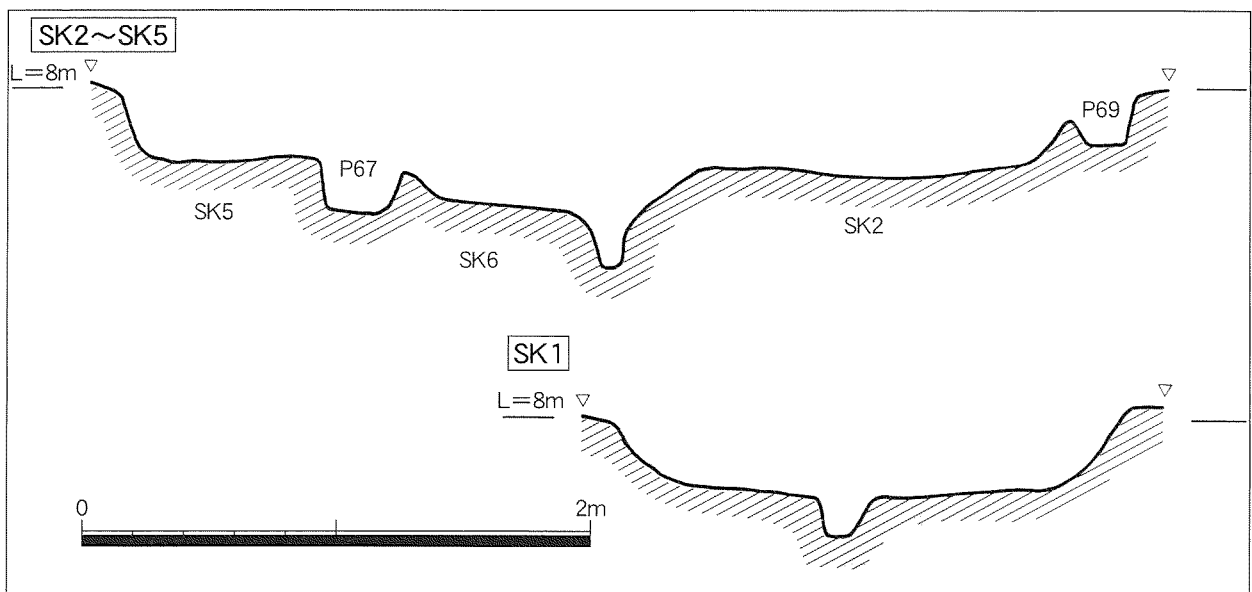


- 1 暗褐色土、黒み強い、地山ブロックまばら
- 2 暗褐色土、1に似るが焼土粒・炭化物粒やや密 (とくに下部)
- 3 暗褐色土、1に似るが地山小ブロック密
- 4 暗褐色土、1に似るがさらに黒み強く、地山ブロックごくわずか
- 5 暗褐色土、1に似るが地山細粒密
- 6 暗褐色土、橙色地山ブロック主体、暗褐色土ブロック混 (粘土か)
- 7 淡褐色土、淡褐色砂混の暗灰褐色土 (上層からのピット)

第5図 調査区および遺構断面図



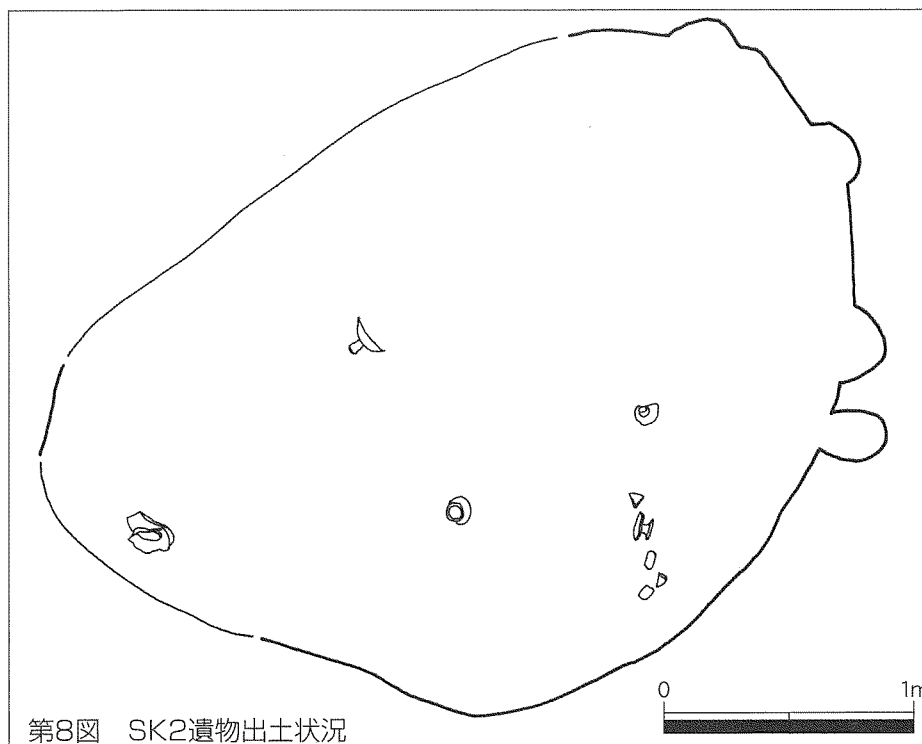
第6図 SK1出土土器



第7図 遺構エレベーション

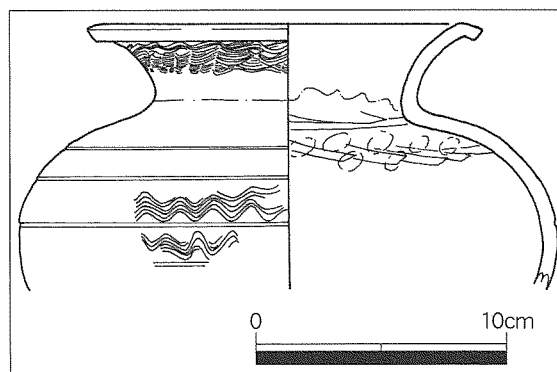
S K 2

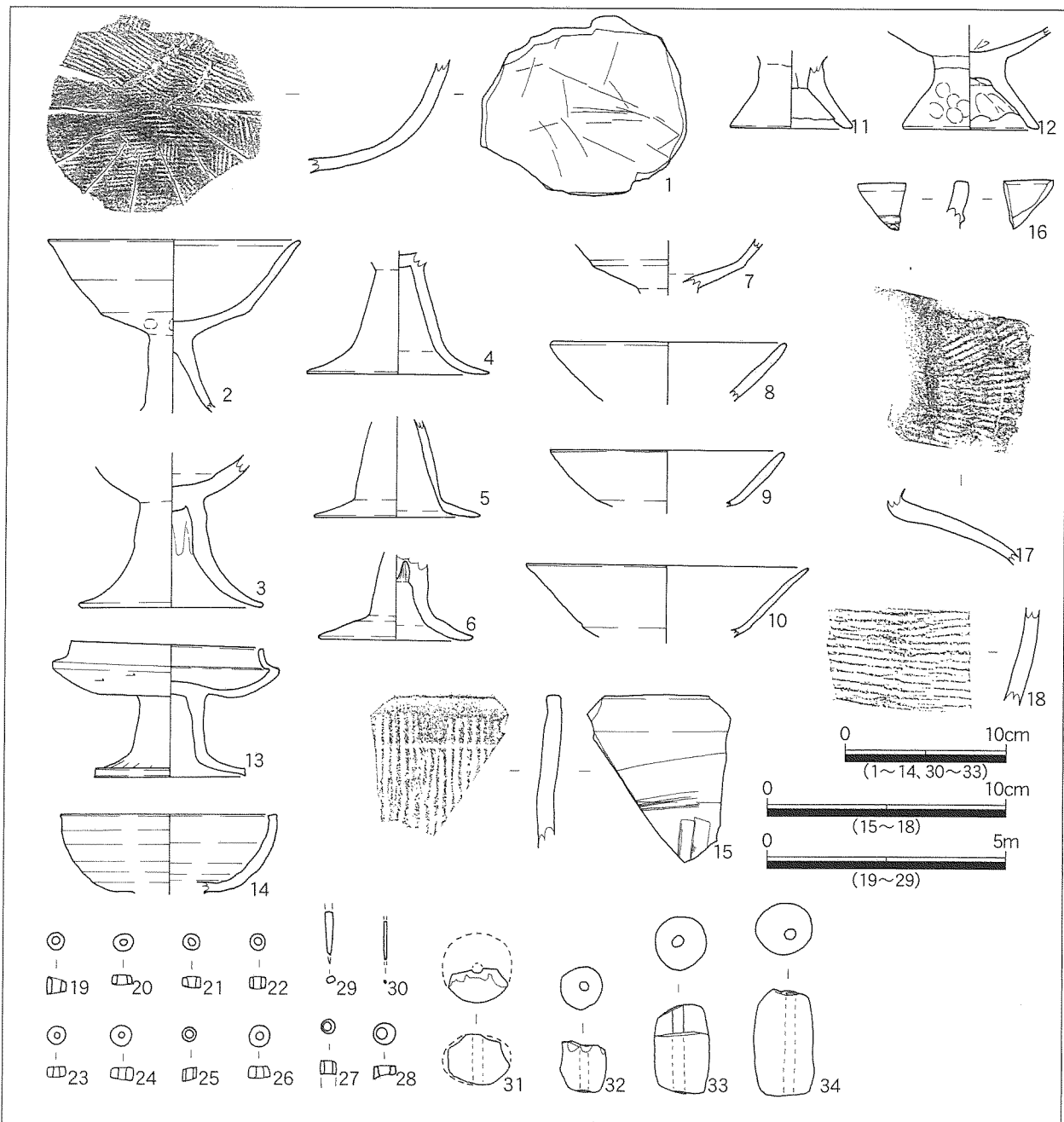
遺構 長径約3m、短径約2.2mの不整楕円形の土坑である。深さは約20cmあり、肩の立ちあがりもしっかりしている。周縁には、掘り方をとり囲むようにならぶ小ピット列（P44・P68～P71）を検出した。間隔が均等でない箇所もあり、性格は不明である。これらのピット埋土内から土師器および須恵器の細片が出土した。底面にさらに別の土坑（S K 6）やピット（P66・P67）が掘りこまれていた。S K 2埋土内からは須恵器片、土師器片多数、白玉が、土坑底面からは須恵器の甕、高坏、土師器の甕、高坏、土錘などが出土した（第8図）。



北西側には太平洋戦争期の防空壕が掘りこまれ、北東側は埋土上層が現代の攪乱をうけていた。また、S K 2底にアミかけでしめしたピットは埋土上面で確認したものである。経文を墨書したまじないの木杭を立てて埋められていた。白色の砂で埋められ、木杭の下からは、この砂に混じって円礫数点、および小刀子と五円玉が出土した。円礫には、木杭に書かれたのとおなじ経文が一石につき一字墨書されていた。五円玉の鑄造年が平成7年であったことから、最近になっておこなわれたまじないである。

遺物 須恵器甕（第9図）は、口縁部がつよく外反し、口縁端部はやや垂下ぎみに段をなす。頸部に波状文をほどこしている。肩がはり、胴部に四条の沈線がめぐる。二条目と三条目、および三条目と四条目の沈線のあいだには、波状文がほどこされる。口縁から胴部上半にかけては、自然釉により緑色に発色している。焼成は堅緻である。東山H111式期ないしその前段階ごろのものと考えられる。（第10図-1）は、韓式軟質土器である。鍋とおもわれる。胎土は、黒褐色ないし褐色でややもろく、砂粒をおおくふくむ。内面は丁寧





第10図 SK2出土遺物

にミガキをほどこしており、ヘラ状の工具があたった痕跡がある。外面は平行タタキである。(2～10)は土師器高坏である。名古屋台地3期～4期と考えられる。(11・12)は、台付甕脚部である。名古屋台地3期～4期のものとおもわれる。(13)の須恵器高坏は、脚のつけ根が細く、下部で脚端部にむかい屈曲するように広がる。脚端部ちかくに、部分的に工具の回転動作の静止痕らしきものがみとめられる。坏部は、蓋受部内面が彎入し、短頸壺をおしつぶしたような形態である。坏部の身外面は、丁寧な回転ケズリがほどこされ、光沢のある淡青灰色の釉薬状のものが均一にかかっている。焼成は良好である。H111号窯式期以前の段階のものと考えられる。(14)は、須恵器高坏の坏部である。碗状の形態で、口縁に平直な端面をつくる。土師器の器形をうつした形であろうか。内外面ともに丁寧な回転ナデによって仕上げられている。焼成はきわめて堅緻である。外面は部分的に緋色に発色している。胎土は、破断面の肉眼観察からは、東山産の土であると推測できる。H111号窯式期以前と考えられる。

(15) は甌形の須恵器の口縁部であろう。口縁部付近に一条の沈線がある。縦方向に平行タタキがほどこされている。焼成は比較的良好、淡赤褐色に発色している。(16) は須恵器の口縁部で、細片ではあるが、突線と波状文の一部が確認できる。無蓋高坏または器台であろう。(17) は須恵器甕の頸部つけ根から肩部にかけての破片である。一条の沈線と縦方向の平行タタキがほどこされている。(18) は須恵器片で、平行タタキがみられる。焼成は比較的良好で、淡赤褐色に発色している。(19~28) は白玉で、10点ある。うち1点(27) は管玉片の可能性がある。(29・30) は針状鉄器である。(31~34) は土錘である。(30) の1点のみが偏平球形で、あと3点はすべて竹輪形である。

SK 3

遺構 長径1.8m、短径0.8m程度の長楕円形の土坑である。須恵器片と土師器片が出土した。

遺物 (第11図-1) は須恵器甕の胴部片であろう。平行タタキがほどこされている。焼成はあまく、青灰色を呈する。(2) は弥生土器または土師器の高坏脚部である。円形透孔が1ヶ所残存する。

SK 4

遺構と遺物 長径1.2m、短径1m程度の不整円形の土坑である。土師器および須恵器の細片がごく少数出土した。

SK 5

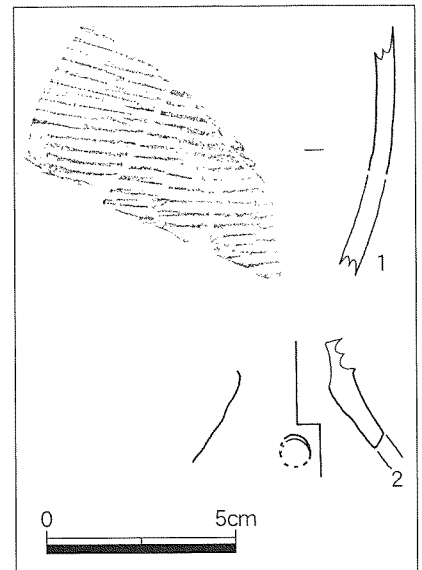
遺構と遺物 SK 2西側ときりあう、長径1.2m、短径0.8m程度の土坑である。土師器細片がごく少数出土した。

SK 6

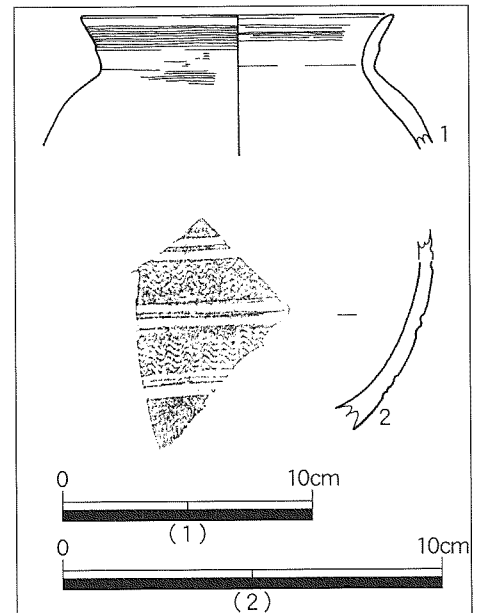
遺構 SK 2内西よりの底面に掘りこまれた土坑である。埋土中から土師器片や須恵器片が出土している。なお、SK 2出土とした須恵器甕(第9図)、土師器高坏(第10図-2)、台付甕(第10図-12)は、層位的にはこのSK 6埋土上面からの出土である。

遺物 (1) は土師器甕の胴部上半から口縁部にかけてである。単純口縁で、口縁部内外面および頸部つけねに、ヨコハケがほどこされている。(2) は須恵器の把手付碗であろう。内面は丁寧な回転ナデで、下端部付近のみハケ状の条線がみられる。外面は、二条一組の沈線が三組ほどこされ、各組間には波状文が充填されている。最下部の沈線より下には波状文がなく、器壁も厚くなるため、下端は本来の底部にちかいかとおもわれる。

焼成はきわめて堅緻で、淡灰色を呈する。把手付碗形須恵器の類例には、本例と類似の文様構成のばあい、本例のような沈線ではなく、突線によって表現するものがおおいにおもわれる。

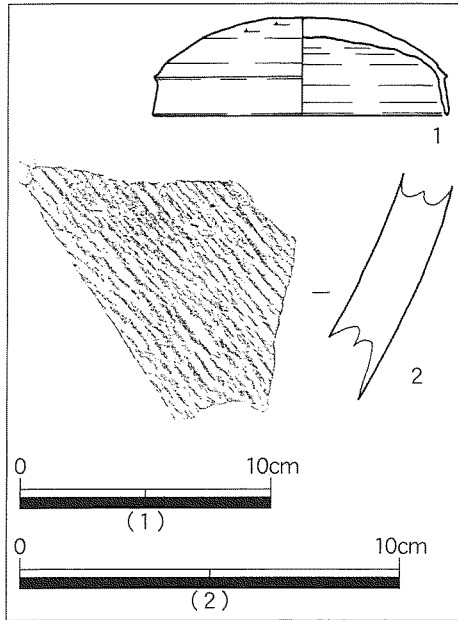


第11図 SK3出土遺物

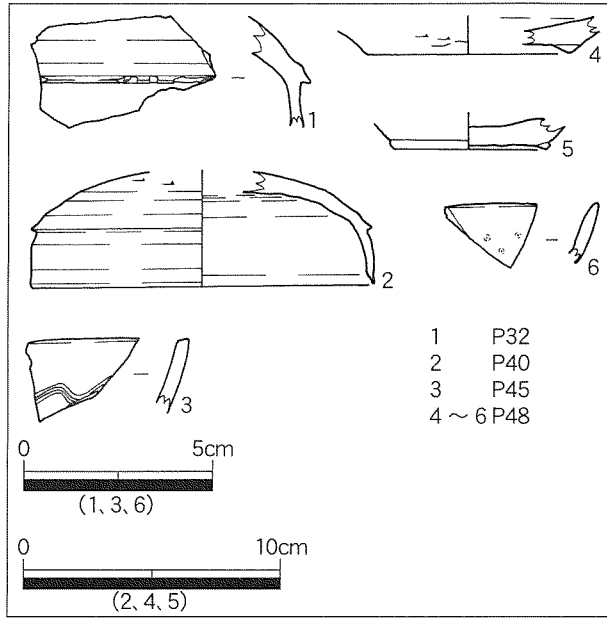


第12図 SK6出土遺物

ピット P 2 5、P 2 8、P 4 6、P 5 3、P 6 1、P 6 7（またはP 6 6）は、心々約2.1m間隔で3つならぶピットが2列になっているように見える。列間の間隔は心々約2.3m程度である。建物の柱穴の可能性はある。P 6 6・P 6 7は、SK 2出土の須恵器カメ（第9図）のほぼ直下から検出した。以上のピットと次項でのべるP 4 8、P 4 9をのぞけば、その他のピットは、いづれも性格は不明で、埋土中ないし底面には古墳時代の土師器、須恵器の細片をふくんでいた。

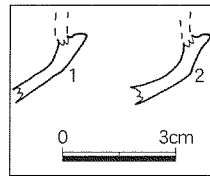


第13図 P4出土遺物



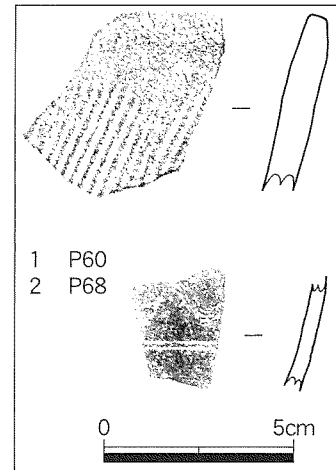
第14図 ピット出土遺物

遺物（第13図）はP 4 出土遺物である。（1）は須恵器坏蓋で、暗灰色に発色する。H11号窯式期であろう。（2）は須恵器片だが、器種は不明である。内面は丁寧にナデており、



第15図 P70出土遺物

外面は平行タタキを重ねている。濃灰色を呈する。（第14図-1）はP 3 2 出土の須恵器坏蓋である。焼成は比較的良好で、暗灰色に発色する。H11号窯式期とおもわれる。（2）はP 4 0 出土の須恵器坏蓋である。焼成はややあまく、淡青灰色を呈する。H61号窯式期～蝮ヶ池期であろう。（3）はP 4 5 出土の須恵器口縁部片である。口縁端面を平坦につくる。小片のわりにカーブがつよく、小型の器種の口縁であろうとおもわれる。外面に波状文をほどこす。焼成は良好で、淡灰色を呈する。



第16図 ピット出土遺物

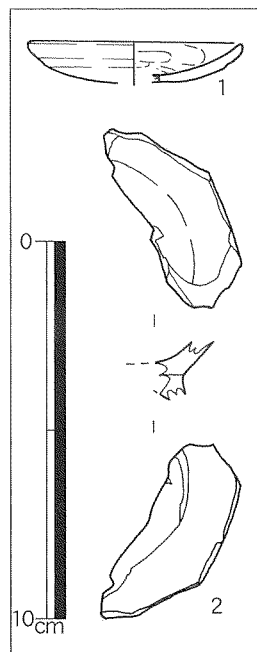
2 古代以降

P 4 8、P 4 9は、規模からすればピットというよりも、むしろ土坑であった。山茶碗（第14図-4、5）や輸入陶磁器（6）を出土した。また、P 4 8、P 4 9をトレンチ状に掘削したときに（第17図）の遺物が出土した。かりに北西トレンチとよぶ。（1、2）ともに山茶碗である。したがって、これらは中世の遺構と考えられる。

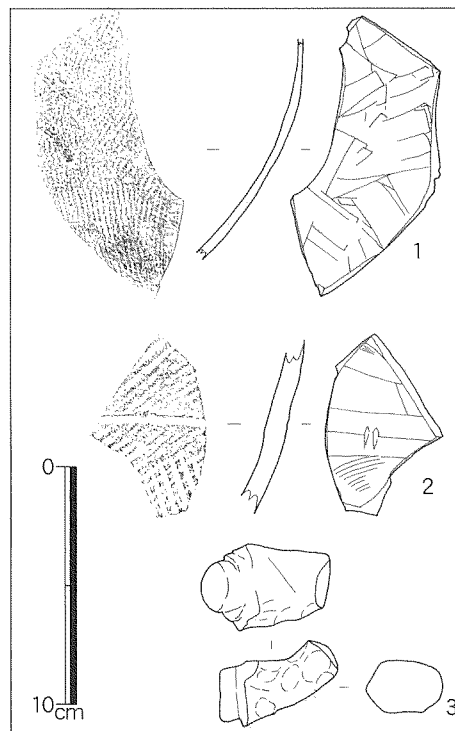
3 その他の遺物

表採ないしは表土掘削中に出土した遺物、あるいは攪乱土に混入していた遺物である（第18図）。（1、2）は表土掘削中に出土した。（1）は、須恵器甕の胴部とおもわれる。内面を比較的丁寧なケズリ、外面を平行タタキとしている。焼成はややあまいが良好である。

（2）は、器種不明だが須恵器片である。内面はケズリおよび部分的にハケである。外面は、破片中央に沈線がみられる。平行タタキをほどこすが、破片下部では異なる方向からの平行タタキがかさなって格子状になっている。焼成は良好である。（3）は、攪乱土より出土



第17図
北西トレンチ出土遺物



第18図 表採および攪乱坑出土遺物

した。韓式軟質土器ないし土師器の角状把手である。手づくねで、いっぽうに挿入用とおもわれる突起がついている。土器本体に穿孔してそこへ把手を挿入して接合するのであろう。

五. まとめ

最後に、重複する内容もあるかもしれないが、報文の内容を簡単にまとめておきたい。

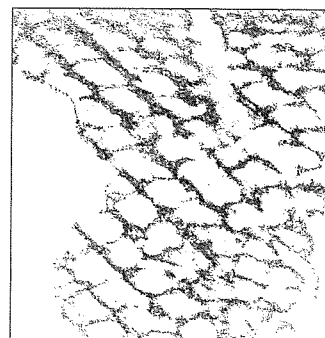
伊勢山中学校遺跡第8次調査地点の景観 このたびは、約100㎡の小規模な面積の調査で、遺構はあまり密ではなかった。これは、同遺跡内で住居など遺構が密に集中して検出されるのが、小規模な谷をはさんで南側であることと関係すると考えられる。すなわち、谷よりも北側については、集落の中心よりはずれた地区となるためであろう。今回の調査区南壁側で、熟田層下層をなす灰黄白色の砂質土が露出していることから、台地上自然地形の起伏により、本来は南側がやや高かったと想定することができる。このことは、今回の調査区内でも、南側での遺構密度がとくに疎であったことから傍証できよう。したがって、第8次調査地点は、集落域内で、比較的縁辺にちかい台地上、小規模な谷地形に面し、平地ではあるがやや起伏のある立地であったと考えられる。そして、南側に集落の中心をのぞむのだろう。台地下は海であるため、この小規模な谷にも一部海水がはいりこんでいたかもしれない。

遺構の性格と時期 遺構のうち、SK1は調査区外にかかっており、全形を検出することができなかったが、小規模ながら方形であることをうかがえること、東肩付近で焦土粒をおおくふくむ土が埋土下層にみとめられることなどから、住居ないしなんらかの製作址であった可能性がある。上層からの堆積である埋土上面の遺物をのぞけば、土器は土師器および韓式軟質土器に限定でき、土師器の型式、年代観から、5世紀前半と考えられる。SK2は、きわめて不整形であり、規模からいっても住居とは考えがたく、性格不明である。土坑内より多数の土師器や須恵器のほか白玉数点を出土しており、住居ないし集落内のいづこかにともなう祭祀、または廃棄にかかわる遺構の可能性はある。ここで出土した須恵

器は東山H111号窯式期ないしそれ以前と考えられ、共伴の土師器が名古屋台地3期～4期（松河戸I式後半～II式併行期）であることから、遺構の時期は5世紀前半と考えられる。土師器からはSK1とSK2は時期をほとんど区別できないが、かりにSK1が須恵器をとまなわなことを重視するならば、両者には微妙な時期差がある可能性もある。これらと同様の規模、内容をもつ土坑は、第5次調査でもSK106、SK108、SK109などが検出されており、今次調査のものも同じ性格であると推定できる。

ピットには、埋土から須恵器を出土するものがあり、その編年観から、古墳時代におけるこの地区では、すくなくとも6世紀半ばごろにいたるまで人々の生活の営みがあったことをうかがいしることができる。また、土坑およびそこから出土した遺物の確認から、中世においてふたたび人が生活したようである。輸入陶磁片の存在からすれば、伊勢山中学校遺跡の過去の調査時に検出した城館跡と関係するものであろう。

出土遺物の問題 ここでは、遺物個々の問題についてのみのべておこう。SK1出土の韓式軟質土器にみえる斜格子タタキがやや特殊な印象であることを報文でのべたが、このタタキメの原体はいったいどのようなものだろうか。一般に格子目タタキの原体はタタキ板に格子状の目を刻んだものと理解している。しかし、本例（第6図-1・第19図）は、縄目状のものをもちいるのではないかと疑わせる部分があるなど、判断を躊躇せざるをえない。また、胎土も一般的でなく、当地域のものではなさそうである。この韓式土器は、系譜や流入の契機など重要な問題をはらんでいそうである。また、SK2出土の須恵器には、古い様相をもつものがおおく、当地域で流布している窯式による東山産須恵器編年ではとらえきれない。型式的特徴は陶邑産のものとは様相を異にし、胎土は肉眼観察の範囲では東山・猿投産のものであるから、当地域での製品である可能性が高い。こうした須恵器は今次調査のみでなく、当遺跡およびその周辺遺跡ですでに一定数が知られているが、その生産址は検出されていない。SK1で出土した鉄器片は、小片で器種器形は不明であるが、第5次調査時に鉄鋌の出土が知られている当遺跡にあつては、鉄器生産の問題ともかかわり注意する必要がある。



第19図 韓式軟質土器の斜格子タタキ

以上、おもな遺構と遺物について報告し、また雑駁ではあるが今次調査の成果から生じた問題点や関心をのべてみた。その結果、韓式軟質土器や初期須恵器など、いくつかの重要な文物の存在が注意されたほか、立地や時期など、当遺跡の意義をうかがうに示唆的な情報をえることができた。しかし、いっぽうで、遺構の性格や出土遺物の来歴に不明な点がおおいために、積極的に論じうる内容がすくなく、隔靴搔痒の感も否定できない。その苛だちからやや結論を急ぎすぎたかもしれないが、これ以上推測の域をでない議論をくりかえすよりも、今後の調査の進展をまって、あらためて検討することとしたい。

（註1） 実際には、方形周溝墓のみではなく、少数の円形周溝墓をふくんでいる。

（註2） 土師器の時期区分は、村木誠による名古屋台地編年案（村木1996、木村編1997）をもちいた。とくに断らない場合は、以下でもすべてこれに準じる。

参考文献

- 赤塚次郎1994「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』、愛知県埋蔵文化財センター
- 今津啓子1987「大阪湾沿岸地域出土の朝鮮系軟質土器」『東アジアの考古と歴史 岡崎敬先生退官記念論集』、同記念事業会
- 今津啓子1994「渡来人の土器－朝鮮系軟質土器を中心として－」『古代王権と交流 5 ヤマト王権と交流の諸相』、名著出版
- 東海土器研究会2000『須恵器生産の出現から消滅 猿投窯・湖西窯編年の再構築』
- 木村有作編1997『特別展 発掘された名古屋の五世紀』、名古屋市見晴台考古資料館
- 齊藤孝正1989「古墳時代の猿投窯」『断夫山古墳とその時代』、東海埋蔵文化財研究会
- 田中清美1989「五世紀における摂津・河内の開発と渡来人」『ヒストリア』145、大阪歴史学会
- 名古屋市教育委員会1984 『伊勢山中学校遺跡発掘調査概要報告書』
- 名古屋市教育委員会1985 『伊勢山中学校遺跡Ⅱ』
- 名古屋市教育委員会1987 『伊勢山中学校遺跡第3次発掘調査概要報告書』
- 名古屋市教育委員会1989 『伊勢山中学校遺跡－第4次調査概報－』
- 名古屋市教育委員会1996 『埋蔵文化財調査報告書24 伊勢山中学校遺跡（第5次）』
- 名古屋市教育委員会1997 『伊勢山中学校遺跡－第6次発掘調査の概要－』
- 名古屋市教育委員会1998 『伊勢山中学校遺跡－第7次発掘調査の概要－』
- 村木誠1996「名古屋市域の土師器について」『埋蔵文化財調査報告書24 伊勢山中学校遺跡（第5次）』、名古屋市教育委員会

伊勢山中学校遺跡では、第5次調査時（名古屋市教委1996）に鉄鋌が出土している。この鉄鋌は、東海地方では唯一の例であると目されてきた。初期須恵器や韓式土器の存在とあいまって、尾張地域における当遺跡の特殊性をしめす遺物である。ところが、最近になって、正木町遺跡第4次調査（名古屋市教委1991）を担当された当資料館学芸員 水野裕之氏から、当時出土した不明鉄製品を収蔵庫に保管しているとの御教示をえて、筆者が実見し、鉄鋌であろうと確認した。正木町遺跡は、遺跡名は異なるが、伊勢山中学校遺跡に接し、本来、古墳時代においては一体の集落をなすと考えられる遺跡である。おなじ脈絡で考える必要がある両遺跡において、鉄鋌が存在することは、きわめて重要であると考えるので、この機会をかりて紹介しておきたい。



図1 正木町遺跡第4次調査地点

鉄鋌について 鉄鋌は、正木町遺跡第4次調査時に、土坑内より出土した。不明の鉄製品1点および名古屋台地4期の土師器とともに出土しており、時期がほぼ限定できる。保存処置はほどこされていない。錆の状態は比較的安定しており、いますぐに崩壊する状況ではない。しかしながら、出土からすでに9年が経過しており、早急に保存処理の必要がある。

形状は、両端が左右対象でないバチ形にひらき、中央へむかってかなり幅狭にくびれる。両端のバチ形がいびつなため、全体の形態がやや不整形な印象をうける。現存長19.6cm、最大幅推定約5.5cm、最小幅1.6cmである。重さは、現状（保存処理前）で98.5gある。厚さは両端付近が約1mm、中央部付近が約5mmと、中央が厚い。中央部の断面形は長辺がややふくらむ長方形である。東潮分類（東1987、1991）でいう小型鉄鋌の範疇にある。

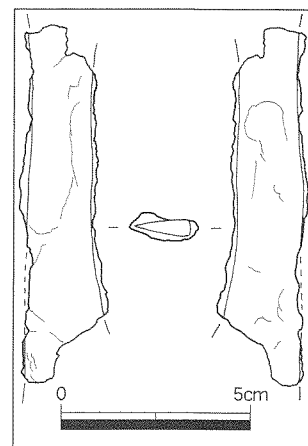


図2 不明鉄製品

まとめにかえて 日本列島における鉄鋌の出土は、最多の872枚を出土した奈良県大和6号墳を筆頭に、西国ではかなりの事例がしられる。東国では出土例がかぎられており、本例は、東国としては4例目の鉄鋌となる（図4）。鉄鋌が住居ないし集落内から出土するのは、日本列島独自の現象とされ、またそこでの鉄器生産と関連するとおもわれる事例がすくなくない。朝鮮半島出土例に葬具または祭祀的な性格が推定される事例がおおいことは対称的である。

名古屋台地では、鉄鋌の出土例は本例をふくめ2例であるが、集落出土鉄器という目で見れば、すでにのべたように、袋状鉄斧をはじめ事例がすこしづつ増えている。2例の鉄鋌の系譜が問題となると同時に、当地域での鉄器生産を考えるうえでも重要である。高温の炎をあやつる技術という意味では、鉄（器）生産と須恵器焼成技術（窖窯）との関連性が指摘されている。名古屋台地では、日本列島の須恵器生産としてはかなり早い段階に開窯した東山古窯址群を擁して、以来、脈々と須恵器生産を継続する。実際、鉄鋌を出土した伊勢山中学校遺跡や正木町遺跡では、5世紀前半にさかのぼると考えられる初期須恵器が多数出土する。また、物資の流通という側面についても、東山産須恵器の流通網は有用であったであろう。これらのことを考慮するならば、名古屋台地である程度の規模の鉄（器）生産がおこなわれていたとしても、あながち無稽のこ

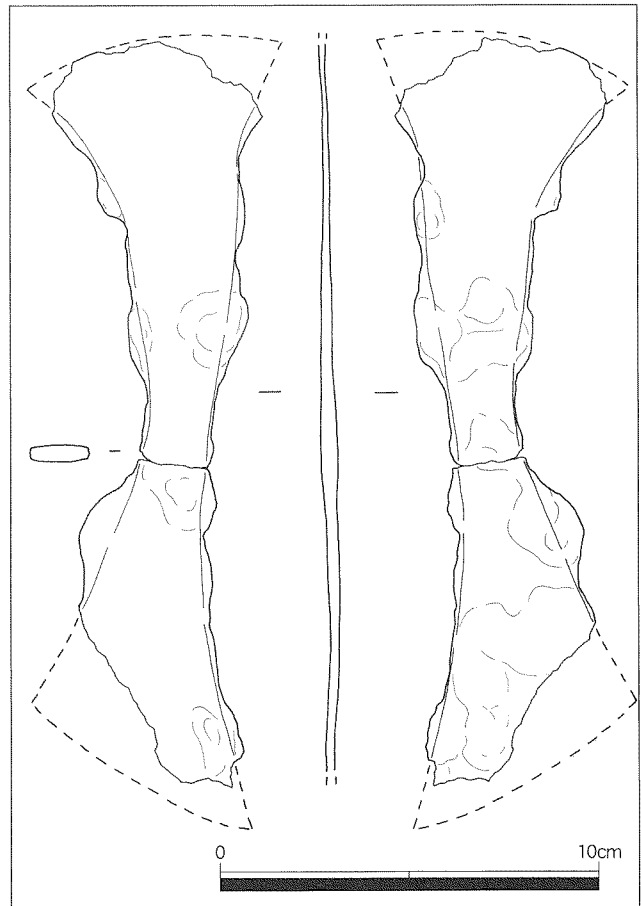


図3 正木町遺跡第4次調査出土鉄鋌



図4 鉄鋌出土遺跡の分布

とではあるまい。とはいえ、検討には慎重を要し、結論をみちびくにはいまだ時期尚早であることはいうまでもないが、尾張の古墳時代を考えるための一助としたい。

補記 名古屋大学大学院 李浩基氏からは、鉄鋌についてさまざまな御教示をいただいた。記して感謝いたします。なお、このたびは小文にそれらの知識を活かしきれていないが、その責はひとえに筆者にある。御寛恕いただきたい。

参考文献

東潮1987「鉄鋌の基礎的研究」『橿原考古学研究所紀要 考古学論攷』12、奈良県立橿原考古学研究所

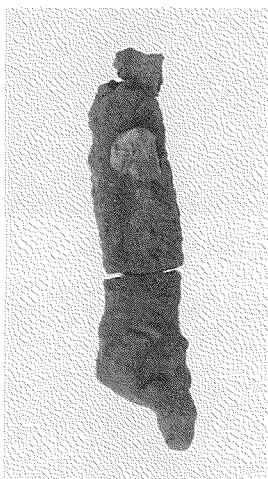
東潮1991「鉄素材論」『古墳時代の研究 5 生産と流通Ⅱ』、雄山閣

木村有作編1997『特別展 発掘された名古屋の五世紀』、名古屋市見晴台考古資料館

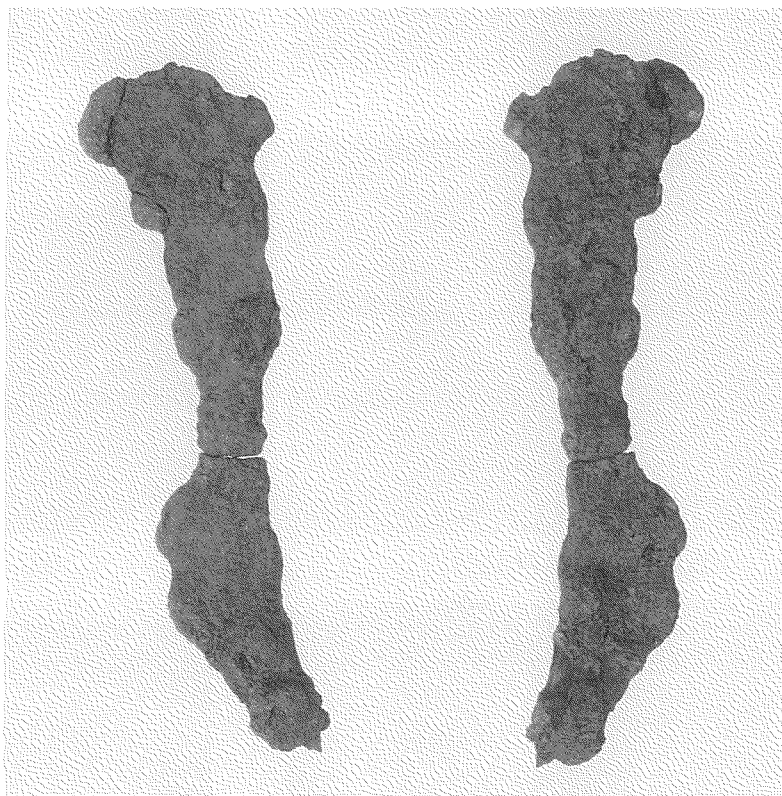
名古屋市教育委員会1991『正木町遺跡第4次発掘調査概要報告書』

名古屋市教育委員会1996『埋蔵文化財調査報告書24 伊勢山中学校遺跡（第5次）』

付篇写真図版



写1 不明鉄製品



写2 鉄鋌(表・裏)



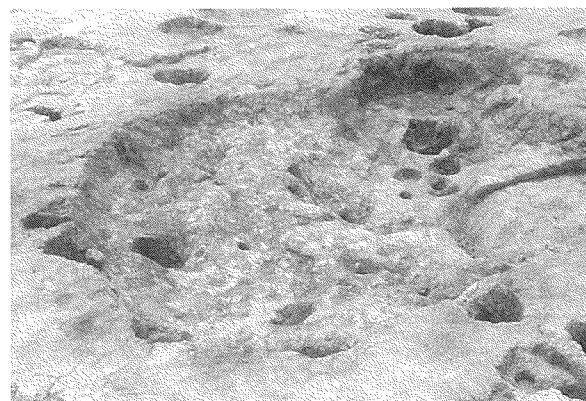
(1) 調査区全景 (南東より)



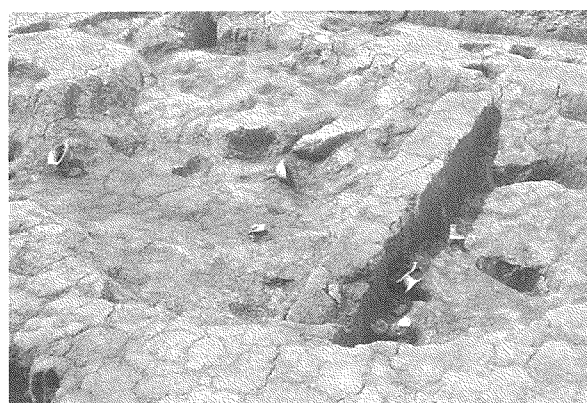
(2) 調査区全景 (北西より)



(3) SK1



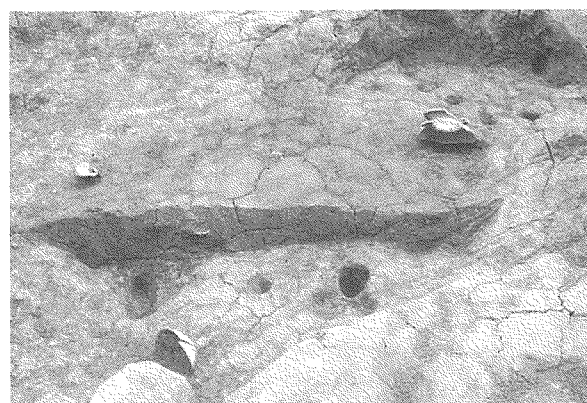
(4) SK2 (北より)



(5) SK2遺物出土状況1



(6) SK2遺物出土状況2



(7) SK6



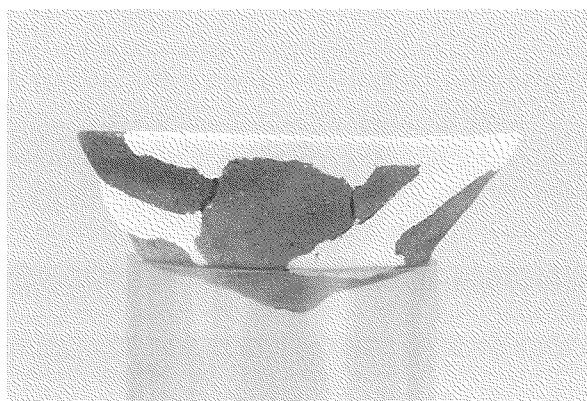
(8) 北西トレンチ



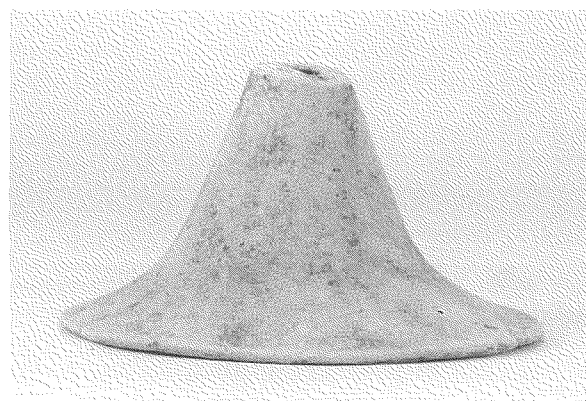
(1) SK1 出土遺物



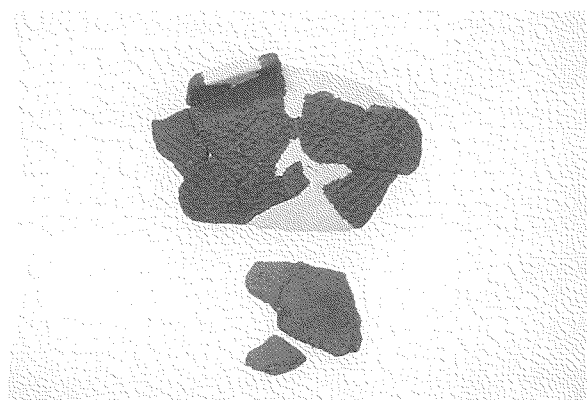
(2) SK2 出土遺物



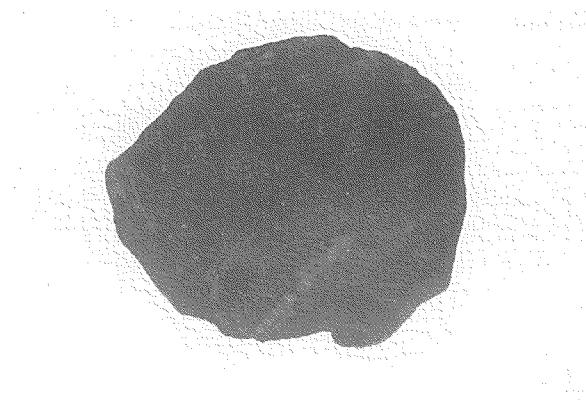
(1) 土師器高杯 (SK1)



(2) 土師器高杯 (SK1)



(3) 韓式土器 (SK1)



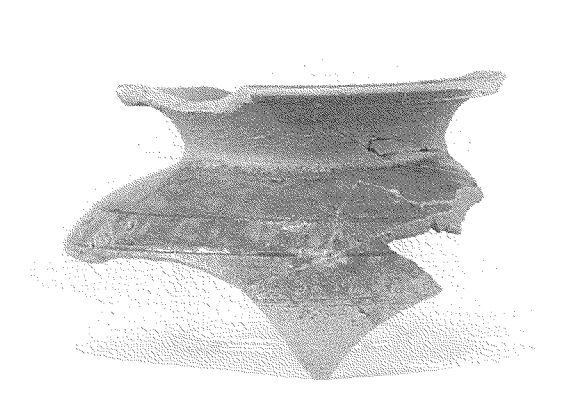
(4) 韓式土器 (SK2)



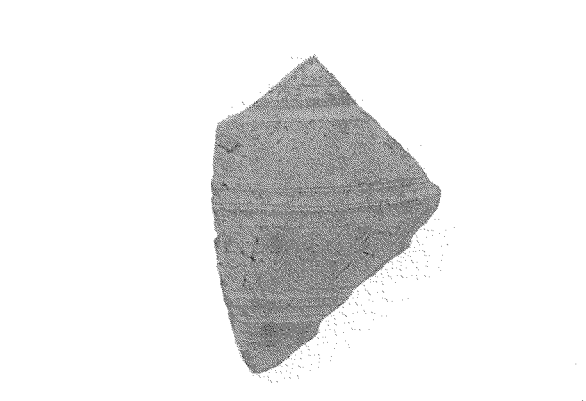
(5) 須恵器高杯 (SK2)



(6) 須恵器高杯 (SK2)



(7) 須恵器甕 (SK2)



(8) 須恵器把手付碗 (SK2)

尾張元興寺跡

第9次発掘調査



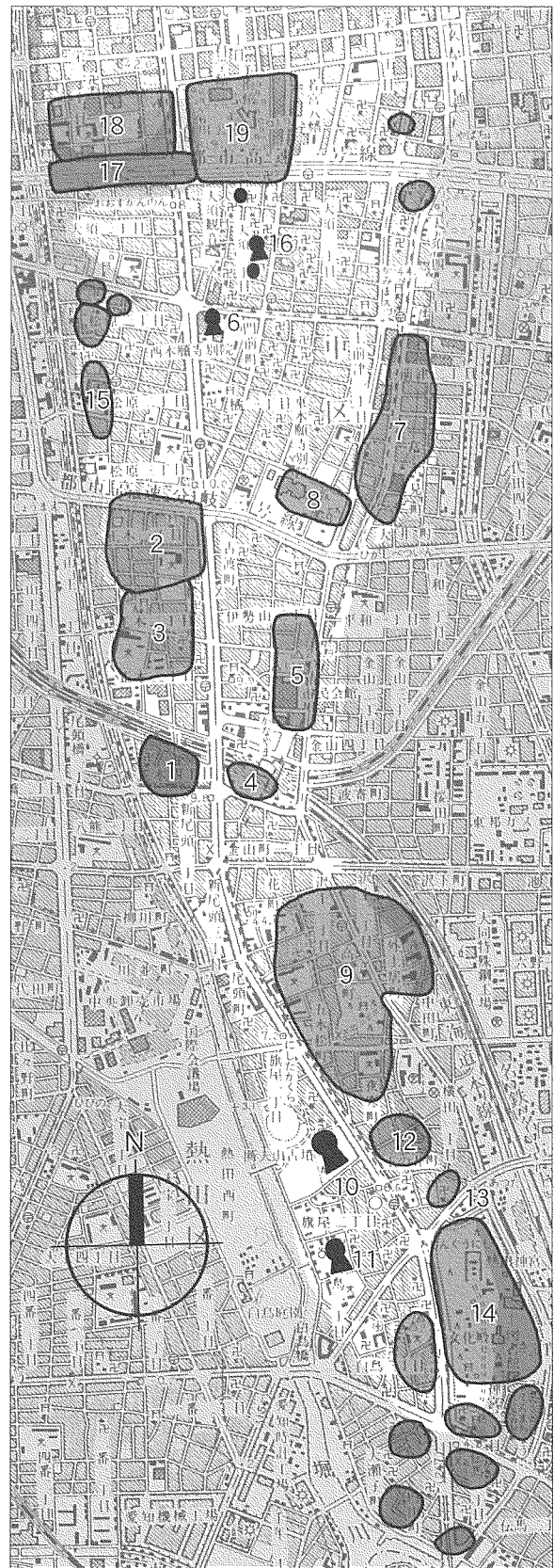
例言

1. 本章は、尾張元興寺跡第9次発掘調査の報告である。
2. 調査地点は名古屋市中区正木四丁目1014-1である。
3. 調査は個人住宅の建設工事に伴うもので約40㎡を対象とした。
4. 調査期間は、平成12年8月16日から平成12年9月8日まで行なった。
5. 調査は名古屋市教育委員会が実施し、調査に関する調整事務は文化財保護室が、発掘調査は名古屋市見晴台考古資料館学芸員額額茂・服部哲也が担当した。
6. 排土工事は(有)庭匠に請負契約、基準点・水準点測量業務は(株)ジーアイエス中部に委託契約して実施した。
7. 発掘調査および資料整理参加者。小浦美生、近藤和子、川原則子、池戸裕子、佐々木佳子、山本雅代、中京大学考古学研究会。
8. 本章の基準高は東京湾平均海水面(T.P)を、座標系は国土交通省告示の第Ⅶ座標系を使用した。
9. 出土遺物および記録類は、名古屋市見晴台考古資料館が保管している。
10. 本章の執筆は服部・額額が、編集は服部が行った。

目次

| | |
|--------------|----|
| 一. 位置と環境 | 53 |
| 二. 尾張元興寺跡の概要 | 53 |
| 三. 調査の経過 | 54 |
| 四. 調査の内容 | 54 |
| 五. おわりに | 58 |

| | |
|------------|-----------|
| 1 尾張元興寺跡 | 11 白鳥古墳 |
| 2 正木町遺跡 | 12 玉ノ井遺跡 |
| 3 伊勢山中学校遺跡 | 13 森後町遺跡 |
| 4 東古渡町遺跡 | 14 熱田神宮遺跡 |
| 5 古沢町遺跡 | 15 松原遺跡 |
| 6 大須二子山古墳 | 16 那古野山古墳 |
| 7 富士見町遺跡 | 17 旧紫川遺跡 |
| 8 古渡城跡 | 18 堅三蔵遺跡 |
| 9 高蔵遺跡 | 19 白川公園遺跡 |
| 10 断夫山古墳 | |



第1図 位置と周辺のおもな遺跡(1:25000)

一. 位置と環境

尾張元興寺跡は名古屋市ほぼ中央、中区正木四丁目を中心に広がって所在する。遺跡の中心は金山総合駅から西へ約300mの距離であり、交通至便の好地として住宅・オフィスが建ち並んでいる。

地形的には、標高7～10mの半島状に突出する熱田台地西端縁に立地し、西に低地を広く臨む。古代においては、遺跡地西側は海であったと推定され、海上交通上の要所であったと考えられる。

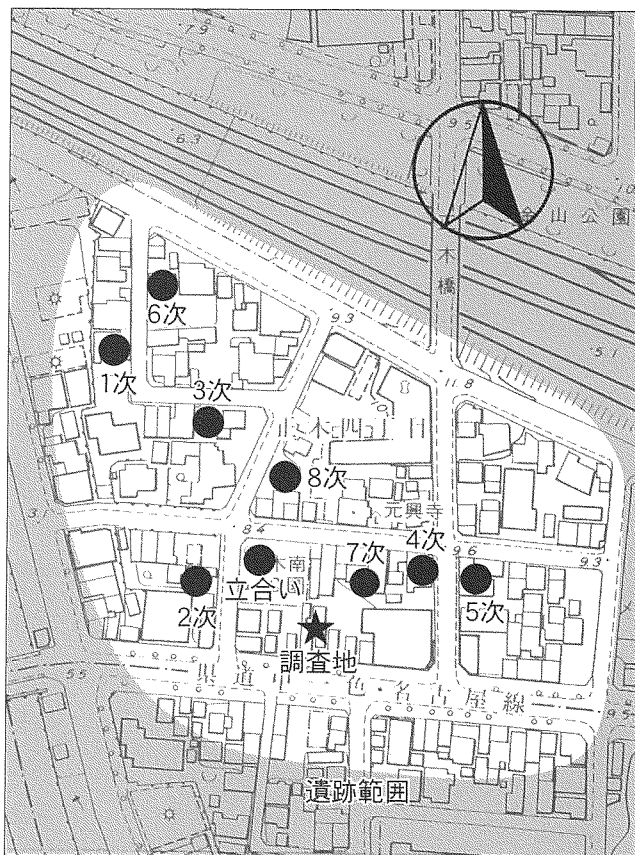
周辺には北に正木町・伊勢山中学校遺跡、東に古沢町・東古渡町遺跡、さらに南には高蔵遺跡・断夫山古墳・熱田社など重要な遺跡が目白押しで、これら周辺の遺跡を含めての検討が重要である。

二. 尾張元興寺跡の概要

遺跡は東西約250m、南北約200mを推定しているが、過去の発掘調査により、弥生時代から近世まで続く複合遺跡であることがわかっている。中心は古代の寺院跡であり、ほぼ遺跡地全域で古代瓦が散布する。ただし、直接寺院を復原する遺構の発見はこれまでの調査ではなく、伽藍配置や寺域は全く不明であった。

ところが、1999年に実施した7次調査では、水煙という塔にしか用いられない特殊な遺物が、塔から転落し突き刺さった状況で出土したため、7次調査地の近く（北側と推定される）に塔を推定復原することが可能となった。今回の調査地点はその7次調査地点の南西にあたり、7次調査地北側に塔を推定すれば、南門付近の可能性も考えられる場所となる。

また、『日本紀略』の元慶八年（884年）の条「尾張国愛智郡定額願興寺を国分金光明寺となす」に見られる「愛智郡定額願興寺」を本寺院跡にあてられようが、この他に関連する古代・中世の文献史料は知られない。僅かに、江戸時代の文書と伝承から、この「願興寺」は荒廃と中興の後の16世紀頃、現在の中川区牛立町に移転したこと。その後は薬師堂のみ残ったが、江戸時代中頃以降に現在の泰雲寺と元興寺が建立されたことがわかっている。



第2図 調査地点(1:3000)



写真1 調査前風景



写真2 前半区完掘状況(南から)



写真3 後半区完掘状況(北から)

三. 調査の経過

調査に至る経過 9次の調査地点は遺跡範囲のほぼ中央南に位置する。平成12年4月、市教育委員会文化財保護室に当該地での住宅の建設工事予定と、その際の埋蔵文化財の取扱いについての照会があった。文化財保護室では隣接して実施した過去の発掘調査の成果から、埋蔵文化財が遺存すると判断して発掘調査の必要を原因者に伝えた。その後、原因者との協議調整の結果、平成12年8月より約40㎡を対象に発掘調査を実施することとなった。

調査は排土置き場を確保する都合上、前半後半の折り返しとした。

日誌抄

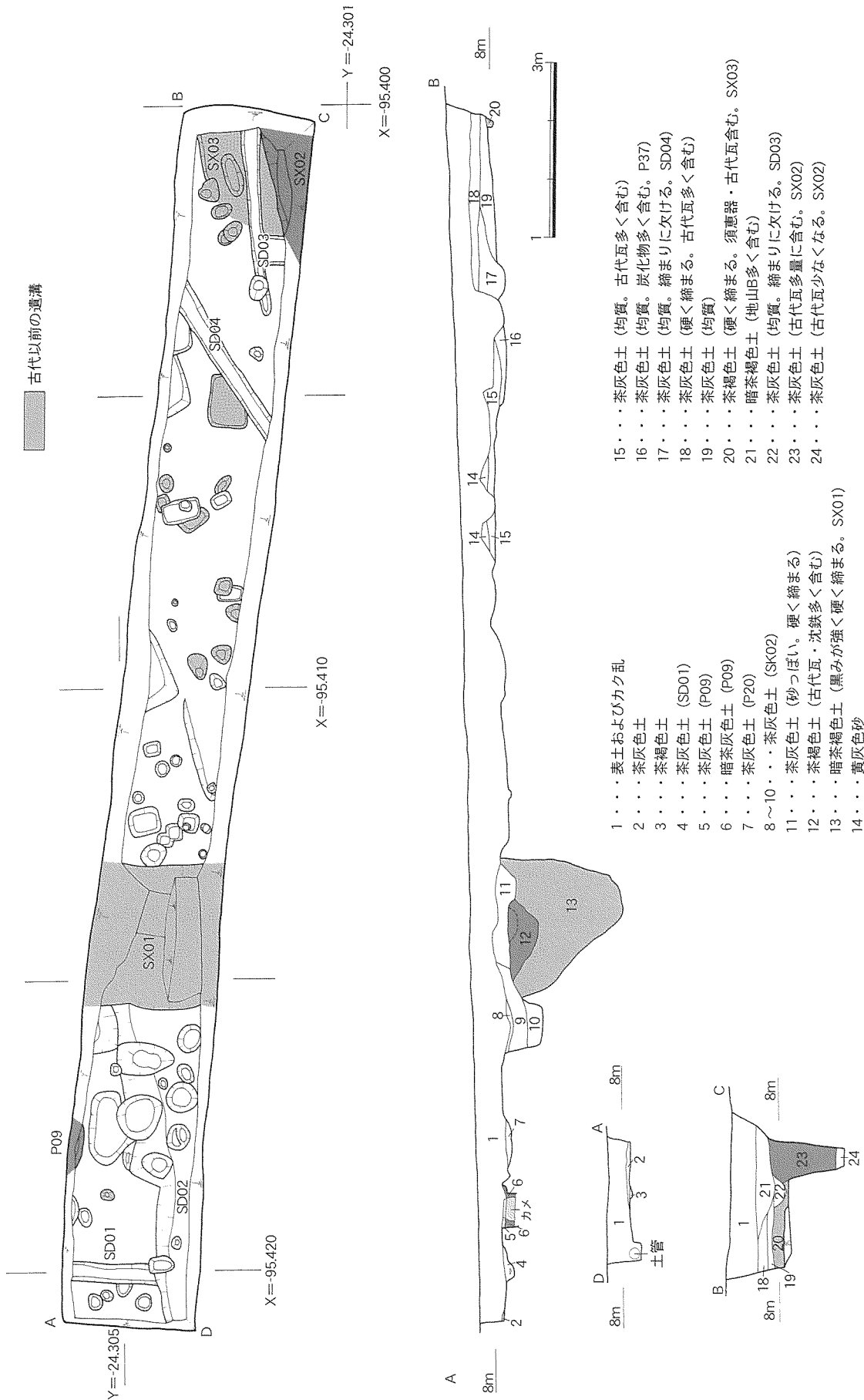
- 8月17日 発掘準備および器材の搬入。
- 8月21日 前半区表土除去開始。包含層掘削。
- 8月22日 遺構検出・掘削。基準点・水準点測量。
- 8月23日 写真・基本平面図・断面図作成開始。
- 8月24日 前半区完掘。
- 8月25日 前半区埋め戻し。
- 8月28日 後半区表土除去開始。包含層掘削。
- 8月29日 遺構検出・掘削開始。
- 8月30日 写真・基本平面図・断面図作成開始。
- 9月1日 SX02(瓦溜まり)掘削。
- 9月6日 埋め戻し開始。
- 9月8日 後片付け。現地での調査終了。

四. 調査の内容

1. 古代以前

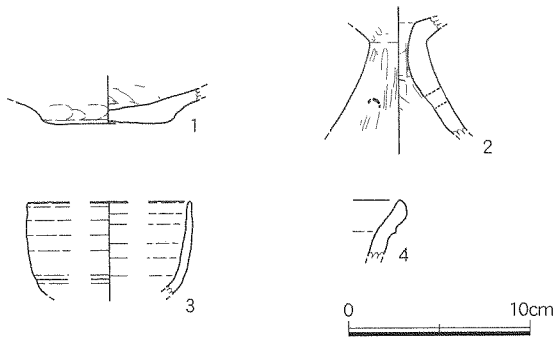
SX01 調査区中央南寄りにて検出。遺構の東西部分はいずれも調査区外となるため、本来の形状は不明であり、検出時はSXとした。調査の結果、幅約2.5m・深さ約2mを測る、東西方向に走る溝状遺構と推定した。上層(12層)には古代瓦を多く含む茶褐色土が堆積したが、土坑状の別な遺構の可能性もある。下層(13層)は瓦を含まない暗茶褐色土で、黒みが強く硬く締まっていることに特徴があった。

第3図 調査区平・断面図(1:100)



- 1・・・表土およびカク乱
- 2・・・茶灰色土
- 3・・・茶褐色土
- 4・・・茶灰色土 (SD01)
- 5・・・茶灰色土 (P09)
- 6・・・暗茶灰色土 (P09)
- 7・・・茶灰色土 (P20)
- 8～10・・・茶灰色土 (SK02)
- 11・・・茶灰色土 (砂っぽい。硬く締まる)
- 12・・・茶褐色土 (古代瓦・沈鉄多く含む)
- 13・・・暗茶褐色土 (黒みが強く硬く締まる。SX01)
- 14・・・黄灰色砂
- 15・・・茶灰色土 (均質。古代瓦多く含む)
- 16・・・茶灰色土 (均質。炭化物多く含む。P37)
- 17・・・茶灰色土 (均質。締まりに欠ける。SD04)
- 18・・・茶灰色土 (硬く締まる。古代瓦多く含む)
- 19・・・茶灰色土 (均質)
- 20・・・茶褐色土 (硬く締まる。須恵器・古代瓦含む。SX03)
- 21・・・暗茶褐色土 (地山B多く含む)
- 22・・・茶灰色土 (均質。締まりに欠ける。SD03)
- 23・・・茶褐色土 (古代瓦多量に含む。SX02)
- 24・・・茶灰色土 (古代瓦少なくなる。SX02)

下層出土遺物は、須恵器（第4図3・4）・土師器・弥生土器（1・2）の細片のみであり、遺構の大半が埋まった時期の特定は難しいが、瓦を全く含まないことから、寺院建立前に一気に埋められた可能性が高い。

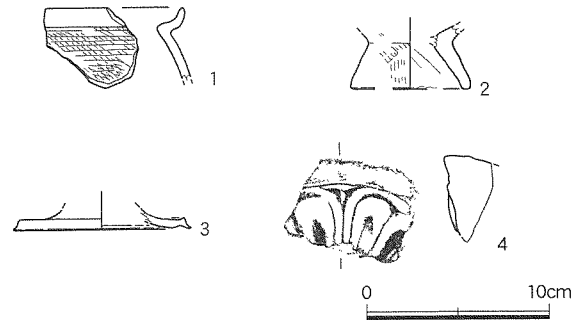


第4図 SX01出土遺物(1:4)

SX03 調査区北端にて検出。10~20cm程の浅い落ち込みであるが、北は調査区外・南と東側も近世以降の遺構やカク乱によって壊されているため、形状は不明である。埋土中からは、須恵器・土師器・弥生土器・古代瓦が出土した。遺構の性格は不明である。



写真4 SX01掘削状況(南東から)



第5図 SX03出土遺物(1:4)

2. 近世以降

SX02 調査区北東端にて検出した瓦の廃棄土坑（瓦溜り）。ほとんどが調査区外となるため、形状・規模は不明である。多量の瓦片に混じって、僅かながら中世・近世の陶磁器類（第6図2~4）が出土したことから、最終的な埋没は近世と考えられた。出土の古代瓦はコンテナケース約60箱となったが、すべて細かな破片であり、数度にわたる移動が推定できた。

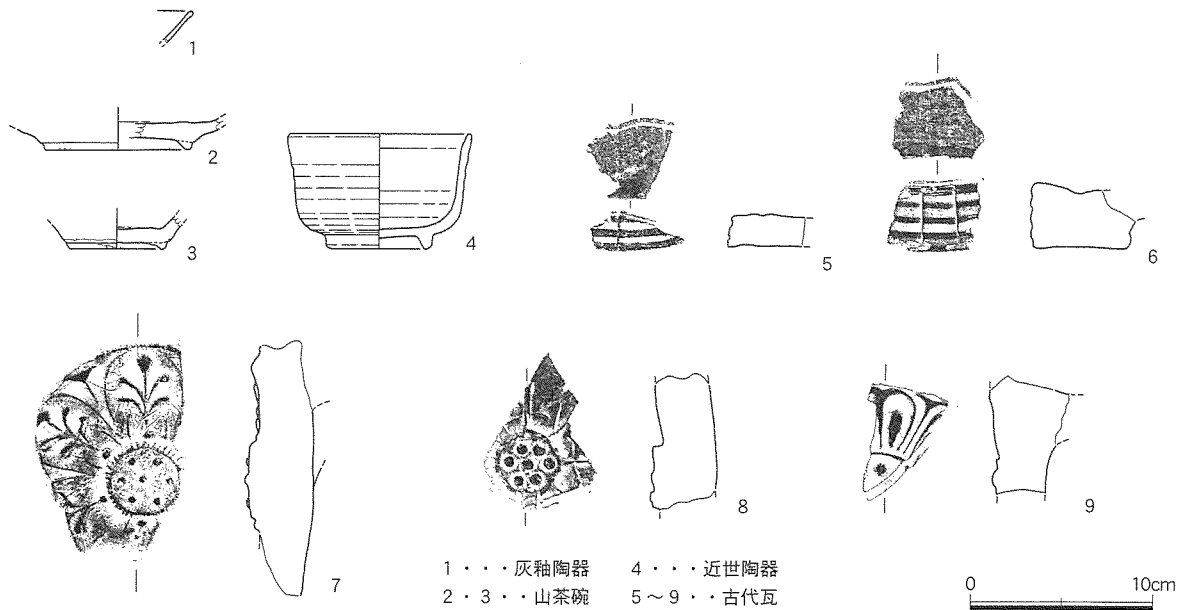
第6図7は、弁内にパルメット文を配す6弁の蓮華紋軒丸瓦で、大阪野中寺と同範。8は、無子葉の8弁蓮華紋軒丸瓦。9は複弁の蓮華紋軒丸瓦。5・6は簾状に押し引く五重の重弧紋軒平瓦。



写真5 SX02掘削状況(西から)



写真6 SX02出土古代瓦



第6図 SX02出土遺物(1:4)

P09 P09は南半区の検出作業中に調査区東壁際で確認した大甕を埋設した遺構である。遺構の大部分が調査区壁内に入りており平面での形状等の確認は困難であった。南半区の遺構調査終了後、埋め戻し間際に地山を立ち割り調査し、調査区東壁で堆積状況などを確認した。壁面での確認した状況では、遺構の掘り方の直径は60cm前後、深さもほぼ60cmを測る。掘り方は地山である熟田層の堅くしまった砂質土を掘り込み、



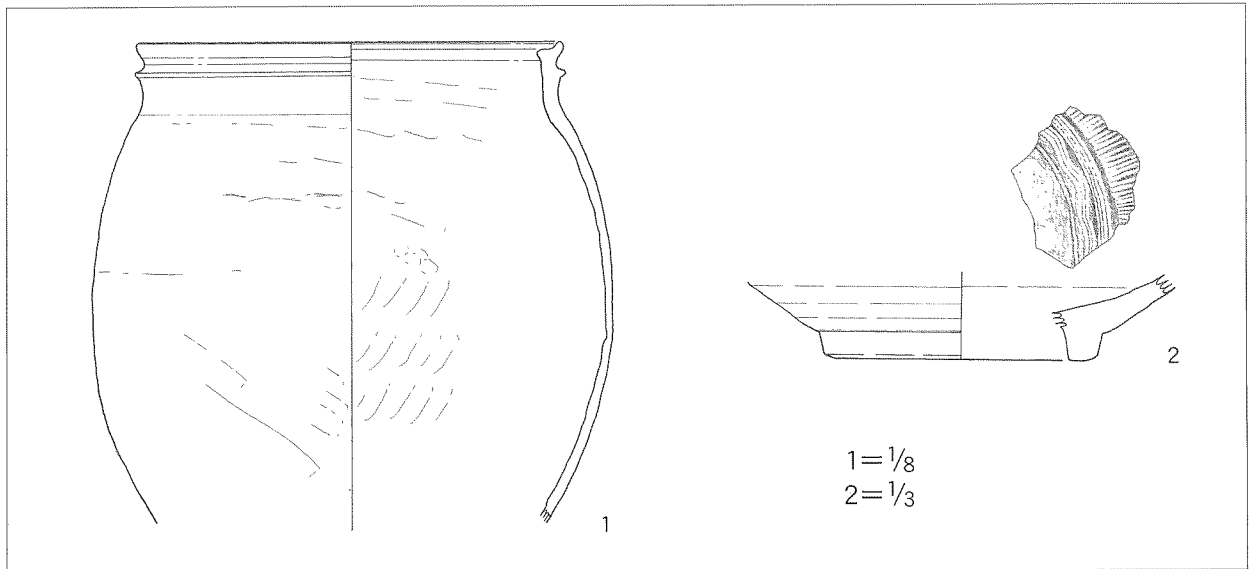
写真7 P09埋設大甕出土状況

埋設大甕の最大径の部分がちょうど収まるように掘られている。大甕と掘り方の間の埋土内には遺物をほとんど含まない。掘り方埋土のうち埋設大甕の口縁部付近より上の部分はやや黄味の強い褐色土が認められ、その上面には地山土が薄く層状に認められる。この面がこの遺構が機能していた段階での地表面（民家のたたきか？）と考えている。埋設大甕の内側の埋土は砂質土が中心であるが、隙間が多くしまりがない。その中からは多量の陶磁器が確認されているが、そのほとんどが広東碗や端反碗などの磁器と、大型の器種を中心とした陶器であり、幕末に近い段階の状況を反映しているといえよう。

この遺構の性格を考えてみると、遺物の出土状況から墓坑とは考えにくく、また底部を打ち欠いていること、大甕周辺に人糞の影響による浸み込みが認められないことから便槽とも考えにくい。P09の遺存状況を確認すると、一定期間埋設土器内が空間として利用されいたことがうかがえる。遺構の機能停止に伴って、陶磁器などが廃棄され、その後比較的短時間の間に盛り土されたと判断した。大甕自体と、大甕内の遺物との時間的な乖離もこのような状況から説明されよう。その性格を断定することはできないが、近世の町屋に伴う何らかの地下貯蔵施設と考えておきたい。

遺物は2点を図示した。第7図の1はP09の埋設土器である。口縁部に二段の貼り付けを有する、近世

常滑産大甕でも最も古い部分に位置づけられるもので、器内面には積み上げの際の指押さえの痕跡が明瞭に残る。焼成は非常に良いが、欠損していることもあり口縁部並びに底部付近の窯詰痕は観察できない。赤羽一郎氏にも実見をお願いし確認していただいたが、17世紀初頭の年代が与えられている。遺構内の陶磁器に比較して古い時代を与えうる。第7図2は大甕の口縁部付近の掘り方から出土した肥前産の三島手の鉢である。砂目が観察され、高台下畳付脇の面取りも弱くやや古い様相を示すといえよう。



第7図 P09出土遺物

五. おわりに

今回の調査では古代～近・現代までの遺構を検出したが、多くは近世以降のピットや土坑であった。古代の寺院跡に直接関わる遺構は、調査区が狭かったこともあり明らかにできなかったが、古代以前の遺構では、幅約2.5m・深さ約2mを測る東西方向の溝状遺構（SX01）に最も注目された。

SX01の特徴は、瓦を含まない暗茶褐色土が厚く堆積することで、寺院建立前に一気に埋め立てられた結果と考えたが、過去の調査においても同様な溝が見つかっている。2次調査出土のSD01がそれであり、幅約3m深さ2.1～2.4mを測り、基本的に黒褐色土一層が堆積する南北方向の溝であった。2次調査地点は、9次調査地点の北西約50mであり、規模・断面形状・埋土（土色の認定は違ったが、今回の観察結果である暗茶褐色土も非常に黒みの強いものであり、遺物の包含状況を含めて、似ていると判断する）の共通性から、両遺構は同一でつながる可能性は十分に考えられよう。とすれば、寺院建立に先行して、溝に囲まれた居館跡等が存在した可能性もあり、周辺の伊勢山中学校遺跡・正木町遺跡の動向をもあわせての検討が重要であろう。

豎三藏通遺跡 (第15次)



例言

- 1 本書は、名古屋市中区栄一丁目に所在する豎三蔵通遺跡第15次発掘調査の報告書である。
- 2 調査地点は、名古屋市中区栄一丁目2519番の個人住宅建設予定地内である。
- 3 発掘調査は、約60㎡を対象に平成12年9月18日から同年9月29日まで行った。
- 4 発掘調査にあたっては、名古屋市教育委員会文化財保護室と土地所有者の間で調整し、名古屋市見晴台考古資料館が担当した。
- 5 本調査は、表土層部分のみであり、新築住宅の下位には近世包含層等が残存している。
- 6 資料の整理に際し、野場喜子氏、池戸裕子氏のご教示を得た。
- 7 調査の記録、出土遺物は名古屋市見晴台考古資料館で保管している。
- 8 本書の編集、執筆は伊藤厚史が行った。

目次

- 一、遺跡の位置と環境……………61
- 二、調査の経過……………62
- 三、調査の成果……………62
- 四、結語……………69



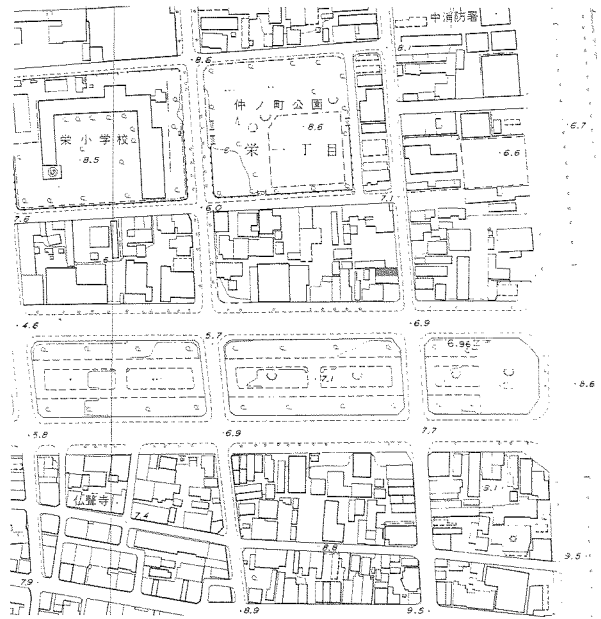
第1図 遺跡の位置 (丸印) [2万5千分の1地形図「名古屋北部・名古屋南部」]

一. 遺跡の位置と環境

豎三蔵通遺跡は、名古屋市の都心部に位置している。名古屋駅から東南へ約1.1kmの距離である。標高5～10mの台地上に立地し、台地西縁下を流れる堀川をはさんで西は沖積平野である。

本遺跡の名称となった「豎三蔵通」は、錦通から若宮大通に至る南北道路であるが、江戸時代には三ツ蔵筋又は豎三蔵と呼ばれていた。この名称の由来は、広小路の南に尾張藩の御蔵があったことからきている。この御蔵は福島正則が清洲城へ入城した時に、場内に長さ30間の米蔵を3棟建てたことに始まり、松平忠吉が城主となった頃これを三ツ蔵と呼んだらしい。慶長遷府、いわゆる清洲越えとなり名古屋の地へ数十の蔵を建ててもなお昔通り三ツ蔵と呼ばれ続けた。明治時代になり御蔵は取り壊されたが、東西道路である三蔵通と共にその名を今日に残しているのである。

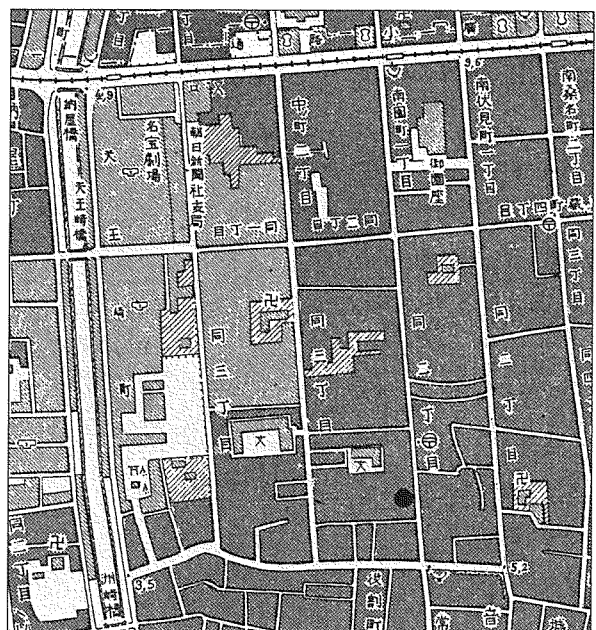
旧石器時代から縄文時代草創期の石器をはじめ、縄文時代早期、中期の土器などが出土している。弥生時代以降では、弥生時代後期の土器が西南部で出土している。古墳時代から古代にかけては住居跡や古墳の周濠など、中世では城館の堀が検出されている。近世には、名古屋城下町の一角を占め、当地は武家屋敷地であった。そのため、敷地に掘られたごみ穴からは多量の陶磁器が出土している。明治時代以降は、城下町を継承し市街地の中心として発展したが、太平洋戦争中に空襲を受け大半の地域は被災した。遺跡の南側には、東から西に抜ける谷があり、戦前まで小河川（紫川）が流れ竹藪になっていた。旧紫川遺跡の発掘調査では、旧護岸を検出している。この小谷は、太平洋戦争後に川と共に戦災復興計画により埋め立てられ、若宮大通りとなった。



第2図 調査地の位置(網部) (S=1:5,000)



写真1 調査地付近(1986年撮影)



第3図 昭和12年頃の調査地(丸印)付近

二. 調査の経過

調査地点附近は、集合住宅、商店、オフィスビル等の密集地域である。今回は個人住宅建設が計画されたため、建設予定範囲を対象に発掘調査を行った。

本遺跡は、台地上に立地しているが、遺跡範囲の東側（国道 19号線）から南側（若宮大通）にかけて谷地形が入っている。1986（昭和61）年に実施した第5次、第6次調査は、この谷に下る斜面を調査した。当地は第6次調査地に近接した地であり、緩斜面上に位置していることが充分予想できた。

そのため、調査は、建築物の基礎工事掘削深が0.9mであることから、基盤層である熱田層までは及ばず、包含層までも達しないと思われたため、当初から表土を対象として調査することとなった。

調査区は、東西約15m、南北約4mに設定し、発生土の積み置き場所を確保するために、東西2半に分け、西半区を先に調査し、埋め戻した後東半区を調査した。調査は、西半区は9月19日～20日、東半区は9月21日～22日で行った。

三. 調査の成果

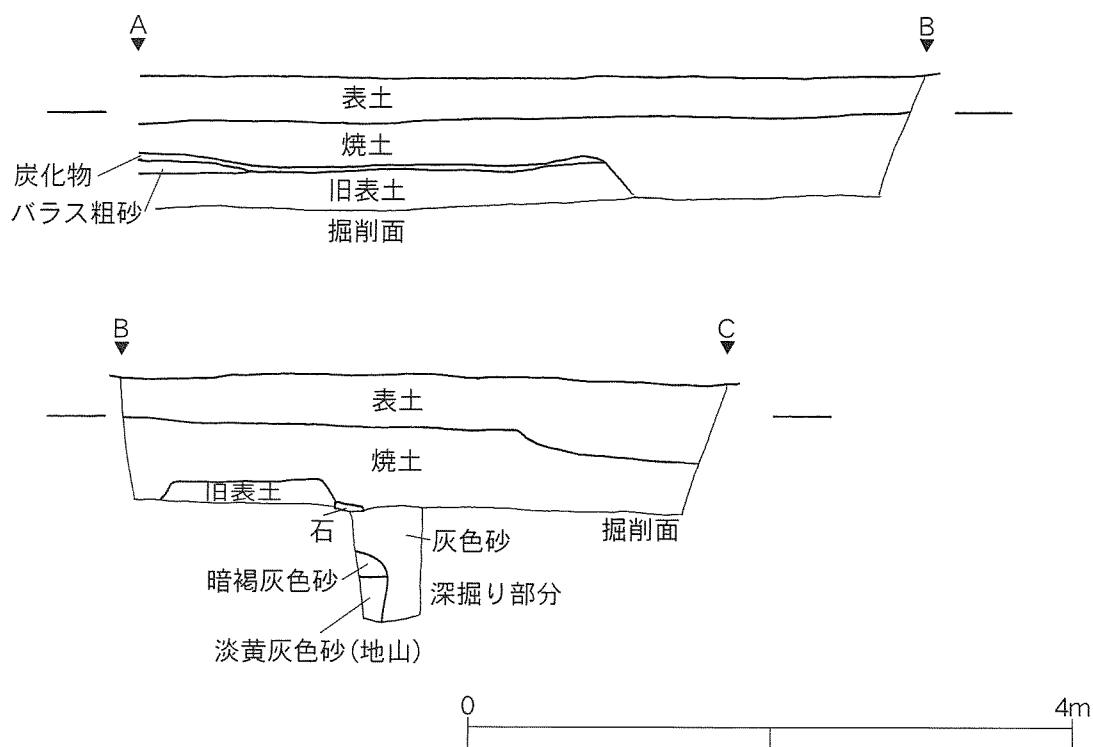
1 基本土層

当調査区で検出した土層は、当初の予想通り表土層であった。細分すると、第1層は暗褐色砂質土（地表から約30cm）、第2層は戦災焼土層（30～60cm）で旧表土面に至る。掘削深が旧地表面とほぼ同じであった。調査区内の北よりで検出した敷地境の石から北側は、旧地表面は約20cm高いレベルであった。また戦災焼土層は、場所によっては現地表面直下において検出された。旧表土面上には炭化物の層が3～5cmの厚さで堆積していた。当地も火災によって焼失したことを物語っていた。戦災焼土層の大半は焼けた瓦と焼土塊で、瓦層といってもよいほどである。焼土塊は木造家屋の壁土と思われる。

調査区中央部を約70cm深掘りしたところ、熱田層（淡黄灰色砂）を地表下1.34mで検出した。その上位には10～16cmの厚さで暗褐灰色砂層が堆積していた。この層は、出土した陶磁器から近世の包含層である。また、ほぼ中央部より南は熱田層が検出されず、さらに深く旧表土層が堆積していることが判明した。この段差は、旧地表面で検出された境界石の位置とほぼ一致している。近世においては崖状になっていたものと思われ、戦前までこの地境が踏襲されていたのであろう。



写真2 北壁土層



第4図 土層断面図(S=1:50)

2 検出遺構

西半区では煉瓦積みの小規模な建物基礎、排水枡、排水口、境界石、東半区は礎石、境界石、排水枡を検出した。

小規模な建物基礎は、煉瓦積みで表面をモルタル塗りで仕上げている。東西約2.16m、南北約1.16mを測り、西半分内部は、高さ約36cmで内部は東にわずかに傾斜を付けたフラットな面をもつ。東半分は地表面とほぼ同じ高さで、モルタル仕上げがされている。南側の煉瓦壁の一部に穴が開いている。建物の南側は、モルタル仕上げで土間が作られ、鉄製排水管孔がある。土間の上面には炭化物やガラス窓の破片が散乱していた。以上のことから、この小規模な建物基礎は、風呂場の土台部分と考えられる。風呂場の排水がこの排水管孔に流れるようになっていた。

この建物に接して北側には花崗岩の幅12cm、長さ3m、厚さ15cmの長石があり、その北側には内法36cmを測る排水枡がある。また東寄りで検出した排水枡は、境界石の南側に位置する。内法は36cmを測り、奥の枡と同じ大きさである。

調査区のほぼ中央では、河原石5個を南北に並んで検出したほか、東寄り南壁際でも2個検出した。これらは、家屋の基礎となる礎石と考えられる。東寄りの枡から風呂場まで約10mを測る。間口は不明であるが、奥行き5間半の家屋が建っていたのであろうか。

3 出土遺物

戦災で焼けた多量の瓦、陶磁器、ガラス瓶等が出土し、コンテナケース2箱分を採集した。

磁器 第7図1～4(写真7)は、国民食器と呼ばれる白色無釉磁器である。井(2・写真19)は、口径16.4cm、器高7.6cmを測る。高台内面に「瀬716」が印刷されている。別の井(5・写真20)は「瀬

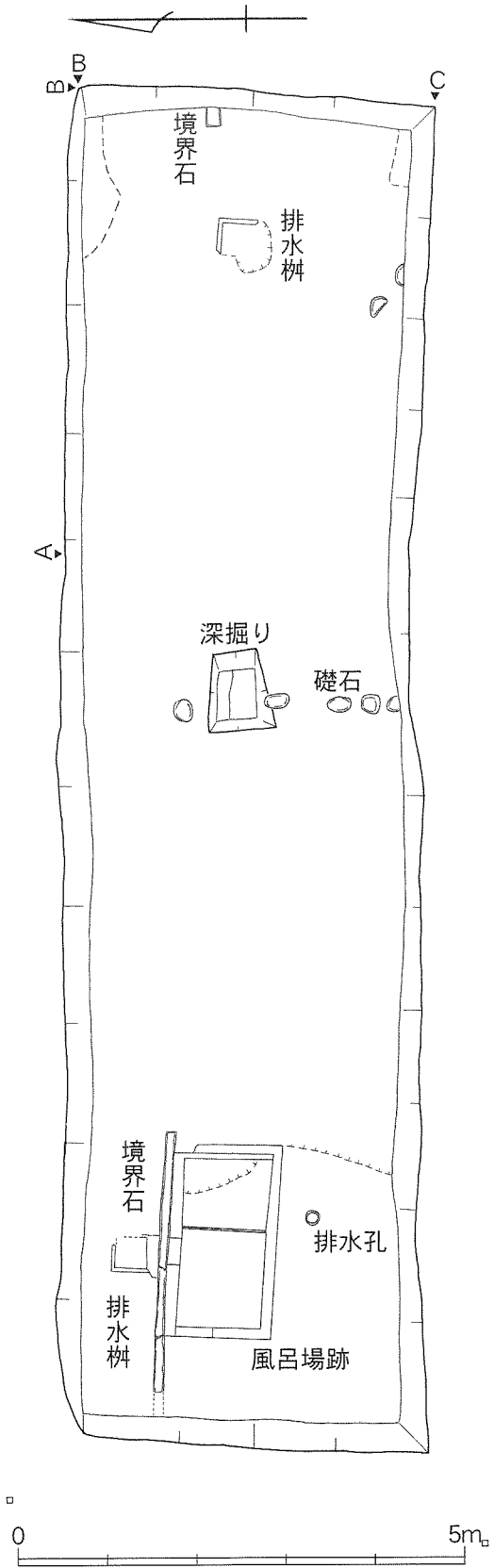


写真3 調査区西半全景



写真4 調査区東半全景

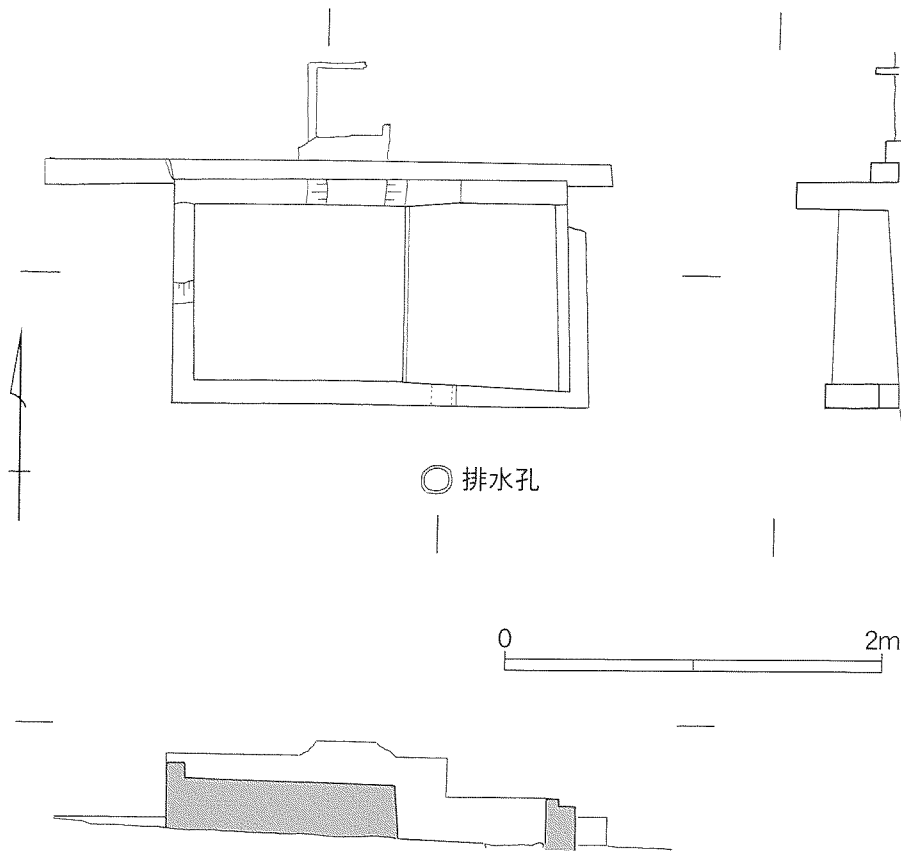


写真5 風呂場跡



写真6 建物基礎

第5図 調査区平面図

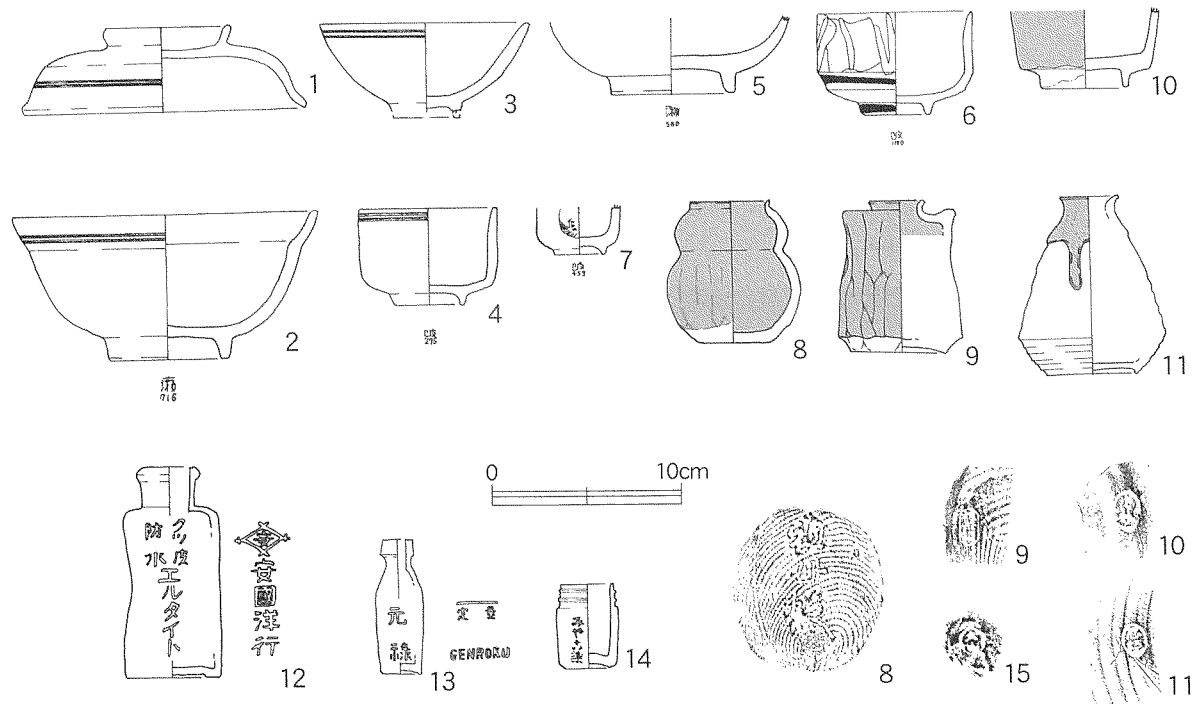


第6図 風呂場跡
(S=1:40)

560」である。井蓋（1）は、口径14.2cm、器高4.3cmを測る。茶碗（3）は、口径11.4cm、器高4.7cmを測る。湯飲み（4・写真16）は、口径7.2cm、器高5.1cmを測る。高台内に「岐275」が印刷されている。湯飲み（6・写真8右上, 17）は、口径8.2cm、器高5.4cmを測る。高台内に「岐1180」が印刷されている。小坏（7・写真18）は、高台内に「岐459」が印刷されている。

「岐〇〇」は、岐阜県陶磁器工業組合の『生産者別標示記号』によれば（註1）、「岐275」は、岐阜県土岐郡土岐津町高山（安藤敏之）、「岐1180」は、岐阜県土岐郡笠原町滝呂（井澤梅次郎）、「岐459」は、岐阜県土岐郡土岐津町土岐口（丹羽兼九郎）が生産工場である。「瀬〇〇」は、同様に瀬戸を指し、湯飲み茶碗高台に「品3」（写真21）は、瀬戸の品野（陶磁器工業組合）を指すと思われる（註2）。

写真8左上, 22は、碗で口径11.2cm、器高5.9cmを測る。高台内に赤字で「日陶」銘がある。日陶は、日本陶器合名会社（明治37年～現在ノリタケカンパニーリミテッド）である。写真15上は、外面に「（大）日本国防婦人（會）」と書かれる。大日本国防婦人会は、昭和7年10月に結成され、昭和17年2月に大日本婦人会に統合したため解散した（註3）。除隊記念小坏は、内面に上絵付で日章旗が描かれ、高台内に上絵付金字で「歩三三」とあるもの（写真15右）と、内面に上絵付で日章旗と桜花が描かれ、金字で「□念」とあり、桜花びら形の高台内に上絵付金字で「玉置」とあるもの（写真15左）がある。歩三三は、歩兵第33聯隊で三重県久居市に兵営がある。置物壺底部片（写真23）は、底面に染付「川本半助」銘。川本半助は、近世末瀬戸窯の窯元で、代々川本半助を名乗った。皿底部片（写真24）は、「N o r i t a k e MADE IN OCCUPIED JAPAN」とある。占領下の輸出用洋食器である。ほかに「昇陶軒」銘皿片、上絵付で「昭和硬質陶磁器 SHOWA-TOJIKI」銘皿片、碇子（写真14）



第7図 遺物実測図・拓本 (S=1:4, 拓本はS=1:2)

がある。

陶器 茶入れ(8・写真13左)は、底部に窠書きで「祖母懐」と書かれ、(9・写真13右)は底部に刻印「祖母懐」とある。窠書きで書いた「懐」は正確ではなく「懐」風に崩し字で書かれている。ほかに「萬古」の刻印のある湯飲み茶碗、「忍焼」の刻印がある徳利(11)、「久山」の刻印(15)がある碗の破片、判読不明の刻印(10)がある碗がある。徳利(11・写真9左上)は、下太りの形態を呈し、体部下半、底部に回転ヘラケズリ調整を施す。口縁部から頸部にかけて厚く釉がかけられる。また忍焼については、昭和3年大連から瀬戸に小森陶磁器研究所を移し、山茶窯を開いた小森忍のものであろうか。久山は、明治初期に大阪附近で茶器を焼成した柴田久山であろう(註4)。

近世陶磁器には碗の破片がある(写真25)。

瓦 棧瓦、軒棧瓦、鬼瓦、軒丸瓦がある(写真10)。

ガラス製品 薬瓶、ビール瓶、化粧容器等がある(第7図12~14・写真11,12)。第7図12は、被熱により一部が歪んでいる。14は「みや古染」とエンボス文字が入る。

金属製品 鉄製碗2点、戸車、ライター、銅銭2点がある。銅銭のうち1点は「寛永通宝」、もう1点は錆のため不明である。

註1 岐阜縣陶磁器工業組合編『生産者別標示記號』1941(『土岐津町誌史料編』1999所収)

註2 沼崎 陽「戦時下の『生産者別標示記號』(いわゆる統制番号リスト)を実見して」『東京考古17』1999 東京考古談話会

註3 出征者の送迎、軍事扶助から昭和12年中戦争開始後は、消費節約、毛布献納など次第に国民生活の統制機関としての役割を果たした『國史大辞典8』1987 吉川弘文館

註4 刻印銘は『原色陶器大辞典』1972 淡交社による。



写真7 磁器(国民食器)

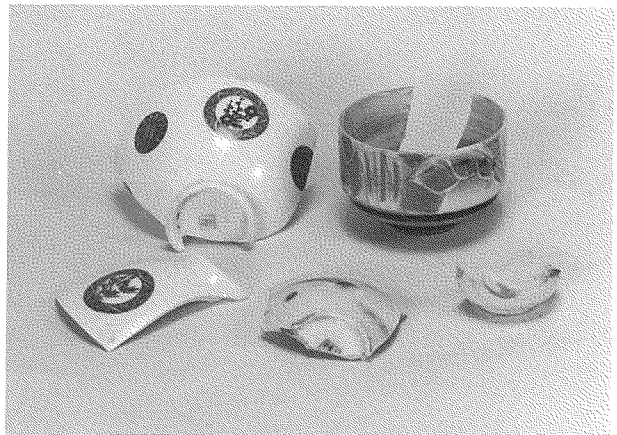


写真8 磁器



写真9 陶器



写真10 瓦



写真11 ガラス製品

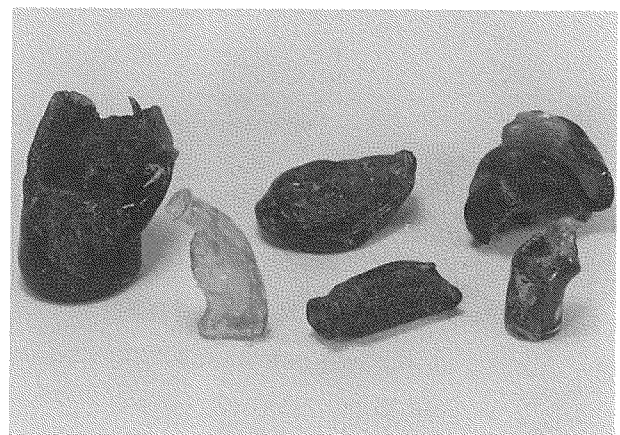


写真12 ガラス製品(被熱によりゆがむ)

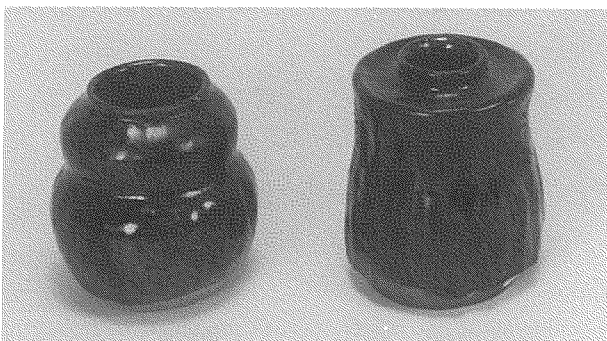


写真13 陶器(茶入れ)



写真14 磁器(罌子)

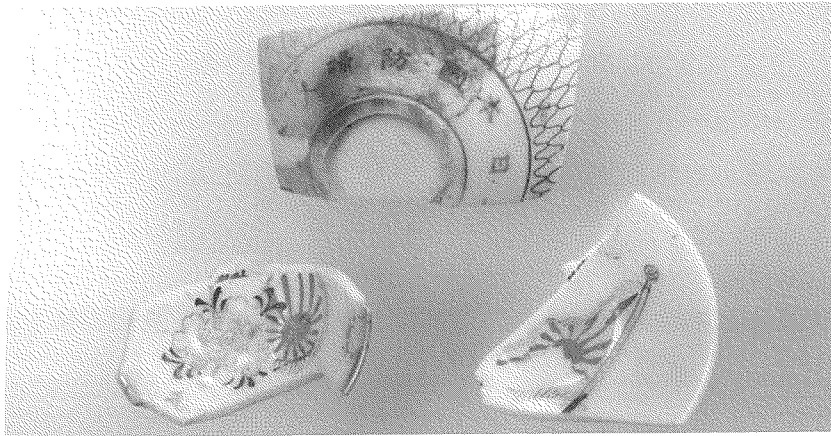


写真15 磁器



写真16 磁器(湯飲み)



写真17 陶器(湯飲み)

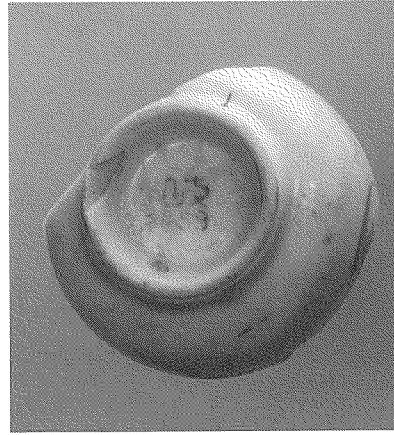


写真18 磁器(杯)



写真19 磁器(丼)



写真20 磁器(丼)



写真21 磁器(湯飲み)

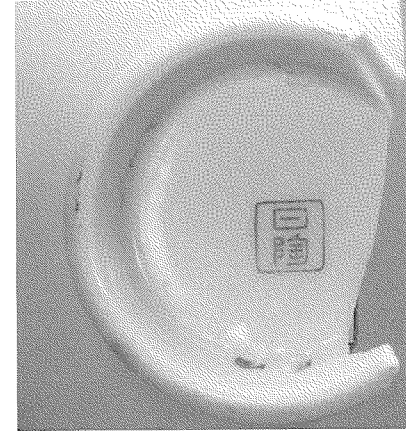


写真22 磁器(碗)



写真23 磁器(壺)



写真24 磁器(皿)

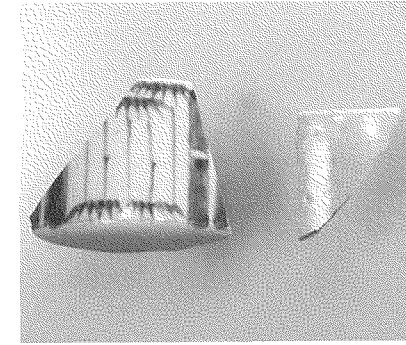


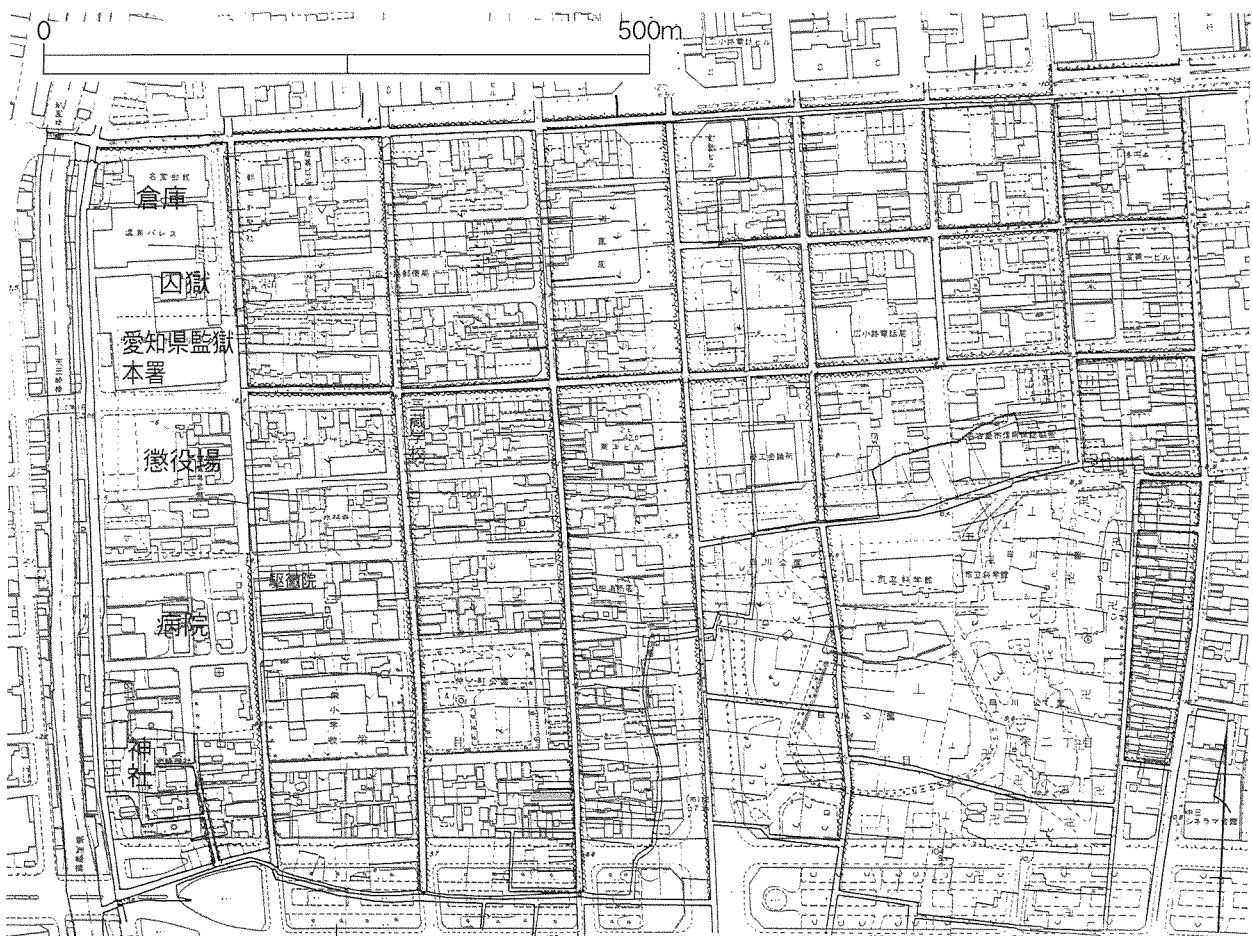
写真25 陶磁器(碗)

四. 結語

今回の調査では、太平洋戦争前後の旧地表面を検出した。わずかな面積ではあったが、空襲に遭い焼けたと思われる建物跡や陶磁器、熱で溶けたガラス製品等が出土し、旧地表面上には炭化層が堆積し、多量の焼けた瓦で覆われていた。空襲で焦土となった名古屋の街の一角が検出されたわけである。資料によれば(註1)、本調査地周辺は、度重なり空襲を受けたことから、出土した遺構や遺物がいつの被災かは明らかにできないが、出土した橙色に変色した多量の瓦、赤橙色の焼土、漆黒の炭化物、また熱で溶け歪んだガラス瓶などは、空襲の被災の様子、その恐怖や悲惨さを物語るものであった。

註1 米軍のB29爆撃機による名古屋空襲は、精密爆撃によって市内にある軍需工場、特に航空機生産を壊滅させること、地域爆撃によって市民の生活を麻痺させることにあった。名古屋市の人被害は、死者8,207人、負傷者1万5,333人、罹災者52万2,951人であった。建物の被害は、13万6,738戸、被災地面積は全市平均で約24%、中心部では50%を越えていた。昭和20年12月の名古屋市の人口は、66万9,177人で、罹災前(昭和19年12月)の115万8,974人と比べるとほぼ半減していた。

市街地中心部が空襲を受けたのは、昭和20年1月3日、8日、23日、3月12日、19日である。特に3月11日午後11時45分から翌日3時20分までの空襲は、B29・285機が1,793トンの焼夷弾を投下し、中、栄、中川区を中心に2万4,500戸が全焼、罹災者10万人、死者519人を出した。また、19日午前2時から4時50分までの空襲は、B29・290機が焼夷弾1,862トンを投下、中、栄、中村区を中心に3万6,000戸以上が全焼、罹災者15万人、死者826人を出した。



第8図 明治17年地割と現在の街区(アミ部) 網部が調査地(S=1:5,000)

山田英彦「名古屋大空襲の全貌」『名古屋大空襲展』1985 朝日新聞社 を参考に記述した。数値の一部は、名古屋市会事務局編『総合名古屋市年表(昭和編2)』1966 小出裕・佐藤明夫編『戦時下・愛知の諸記録 不完全データ2000』2000 による。

3月12日の空襲は、栄区では久屋、白川、南久屋、東新、大成、中ノ町、八重、御園、東田聯区が被害に遭う。死者40人、重軽傷者87人、全焼住居4,011戸、罹災者14,817人で、八重、市第二幼稚園、県一女各校全焼、南久屋、白川、大成各校半焼、知事、内政部長官舎、明治生命、丸栄百貨店が全焼した。

3月19日の空襲は、栄区では東新、南久屋、白川、久屋、八重、大成、東田、下奥、小川、中ノ町、御園、本町が被害に遭う。死者215人、重軽傷者734人、全焼住居11,696戸、罹災者41,444人で、本町、久屋、小川、南久屋、御園、桜橋、中京高女各校全焼、護国神社、那古野神社、帝銀名支店、栄税務署、安田ビル、千代田ビル、万平ホテル、御園座が全焼した。

名古屋市防衛部指導課編「名古屋市における空襲被害調査」『名古屋空襲誌 第3号』1977による



写真26 戦災を受けた名古屋市街地(1945年4月頃日本軍撮影) 国土地理院蔵



写真27 戦後直後の調査地周辺(1946年6月7日米軍撮影)国土地理院蔵



写真28 昭和30年代の調査地周辺(『建築のあゆみ』より)

報告書抄録

| ふりがな | まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしよ | | | | | | | |
|----------------------------|--|-------|------------|-------------------|--------------------|----------------------------|------------------------|------------------------|
| 書名 | 埋蔵文化財調査報告書 | | | | | | | |
| 副書名 | 正木町遺跡(第12次)・(第13次) 伊勢山中学校遺跡(第8次) 尾張元興寺跡(第9次) 豎三蔵通遺跡(第15次) | | | | | | | |
| 巻次 | 38 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 名古屋市文化財調査報告 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 51 | | | | | | | |
| 編著者 | 藤井康隆・木村有作・野澤則幸・服部哲也・伊藤厚史 | | | | | | | |
| 編集機関 | 名古屋市見晴台考古資料館 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒457-0026愛知県名古屋市南区見晴町47 TEL 052 (823) 3200 | | | | | | | |
| 発行機関 | 名古屋市教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒460-8508 愛知県名古屋市中区三の丸三丁目1番1号 TEL 052 (972) 3268 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 2001年3月30日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コ ー ド | | 北緯 〇°〃 | 東経 〇°〃 | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| まさきちょういせき 正木町遺跡 | なごやしなかくまさきいっちょうめ 名古屋市中区正木一丁目1819 | 23100 | 7-19 | 35° 08′ 45″ | 136° 54′ 05″ | 2000年4月19日 ～2000年5月12日 | 56m ² | 個人住宅建築にと もなう事前調査 |
| まさきちょういせき 正木町遺跡 | なごやしなかくまさきいっちょうめ 名古屋市中区正木一丁目1516-6,7,1505の一部 | 23100 | 7-19 | 35° 08′ 51″ | 136° 54′ 02″ | 2000年11月14日 ～2000年12月8日 | 90m ² | 店舗兼個人住宅建築 にともなう事前調査 |
| いせやまちゅうがっこういせき 伊勢山中学校遺跡 | なごやしなかくまさきにちようめ 名古屋市中区正木二丁目707 | 23100 | 7-20 | 35° 08′ 41″ | 136° 54′ 00″ | 2000年7月17日 ～2000年7月31日 | 100m ² | 個人住宅建築にと もなう事前調査 |
| おわりがんごうじあと 尾張元興寺跡 | なごやしなかくまさきよんちようめ 名古屋市中区正木四丁目1014-1 | 23100 | 7-22 | 35° 08′ 22″ | 136° 53′ 59″ | 2000年8月16日 ～2000年9月8日 | 40m ² | 個人住宅建築にと もなう事前調査 |
| たてみつくらどおりいせき 豎三蔵通遺跡 | なごやしなかくさかえいっちょうめ 名古屋市中区栄一丁目2519 | 23100 | 7-4 | 35° 09′ 34″ | 136° 53′ 58″ | 2000年9月18日～ 2000年10月13日 | 60m ² | 個人住宅建築にと もなう事前調査 |
| 所収遺跡名 | 種 別 | 主な時代 | 主 な 遺 構 | 主 な 遺 物 | | 特 記 事 項 | | |
| 正木町遺跡 | 集落跡 | 中 世 | 溝、ピット、近代道路 | 陶器、土鍋、羽釜、土師皿、瓦 | | | | |
| 正木町遺跡 | 集落跡 | 中 世 | 土坑、堀 | 陶器、土師器、硯 | | | | |
| 伊勢山中学校遺跡 | 集落跡 | 古墳、中世 | 土坑、土坑 | 須恵器、土師器、玉類 | | 初期須恵器を含む | | |
| 尾張元興寺跡 | 寺院跡 | 古代～近世 | 溝、瓦溜り、土坑 | 瓦、土器 | | | | |
| 豎三蔵通遺跡 | 集落跡 | 弥生～近代 | 近代住宅跡 | 陶磁器 | | | | |

名古屋市文化財調査報告51
埋蔵文化財調査報告書38
2001年3月30日

編集 名古屋市見晴台考古資料館
発行 名古屋市教育委員会
名古屋市中区三の丸三丁目1番1号
印刷 株式会社 ピア

